京都婚約旅行殺人事件

山村美紗



《著者のことば》

男女二人の旅行でも、新婚旅行と婚約旅行とでは、大きな違いがある。新婚旅行は大勢の人に祝福され、認められた旅行であるのに対して、婚約旅行には秘密の匂いと、不安がある。

この危険なカケである婚約旅行に出かけた美しい女性に、次次と起こる殺人事件の謎と、恋の推移をお楽しみ下さい。婚約旅行には、くれぐれもお気をつけて！

京都婚約旅行殺人事件

山村美紗

小学館

デザイン——玉井ヒロテル
カバーイラスト——深井国
本文イラスト——中州ささ

京都婚約旅行殺人事件——目次

第一章　レイプ——9
第二章　秘密の夜——27
第三章　婚約指輪——44
第四章　京都旅行への誘い——62
第五章　密室殺人——79
第六章　密会——97
第七章　誕生祝いのパーティ——114

第八章　新しい殺人——132
第九章　もう一人の男——148
第十章　真相——166
第十一章　京都への旅——182
第十二章　迷路——198
第十三章　新婚旅行——214

第一章　レイプ

1

林由美は、京都への旅に出た。

大学生活もあと数ヶ月で、就職もきまったからと友だちや両親にはいったが、本当は、失恋の悲しみをまぎらわせるためである。

二年近くもつき合っていた中原次郎が、大手の銀行に就職が内定してから、急に冷たくなったのだ。

考えてみると、そのきざしは、六月頃からあったように思う。

就職運動で忙しいからと、デートが途切れがちになったとき、気づくべきだったのに、由美は、彼の言葉を信じていた。

別れ話を彼が持ち出したのは、十月になって彼の部屋へ行ったときだった。

「君とつき合った二年間は、とても楽しかったよ。思い出も一杯ある。でも、結局、軀の関係はなかったよね。残念だけど」

彼は、軽く切り出した。

「だって、妊娠したりしたら、大学やめないといけないでしょう？　うちは、堅い家庭だし、そんなことになったら、家中大さわぎになって、あなたと二度と会えなくなるわ。だから、卒業まで待ってといったのよ」

由美は、何も気づかず甘えた口調でいった。

卒業して就職したら、彼に家に来て、結婚の申し込みをして貰い、正式に婚約したいと、彼女なりに、

夢を描いていたのだ。

〈婚約したら、軀を許してもいいわ。親が反対したら、家出をしてもいい〉

とも、考えていた。

そして、そのことは、彼にも充分話していたはずである。

「男は、そういうの嫌いなんだよな。計算された通りに動くというのが。鉄は、熱いうちに打てっていうじゃない。君にじらされているうちに、だんだん気持ちがさめてきちゃったんだよね」

「えっ、どういうこと？」

「どういうことって、そういうことだよ」

「だって、最後まではいかなかったけれど、ぎりぎりのところまでは……」

由美は、蒼ざめた顔でいった。やっと、別れ話らしいと気がついた。

たしかに、妊娠するようなことまではしなかったけど、キスもしたし、ハードなペッティングまでは許している。

〈最後まで行かなかったのは、長いつきあいになると思ったので、彼に飽きられないために、それだけは、とっておこうと思ったのに……〉

彼は、黙っている。

「じゃあ、どうなるの？　私たち」

「別れようよ」

彼はあっさりいった。

「そんな……」

「新しい職場に行ったら、もっと素敵な彼が見つかるよ。それに、面接のとき、きかれたんだ。『恋人とか、婚約している相手がいますか？』ってね。そのとき、『いません』て答えてしまったんだよね。むこうは、そんな女性がいたら、仕事も手につかないだろうし、勤務地とか、転勤についても、どこじゃないとイヤだとかいうので困ると思っているのが、ミエミエだったからね」

「どうして、恋人がいるっていってくれなかった

の？」

　由美は、涙声でいった。

「あの銀行に受かりたかったこともあったけど、君とは、多分、もう駄目なんじゃないかという気がしていたからね」

「どうしてなの？　私は、あなたと結婚するつもりだったのに」

「もし、深い関係になってたら、責任とらなきゃ仕方がないけど、そうでないとしたら、結婚は、まだ早いという気がするんだよね。就職したら、当分は、がんばって、仕事一すじにいって、結婚は、五年くらいあとになると思うし……」

　中原は、さめた顔で、煙草をつけた。

〈嘘だわ。私より仕事をとりたいというのは、口実で、本当は、別の女性が出来たか、飽きてしまったんだわ〉

　と、わかりながらも、由美は、とり乱して、半狂乱になった。

　いつも、この人には捨てられるのではないかと思うような関係なら、覚悟が出来ていただろうけど、由美の場合は、彼に惚れられていると思い込んでいたからである。

　大学の二年のとき、熱心にいい寄って来たのは、彼の方である。当時、由美には、片想いしている一年上の先輩学生がいて、最初は、気がむかなかったのに、彼は、どこまでもアタックしてくる。

「映画に行かない？」

　とか、

「お茶飲みませんか？」

　と、誘ってくる男の学生は多かったが、一、二度断ると、もういっては来なかった。それなのに、中原は、ケロッとして、またいってくる。それも、軽い調子である。

「ね、映画行こうよ」

　といって、断ると、

「じゃ、この券あげる。一人で行ってもつまらない

からね。誰かと行ってよ。なるべくなら、女の子とね」

と、二枚の前売券を渡して行ってしまう。

「今度出来た、『ハーフ』って店へ行かない？　一人で嫌だったら、友だちと一緒でもいいけど」

と、喫茶店へ誘う。

喫茶店くらいならと、友だちと一緒に行っているうちに、大学のそばの店で、昼食をおごられ、やがて二人でパブへ、という風に、いつの間にか、のせられていった。

キスも、最初は、

「手にキスさせてよ。手だったら洗えばすむじゃない？」

といい、やがて、額になり、次には頬といいながら、あっという間に唇にしてしまったというわけで、いつも、一方的に彼が惚れていて由美が優位にいたはずだった。

「好きだよ」

とか、

「愛してる」

と、いつもいってくれたから、まさか、彼に捨てられるとは思ってもみなかったのだ。

由美は、自分でも気づかぬうちに彼が好きになっていき、彼と結婚するものだと思い込んでしまっていた。

〈今さら別れられない〉

と思い、泣いても駄目だと知ると、いきなり裸になって、

「じゃ抱いて」

とまでいったのだが、彼に、

「やめようよ。君らしくもない」

と、冷たく拒否されてしまった。

屈辱感に、蒼白になった顔で、服をつけ、由美は、彼の部屋をとび出した。

軀を許さなかったにもかかわらず、由美は、深い傷を負ってしまった。

2

彼と別れて一ヶ月の間、由美は、あきらめられず何度も、彼の家へ電話した。最初のうちは、彼も、仕方なく相手をしてくれたが、とうとう留守番電話になってしまった。

「はい。中原です。只今、外出中ですので、ご用の方は、また、掛け直して下さい」

というテープは、彼女の電話を断るためだけのものらしく、留守番電話によくある、「ピー」という音がしたら、伝言して下さい。あとで、連絡します」という言葉は入っていなかった。

彼の姿を大学で見ても、「やあ」というだけで、さっさと行ってしまう。

由美は、落ち込んで、大学も休むようになった。〈彼のいる東京にはいたくない。どこかへ旅行して、気持ちの整理をしたい。でないと、ノイローゼになってしまう〉

と思い、最後の気力を出して京都までやって来たのだった。

京都は、観光シーズンで賑っていた。

お寺や、名所旧跡、どこへ行っても、仲のよさそうな新婚や、恋人同士の姿が目につく。

旅に出たことで、かえって、孤独感が増して行くようだった。秋という季節のせいもある。

二日目に、由美は、嵯峨野へ行こうと思いたった。観光案内のパンフレットに、嵯峨野には圧倒的に若い女性の観光客が多いと書かれていたからである。

その中にまぎれ込んでいれば、誰からも、異和感を持たれずにすむのではないかと思った。

最初に行ったのは、天竜寺だった。

さすがに、京都五山の第一位に位置するといわれる寺だけあって、壮大で、広々としている。

廻遊式という庭園には、樹々が紅葉して美しく、池には、大きな鯉が泳いでいた。

じっと、鯉を見ているうちに、少しは、心が落ち着いてきた。

〈京都に来てよかった〉

そう思ったときだった。

「大きな鯉だなあ。これ、食べるかな」

と、うしろから声がした。

ふり返ると、二十五、六歳の背の高い男が、ジーパンをはいた同じくらいの年齢の男と、パンをちぎっては、池に投げ込んでいる。

鯉は、たちまち集まってきて、まるで、ラグビーのボールをタックルするように、奪い合って食べる。

「この赤い鯉がボスかな？　これぱっかり、一人占めして食べてるなあ。もっと遠くに投げたらいいんじゃないかな」

「駄目だな。うまくいかない」

男たちは、話しては、パンを投げていたが、由美が見ているのに気づくと、

「これ、やってみませんか？」

と、パンの端をわたしてくれた。

「ええ」

由美は、素直に受け取って、同じように、ちぎっては投げた。

全部やってしまうと、男たちは、

「ああ、もう終わりだ」

と、手を払い行ってしまった。

その男たちとは、次の野々宮神社でも、大河内山荘でも、出会った。

大河内山荘というのは、俳優の大河内伝次郎の持っていた邸で、広大な庭からは、あたりの景色が一望できる。

女性が多いときいていたが、やはり、男女のペアが多かった。

下の道におりて歩き出していると、車に乗ったさっきの男たちが、声をかけてきた。

「どこまで行くんですかあ？」

「念仏寺まで」

「じゃ、遠いですよ。僕たちも一緒だから、乗せて行ってあげましょう。前でおろしますから」

由美は、どうしようかと考えたが、まだ明るいし、観光客もぞろぞろ行くので、乗せて貰うことにした。

車の中で、背の高い男がきいた。

「どこから来たんですか？」

「東京からです。そちらは？」

「僕たちは、大阪からです」

男たちは、会社につとめているのだといい、名前を名乗った。

背の高い方が、田中で、ジーパンの方が、池野だという。由美は、名字はいわず、名前だけ教えた。

「大学生で、ユミです」

念仏寺へ行くと、由美は、男たちと、石仏の間をまわり、自分のカメラで写真をとって貰った。

「一人では、景色と自分を入れてとれないので、助かりましたわ」

田中は、カメラに慣れているらしく、うまく操作して、石仏や、寺殿を背景に、何枚もとってくれた。

「次は、どこですか？」

念仏寺がすむと、男たちは、きいた。

「えーと、祇王寺や、常寂光寺をまわりたいんですけど。あ、それから、落柿舎とか」

「いいですよ。歩くと大変ですから、車で行きましょう」

男たちは、気持ちよく、車に乗せて送ってくれた。

由美の気持ちは、段々晴れてきた。

〈中原次郎より、背は高いし、ルックスもいい。世の中には、こうして、ちょっと外に出ただけでも、いくらでも、いい男がいるんだわ〉

由美は、久しぶりに明るい顔になり、男たちと話した。

3

男たちが、狼に豹変したのは、あたりが少し薄暗

くなって、小雨が降ってきた時だった。
徒歩の観光客たちは、雨が来そうだというので、早く帰途についたようだったが、車のある由美たちは、雨の降るぎりぎりまで、寺をまわっていた。
畑が続き、人里離れた嵯峨野の道を走っていた車が、ブレーキをきしませてとまり、背の高い男が、傘をさして外へ出て行ったときも、由美は、道がわからなくなったのだと思っていた。
しかし、彼の姿が消えると同時に、運転していたジーパンの男が、突然、助手席の由美に躍りかかって来た。
「いやっ！　やめてっ」
由美は、驚いて大声を出し、逃げようとしたが、あっという間に、シートが、リクライニングして、あおむけになってしまった。
シートは、特別仕様なのか、ベッドのように水平に倒れ、上から、男がのしかかってくる。
重い男の体重で、身動きも出来ない。
それでも、必死で手を振りまわして、払いのけようとしたが、池野というその男は、その両手をがっちりと片手でつかみ、片手で、由美の頬を思いっきりはりとばした。
「あっ、痛い！」
叫んだが、その一撃で、由美は、失神しそうになった。続いて二発、三発と叩かれて、由美は、ぐったりとしてしまい、迫ってくる男の唇を、左に右にかわすだけが、精一杯だった。
男は、遂に由美の唇を捕え、片手で、あっという間に、由美のパンティをはぎとった。
ワンピースの裾をたくしあげられ、下半身がむき出しになり、男は、にやりとして、手を差し入れて来た。
最後の力をふりしぼって、由美は足をばたばたして暴れた。しかし、それは、かえって、男を挑発し、ふるいたたせるだけのことだった。
男は、素早くズボンをぬぎすて、投げ矢が的を狙

うような勢いで、押し入って来た。
「ああっ、うっ！」
由美はうめいて、のけぞった。しかし、それはもちろん快感のためではなく、苦痛のうめきだった。
恐怖と、未体験のため、由美の軀は、こちこちになっていて、どうしても、男の熱い下半身を受け入れることが出来ない。
あせった男は、遮二無二攻撃してきた。
由美が失神し、血を流したとき、男は、ぐったりとして、彼女の上にくずおれた。

4

由美が、失神から我にかえったのは、男二人が、由美を、車から運び出して、草の上へ放り出した時だった。
むき出しになった下半身に、小雨でぬれた草が冷たい。
〈私を捨てて、逃げるんだわ〉
と思ったとき、
「車の中は、狭くて嫌いなんだ」
といいながら、田中という男が、上から、おおいかぶさってきた。
「嫌！　イヤッ！」
由美は、必死で逃げようとした。
密閉された車の中では、逃げる気力もなかったが、外へ出たので、気分的に、逃げられそうな気がしたのだ。
しかし、男の力には、かなわなかった。
男は、猫をなぶるように、ちょっと逃がしては、スカートを引き寄せ、また、逃がしては、上からおさえつけた。
三度目におさえ込んだとき、男は、背中のファスナーを素早くひきおろしたので、由美の軀は、すっかりあらわになってしまった。
軀をおおっているのは、ブラジャーだけである。

男は、上からおおいかぶさって由美の下半身の自由を奪っておいてから、ブラジャーを上にはね上げ、乳房をぎゅっと摑んだ。

「痛いっ！」

由美は、軀をねじった。男は、

「ええ胸や」

と息をはずませながら、唇をおしつけた。

由美は、胸から男の手を払いのけようとしたが、その手を摑まれ、両手を軀の下へ入れられてしまった。

男はそうしておいて、すでに、ズボンをぬぎ捨てた下半身を、狙いをさだめて押し入れてきた。

由美は、軀を左右によじり、それが無意味だとわかると、上へ上へと、尺取り虫のようにのび上がって行った。

それでも、執拗に、男は、攻めてくる。

由美の下半身から、血がしたたりおちた。

再び、遠くなる意識の底で、

〈どうせ、こんな男に奪われてしまうのなら、次郎にあげたかった〉

と、思った。

気がついたとき、由美は、車の後部座席で横たわっていた。

「どこのホテルなんだ。送ってあげるよ」

運転している男がいった。

「……」

由美は、口惜しくて黙っていた。

「服の着がえないの？　仕方がないな。このヨットパーカー着て行け」

男は、紺のビニールのレインコートのような服を投げてよこした。

由美は、ファスナーをひきあげ、ワンピースのスカートを見た。

ぐっしょり濡れて、草の緑色と、泥がついている。

このままで、ホテルに帰ることはとても出来ない。

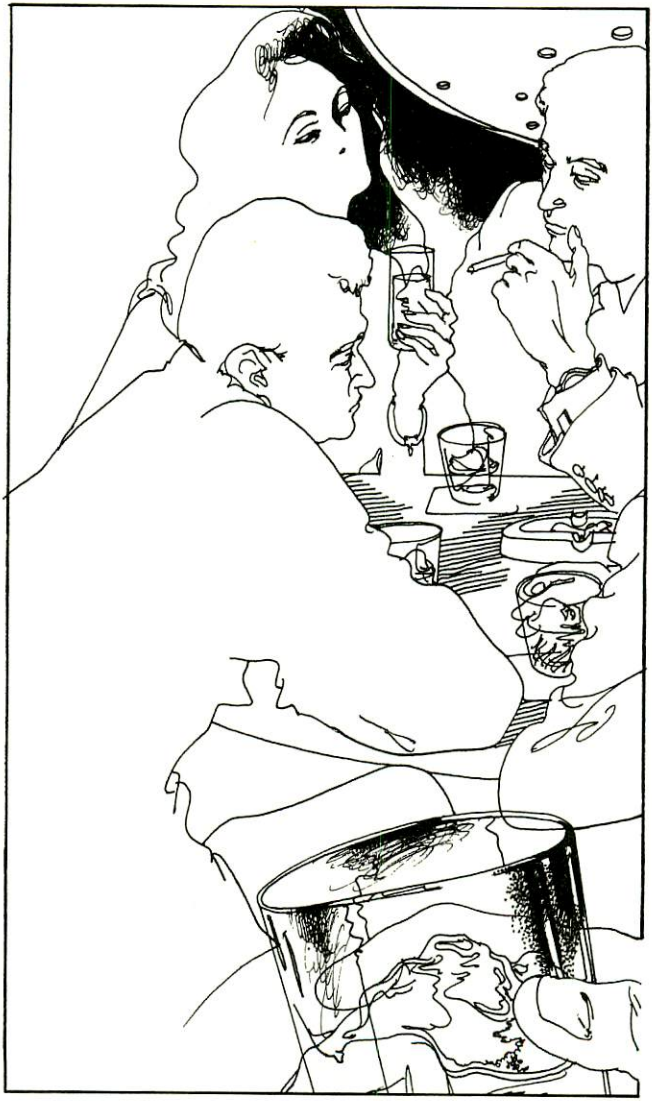
由美は、唇をかみしめて、ヨットパーカーを上に羽

織った。
丈が長く、うまく、腰のところが隠れた。
男たちは、ホテルの名前をいわない由美を、京都駅のところで降ろして、走り去った。
幸い、由美のホテルは、駅から近いグランドホテルだったので、そこから、歩いて戻ることが出来た。
自分の部屋に入ると、ベッドにつっ伏して、由美は思いきり泣いた。
そして、そのあと、バスルームに入って、軀中に、シャワーの雨をふらせた。
軀の奥深いところが、痛み、シャワーの湯に、血がまじっていた。
〈次郎に嫌われるくらい、一生懸命守った軀なのに……。あんなに、あっけなく失うなんて〉
口惜しさに涙を流しながら、いつまでも、由美は、シャワーを浴びつづけた。
翌朝早く、由美は、京都をあとにした。
失恋を晴らす旅が、一層みじめなものになり、男に対する不信感が、胸をしめつけた。

5

それから一年がたった。
由美は、銀行に就職し、毎日忙しく働いていた。
銀行に入ってすぐ、何人かの男性に誘われたが、由美は、一度も応じなかった。
次第に、由美には、男嫌いだという評判がたつようになった。
「あなた、バージンなの？」
ときく女子行員もいた。由美は、イエスともノーとも答えず、ただ笑っていた。
しかし、一年もたつと、由美も次第に淋しくなって来た。
銀行に勤めている女の子たちには、ほとんどといっていいくらい、恋人やボーイフレンドがいる。
銀行というところは、店にやってくる客からの誘

惑も、結構多いところなのである。
それに、行員同士で飲みに行くチャンスもある。
〈一生結婚しないのだったらいいけど、もし、結婚するのなら、そろそろ見つけないと売れ残ってしまう〉
由美は、ときどき、考えるようになった。
そんなとき、大学の時の同窓会があった。
由美は、学生時代より、驚くほど美しくなっていた。学生時代には、あまり化粧もせず、パーマもかけなかったのが、接客業である銀行では、否応なく、身をかまわないといけないので、最近では、結構、化粧もうまくなっていた。
「きれいになったね、見違えちゃったよ」
といったのは、昔、由美があこがれていた一年先輩の井上陽一だった。
「本当？　うれしい。でも、そのいい方は、昔、よっぽど悪かったみたいだわ」
彼と軽くものがいえるのが、不思議な感じがした。
あの頃は、彼の前に出ると、いつも、うつむいていたのだ。
「ごめん。今日、このあと、みんなでカフェバーに行くけどどう？　女の子も、五人くらい行くんじゃないかな」
「行こうかな……」
「じゃ、きまった。あとでね」
その日、由美は、みんなからきれいになったといわれ、久しぶりに、うきうきした気分になっていた。
学生時代には、中原次郎といつも一緒だったから、他の学生は誘って来なかったし、由美の方も、目に入らなかったのだが、今日は違った。
洗面所の鏡で、由美は、自分の顔を映してみた。
色白の肌、型のいい鼻、まつげが反った大きな瞳、ちょっと受け口の唇、それに、カールした栗色の髪が、肩まで波打っている。
由美は、にっこりした。
洗面所を出たところで、ばったりと、中原次郎に



出会った。
「あっ、由美」
といってから、次郎は、急いで、
「林くん」
と、いい直した。
「今日、飲みに行かない？　久しぶりで」
彼が声をかけて来るのも、自分が、美しくなったからだろうと、由美は、満足した。
しかし、彼に甘い女だと思われたくなかった。
「残念だわ。もう、約束しちゃったの」
そういうと、さっさと歩き出した。次郎が見送っているのがわかった。
〈いい気味だわ。私を捨てたバチよ〉
由美は、上気した顔で思った。
井上陽一たちと、カフェバーへ行くと、次郎が、男ばかり三人で飲んでいた。
彼へのあてつけに、由美は、思いきりはしゃぎ、ビールや水割りを何杯も飲んだ。
五人ほど顔みしりの女の子も来ていたが、由美が、断然、この場の女王だった。
あの事件以来、鬱積していたものが、一度にとけて流れ出した感じだった。
井上は、出版社に就職し、週刊誌の担当になっているといった。
「素敵だわ。仕事が面白いでしょう？　銀行なんか駄目ですわ。毎日、お金に使われているみたいで」
由美は、次郎へのイヤ味でいった。
少し酔った由美を、帰りは、井上が、車で送ってくれた。
車に乗った途端に、由美は、はっとして、酔いもさめはててしまった。
京都の嵯峨野でのいまわしい事件を思い出したのだ。あれ以来、男性の車に乗るのは、はじめてだった。
〈この人も、狼に豹変するのだろうか？〉
と思うと、落ち着かなくなって来た。

しかし、井上は、そういうそぶりも見せず、面白い話ばかりして、最後まで、紳士だった。

「では、気をつけて、さようなら」

彼は、由美を車から降ろすと、手をふった。由美も、はじめてにっこりして、手をふった。

「今度、電話していい？　それから、週刊誌送るから」

「有難う、待ってます」

由美は、部屋に入ると、ほっとして、ベッドに腰かけた。

何もなかったという安心感と同時に、ちょっぴり、がっかりもしたというのが本音だった。

華やいだ気持ちで、お風呂に入っているときに、電話のベルが鳴った。

バスタオルを巻いて出てみると、それは、酔っぱらった次郎の声だった。

「あれっ、家に帰ってたの？　てっきり、今頃は、井上さんとどこかへ行ったと思ったのに」

うしろでは、賑やかに音楽が鳴り、人々のざわめいている声がきこえた。

「今、お風呂に入っているところ。電話切っていいかしら？」

「えっ、お風呂に入ってるの？　誰と」

「一人ですっ！　私に電話したって仕方がないでしょう？　切るわ」

痛快な気分で由美は、電話を切った。

何か、ふっ切れた気持ちだった。

〈私だって、女なのだわ。あのことを忘れるためにも、早く、結婚したい〉

由美は、生まれかわったような気分になって、決心した。

6

ある日、由美は、支店長に呼ばれた。

〈何か、失敗したのかしら？〉

不安な気持ちで、支店長室へ入っていくと、いつもは、むずかしい顔をしている支店長が、にこにこして立ち上がった。
「やあ、そこへ座りなさい」
「はい」
「えーと、林くんは、今年いくつだったかな？」
「二十三で、もうすぐ四になります」
〈そんなこと、身上書にかいてあるはずだわ〉
由美は、軀をかたくした。
「結婚する相手は、きまっているの？」
「は？　いいえ」
「だろうね。みんなのうわさでは、男嫌いということだけど、君のように美しい女が、男嫌いというのも、不思議なので、きいてみたんだ。女が好きとか、何か結婚できない事情でもあるのかな？　実は、今日、非常にいい縁談が来て、君を欲しいという申し込みがあったんだけど、あんまり、男のうわさがないから、かえって心配になってね」
「何の欠陥もありませんし、レズの趣味もありません。縁がなかっただけです」
由美は、つんとして答えた。
「そう、それならいいんだ。実はね、南田物産の社長の息子さんが、君を見初めて是非、結婚したいといわれるんだ。いい話じゃないか。うちの得意先では、五指に入る大手だよ」
「本当ですか？　でも」
南田物産ときいて、さすがに由美も驚いた。南田物産といえば、大学卒業者のあこがれている就職先の一つである。株式一部にも上場されているし、資本金も多い。
〈これを、玉の輿というんだわ〉
由美は、今までのつんけんした態度を急にやめて、恥じらいをみせながらいった。
「どうして、私なんかを」
「この銀行に来る用があったとき、君が入口を出るところで、応待したんだそうだね？」

「覚えていません」
「そのとき、清純な感じがして、とてもいいと思われたそうだよ」
　支店長は、急に、敬語を使い出した。
「もし、君さえよければ、一度、会って話をしたいといわれるんだ。どうだろう？」
「はい」
「じゃあ、こちらで、段取りしていいね」
「はい」
　支店長室を出ると、さすがに、上気してきた。
　学生時代なら、
「やったァ！」
　というところだろうが、今は、そんなはしたない。
　いい方は出来ない。
〈南田物産の社長の息子と結婚できたら、中原次郎を見かえすことが出来る。この支店にいる行員たちだって、一ぺんに態度を変えるに違いないわ〉
　と、思うと、仕事をしていても、頬がゆるんでくる。
　見合いの日は、すぐにやって来た。
　その日、由美は、成人式に作った振袖を着て行った。何年かたっているので、もう似合わないかも知れないと思ったが、美容室で着つけして貰うと、自分でも、びっくりするほど、美しかった。
　場所は、一流ホテルの一室で、そこに食事をはこばせての豪華なものだった。
　最初うつむいていた由美は、途中でそっと、顔をあげて、相手の顔を見た。
〈不細工な人でも、我慢しなきゃ。仕方がないわ〉
　と、自分にいいきかせてきたのに、相手は、背の高い、甘いマスクをしたハンサムな男だった。
　鼻も高いし、目もきれ長で、男らしい容貌だった。
〈私には、もったいないわ。どうして、こんな男が、私を選んだのかしら？〉
　由美は、途中から顔をあげて、何でも思ったことを話した。

〈どうせ、あとで断られるのなら、今の方がいいわ〉

と、思ったのだ。相手も、熱心に話をし、こちらの話もきいてくれる。

食事がすむと、みんな部屋から出ていって、二人きりになった。

「どうして、私なんかを……」

由美がいうと、相手は、爽やかな笑顔でいった。

「君が、清純に見えたから。多分、男の人とつき合ったことがないと新鮮に感じたんだ」

由美の頭に、あのレイプされたシーンがよみがえった。

第二章　秘密の夜

1

由美のまわりは、急に華やかになってきた。会社の社長の息子と見合いしたあと、交際がはじまったし、大学の同窓会で会った井上陽一とも、ときどき、お茶を飲むようになったからだった。

男たちから、注目されていると思うと、その気持ちだけで、肌がつやつやし、化粧ののりもよくなった。服装も、今まで地味なものばかり着ていたのが、急に、明るく派手なものにかわった。

〈あんなことは忘れよう。よく狂犬に噛まれたようなものだと、人がいうじゃないの。これからは、あの男たちを見かえしてやるのだわ〉

南田秋彦とのデートは楽しかった。学生時代の中原次郎とのデートしか知らない由美にとって、それはびっくりするほど、豪華なものだった。

食事をするレストランも、予約がないと行けないような高級なところだったし、そのあとクラブにも連れて行ってくれた。それに、彼は、外車を持っていて、どこへでも、それで行った。

次郎とは、安い食事しかしなかったし、せいぜいが、パブかカフェバーだった。そしてあとは、彼の部屋へ行ったり、ディスコへ行くぐらいのデートだった。学生と社会人という違いもあるが、なんといっても、秋彦は、大人で、女の扱いがうまかった。

〈随分、遊んでいるのかもしれない。でも、支店長を通して、正式に申し込んで来たのだから、遊びで

はないはずだわ〉

結婚するのだったら、こんないい縁談はないと、由美は思った。

その日曜日も、由美は、秋彦と、喫茶店で待ち合わすことになっていたので、少し早めに、行った。

いつもは、きちんと時間を守る秋彦が、その日に限って、なかなかやって来ない。

早目に来たので、三十分以上も待った由美は、さすがに、いらいらして、一旦、外に出た。コーヒー一杯では、それ以上、持たないということもあった。

喫茶店の前のアスファルトを、ぶらぶらと歩きながら、車道を見ていると、角を曲がって来た赤い車が、喫茶店の手前でとまり、秋彦が降りて来た。

「あっ、秋彦さん」

由美は、顔を輝かせ、走り出そうとした。しかし、次の瞬間、由美は、はっとして立ちどまった。秋彦が、ぐるっとまわってきて、ドアをあけ、女の人の手をとって連れ出したからだった。

美しい女性だった。胸の大きく切れこんだ服を着て、帽子をかぶっている。

女性は、「じゃあね」というように手をあげて、歩き出した。

秋彦は、そのうしろ姿をじっと見送ってから、車に乗り、喫茶店の前につけた。

「秋彦さん」

由美がそばへ行くと、彼は、車から降りて来た。

「やあ、ごめん遅くなって」

「今の方、どなたですの？」

由美は、堅い声でいった。

「ああ、大学の時の友だちですよ。偶然、道で会って、こっちの方に行くんだというから、乗せてあげたんだ。どうする？　コーヒー飲む？」

彼は、明るくいった。

「もう飲みましたからいいですわ」

「そう、じゃ、車に乗って。食事に行こう」

由美は、車に乗ったが、さっきまでのうきうきし

た気持ちは、消えてしまっていた。

時間きっちりに来たのなら、女性を乗せて来ても、それほど腹が立たなかっただろう。

三十分以上も遅れて来たとなると、どうしても、彼女と会っていたため遅れたように思ってしまう。それに、遅れた理由もいわず大してあやまらないところも嫌だった。

〈私は、この人とうまくやっていけるのだろうか？〉

そう思って、じっと沈黙していた。

2

その日のデートは、あまりはずまなかった。レストランに行っても、彼は、あまり、食事をしなかったし、疲れているようだったからである。

「それでは、今日はこれで」

レストランを出たところで、由美がいうと、彼は、ほっとしたように、

「では、送っていくよ」

といった。

車の助手席に乗って、なにげなく、座席の横を見ると、口紅が一本落ちていた。

〈あの女性は、この中で、口紅を直したのだろうか？〉

由美は、あまり親しくない男性の前では、化粧を直したり、口紅をひいたことはない。助手席に乗って、口紅を直している女を想像すると、不快になってくる。

〈キスしたので、口紅がとれ、降りるまぎわに口紅を直したのだろうか？〉

「どうしたの？」

あまり、由美が黙っているので、秋彦が声をかけた。

「ここに、口紅が落ちていましたわ」

と、口紅を見せた。

「ああ、さっき、落としたんじゃないかな。手に化粧ケースを持ってたから」

秋彦は、なにげないようにいう。

「これから、女の人を乗せるときは、助手席でなく、後部座席にして下さい」

由美は、自分でもびっくりしたほど、強い口調でいった。

「わかったよ。でも、二人だったら、助手席に乗せるのが自然なんだけどね。前とうしろじゃ、話もしにくいし……」

秋彦が、むっとしたようにいった。

それから二～三日、彼の方からは、何の連絡もなかった。それまでは、毎日必ず、電話をかけて来たのにである。

由美は、不安になってきた。

あの日、家に帰ったときには、結婚することに不安を感じたのだが、むこうがかけて来ないとなると、気になってくる。

二人の交際は、支店長以下、みんなが注目し、期待している。それが、駄目になったとなると、由美に対する評価も変わってくるだろう。

とうとう、辛抱できなくなって、その夜、由美の方から電話をかけた。

「あの……由美ですけど」

「ああ、どうも」

「どうしていらっしゃるんですか？」

「別に、元気ですよ、そっちは？」

「ええ、毎日忙しいけど、元気です」

そのあと、彼が、次のデートをいい出すかと思ったが、彼は、何もいわない。

仕方なく、由美は、電話を切った。

受話器を置いたあと、由美は、落ち込んでしまった。電話をかけるまでは、そのうちにむこうからかかってくるのではないかと思っていたし、かかって来なくても、自分からかければ、秋彦も機嫌を直してくれると思っていたのだ。

〈彼は、この話をやめるつもりだろうか？〉

苦りきった支店長の顔が目に浮かぶ。同僚の女の子たちも、羨ましがっていただけに、駄目になったと知ると、軽蔑したような表情を見せるだろうと思うと、銀行に行くのも、辛くなってくる。

テレビをつけると、ドラマをやっていたが、ストーリーが頭に入って来ない。

十分ほどで、テレビを切って、由美は、井上陽一の電話番号をまわした。

〈彼と、ビールでも飲んだら、少しは気が晴れるだろう〉

と、思った。

幸い、彼は、家に帰っていた。

「あ、どうしたの？　今どこ？」

彼は、マスコミ関係の人間らしく、会話がスムーズだった。

「家に帰ったところです。もしよかったら、お茶でも飲みたいと思って」

「えっ、家に行っていいの？」

「いえ、外で」

「ああ、そう。びっくりしちゃった。家によんでくれるのかと思って。じゃあ、この前のスナックで会う？　カラオケでデュエットしたところ」

「ええ」

「では、僕は、今から出るから、三十分ぐらいで着くと思うけど、君は？」

「私も、そのぐらいに行けます」

「では」

由美は、彼と話しただけで、随分、気分が晴れて来た。それで、服を着がえ、急いで、外へ出た。

スナックで、由美は、いつもより早いピッチで、ビールや、水割りを飲んだ。二人で、デュエットもした。恋人同士の歌を歌っていると、彼が、恋人のような気になってくる。それは、彼も同じようだった。

タクシーに乗るとき井上は、由美の肩を抱いて来

た。いつもだったら、あわてて振りほどくにちがいない由美も、そのときは、なんとなく彼にささえて貰うのが快くて、じっとしていた。

タクシーで、由美のマンションの前まで送って来ると、井上は、金を払って、車からおりた。

「部屋まで送って行くよ。君、足がふらついているから」

彼にいわれるまでもなく、由美は、急速に酔いがまわって来て、軀がゆらゆらとしていた。ドアの前に来て、カギをあけようとしたが、うまくカギ穴に、カギが入らない。

「借してごらん。僕があけてあげる」

井上は、そういうと、由美の肩を抱いたまま、カギをあけ、一緒に部屋に入った。

3

彼は、コップに水をくんで、由美に飲ませ、自分も飲んだ。

〈早く帰って〉

と、いおうと思いながら、彼が帰ってしまうのが淋しかった。

「さあ、ベッドへ入って眠りなさい。僕は帰るから」

井上は、そういうと、由美を、ベッドまで、運んだ。

「どうも有難う、……ございました」

そういった途端、由美は、気分が悪くなり、めまいがした。

「大丈夫？　顔が蒼いよ」

帰ろうとしていた井上は、心配そうに、もどってきて、由美の背中をさすった。

〈こんなに酔ったのははじめてだわ。井上さんに、みっともない〉

夢うつつに、そう思いながら、そのまま、由美は、眠ってしまった。

一時間ほど眠って、由美は目を覚ました。みると、井上が、ベッドの下で、眠っていた。

〈どうしよう?〉

由美は、うろたえた。眠り込む前のことを、急いで思い出そうとした。

由美は、ベッドからおりて、顔を洗い、歯をみがいた。やっと、頭がすっきりした。

井上が、その気配で起きてきた。彼は、黙ったまま、同じように、顔を洗い、口をゆすいだ。

「大丈夫?」

やっと、彼は口をきいた。

「ええ、どうもすみませんでした。醜態を見せてしまって」

「いいんだ」

そういうと、彼は、肩を抱き寄せ、あっという間に、唇を奪ってしまった。

長いキスだった。彼の冷たい唇が妙に官能的だった。

由美の肩から力が抜けた。一年もの間、男性とは肌を接したこともなく、若い軀がほてっていた。

ブラウスがはぎとられ、スカートのファスナーが、はずされた。

由美の脳裏に、一年前に、京都でレイプされたときのことがよぎった。由美は、思わず叫んだ。

「やめて!」

突然の由美の抵抗に、井上は、驚いたように手をはなしたが、もう一度、今度はやさしく、肩を抱いた。

「ごめんね。じゃあ、こうして、じっとしていよう。そして、話をしよう」

彼は、由美の肩を抱いたまま、そっと、床に座った。そして、もう一方の手で、由美の手をとった。

「さあ、何の話をしようか?」

「……」

由美は黙っていた。レイプのシーンが、頭から消えて、心が落ち着いて来た。すると、彼に抱かれて

いるのが、息ぐるしくなってきた。
「じゃあ、話でなくて、歌をうたおうか？……」
彼は、低い声で、英語の歌をうたい出した。失った恋人を想うやるせない恋の歌だった。
彼は、カラオケのとき、英語の歌は一度もうたったことがなかった。明るく、元気な彼しか知らない由美にとって、その沈んだ歌は、妙に心に滲みた。
「いい声ですね」
由美は、かすれた声でいった。
歌いながら、彼は、やさしく、由美の髪を撫でた。
やがて、彼は、もう一度唇をかさねて来た。今度は、由美に抵抗はなかった。
自然に二人の軀は、横になり、井上は、首すじから、背すじに、キスの雨をふらせた。
「きれいだ」
彼がささやいた。
服がたくしあげられ、胸があらわになった。
彼は、乳房を、下からすくい上げ、由美のピンク色の乳首のまわりに円を描いた。
「あっ」
由美が、思わず、息を吸い込んだ。彼のもう一つの手は、由美の下半身にのびていった。
「目をつぶって」
彼にいわれるままに、由美は、目を閉じた。軀の一点に、神経が集中する。
閉じた由美の眼に、夜の砂浜に横たわっている自分が見えた。波が、足もとから、ひたひたと押し寄せてくる。
彼は、指で、由美の敏感なところを捕え、ゆっくりと、撫であげ、はじき、ひいている。そのリズムが、波の押しよせては引くリズムと一致していた。
次第に、由美の軀の中に、嵐が起こってきた。やがて、彼は、嵐の中に、乗り入れる舟のように、分け入って来た。
激しく舟が揺れ、嵐がたかまっていく。
「ああっ！」

次の瞬間、由美は、舟を呑み込み、足元から、頭の先へ、嵐が吹き抜けて行った。

そのあとも、なんどもやってくる余震に由美は、軀をそらせ、耐えていた。

はっと気がつくと、井上は、由美の上で沈没していた。

由美は、彼の手をとって、唇にあてた。

4

目が覚めた井上は、由美に気づくと、肩を抱いて引き寄せ、やさしくキスをした。

「愛してるよ」

「本当？」

由美は、彼の目を見つめた。

「本当だよ。大学の時から好きだったんだ。でも、君には、彼がいたから」

彼の言葉は、甘く、由美の耳をくすぐった。

「結婚したいな」

「ええ……私も」

由美は、井上に軀をあずけながら呟いたが、内心では、困ったことになったと思っていた。

〈支店長からすすめられて、南田秋彦と、交際しているのに、どうしよう？　その期間に、別の男とつき合い、結婚することになったなんて、支店長にいえないわ〉

その由美の気持ちを感じとったのか、井上は、急に手を離して真剣な顔になった。

「君、本当に、恋人いないの？　中原とはどうなっているの？」

「中原さんとは、卒業する前に別れましたわ」

「どうして？　あんなに仲が良かったのに」

井上が今度の縁談のことでなく、中原のことにこだわっているので、由美は、ほっとしていた。

「中原さんの方から、別れたいといったのですわ。私が、最後まで、軀を許さなかったことが、不満だ

っていってました」
「えっ、じゃあ、やっぱり君は……」
井上は、由美を見つめた。
「そうなの、あなたが、はじめてですわ」
本当に軀を許したのは……と、由美は、心の中でいいわけした。
井上は、感動したらしく、強く肩を抱きしめていった。
「有難う、じゃあ、すぐ、婚約しよう！」
「……」
「ね？　どうしたの？」
「うれしくて」
由美は、表情を読みとられまいと、うつ向いたままで答えた。しかし、井上は、それを恥じらいととったらしく、はずんだ声でいった。
「僕は、てっきり、君は、中原次郎と結婚するものだと思っていたし、当然……」
と、いってからあとの言葉を飲み込んだ。
中原と軀の関係もあって、処女ではないと思っていたといいたかったのだろう。
由美は、めまぐるしく頭を働かしていた。
〈私は、もとから彼が好きだった。でも、彼に気がないとあきらめて、中原次郎とつき合うようになったのだわ。確かに、南田物産の社長の息子である南田秋彦と結婚することは、世間でいう玉の輿に乗ることで、祝福されることだけど、果たして幸せになるだろうか？　見合いで出て来て数回会った人より、本当に好きな人と結婚した方が、幸福になるのではないかしら？　それに、秋彦さんは、最近、電話もかけて来ない。きっと、そのうち、断ってくるに違いないわ。それなら、学生時代から好きだった井上さんと結婚しよう……〉
そう思いつくと、由美は、やっと、笑顔が出て来た。
「私にとって井上さんは、初恋の人でした。ですから、本当に夢みたいなんです。中原くんに最後まで

許さなかったのも、あなたのことが、心を占めていたからですわ。そのあなたと結婚できるなんて、うれしくて……」

話しているうちに、由美は、自分の言葉に酔ってきて、涙があふれて来た。

「泣かないで。本当によかった、君とめぐり会えて。ずっと、君を愛し続けるよ」

井上は、ムードたっぷりにいった。

5

やがて、井上は、やさしく、

「風呂に入ろうか？」

と、いい、由美がうなずくと、自分で、バスルームに、湯を出しに行った。

彼は、湯舟が一杯になるのを待つ間、お茶を飲みながら仕事の話を楽しそうに話した。

「今度、推理作家の黒川先生の担当になってね、黒川先生というのは、達筆すぎて、原稿の字が読めないので有名な人なんだよ」

「へえ、あの黒川さんの原稿が読めるんですか？　いいわァ」

由美は、羨ましそうにいった。

「それで覚悟してたんだけど、意外にすらすら読めて、全然、先生にきいたりしなかったので、先生もご機嫌だったよ。僕もうれしくて、編集者として自信を持ってしまった」

とか、

「この間、松下先生の取材旅行で、京都までついて行ったんだけど、とても楽しかったよ。先生は、メモもせず、ぼんやり見ているので心配だったけど、帰って、原稿見たら、ちゃんと見るところは見てるんで、さすがだと思った」

などというたわいもないものだった。でも由美は、彼が、セックスだけでなく、自分の生活のことを話してくれるのが、とてもうれしかった。

中原は、同じ大学でもあったのに、あまり、授業の話をしなかったし、南田秋彦も仕事の話などしなかったからである。

〈彼は、本気で、私と結婚しようと思っているんだわ〉

由美は、久しぶりに、楽しい気分になっていた。

バスルームの湯が一杯になると、井上は、さっさと服を脱ぎ、風呂に入って行った。

由美は、彼の洋服をハンガーにかけ、下着を畳んでいると、バスルームから、彼が呼んだ。

「由美くーん、一緒に入ろうよ」

「えっ、そんな……」

由美は、ためらいながらも、胸がどきどきした。

彼女は、男と一緒に風呂に入ったことはなかった。

由美は、バスルームの前まで行って、

「恥ずかしいわ。あとで入ります」

と、いった。

「いいじゃないか、結婚するんだから」

井上が、ガラス越しにいった。

「でも……」

「じゃあ、うしろむいてるから、ね？」

「ええ……」

とうとう由美は、承知した。彼女は、軀を許さなかったことで、中原に逃げられたという辛い経験がある。それが今も尾をひいていて、男のいうままにならないと、逃げられるのではないかというおそれがあった。

ためらった末、やっと、由美は、服を脱いで、ガラス戸をあけた。

彼はうしろむきになって、湯舟につかっている。

そっと、桶に湯をくみ、かかり湯をすると湯舟の中に、足をすべりこませた。彼は、はしの方によって湯の中に空間をつくり、じっとしている。

由美の軀が、やっと、湯の中に沈んだとき、くるりと、井上がむき直った。

「きゃっ！」

由美は、叫びながら、タオルで躯をかくすようにした。

「びっくりするじゃないか。大丈夫だよ」

井上は笑いながら、由美の躯を見つめた。

「白い肌だね。とってもきれいだ」

彼は、かるく、額にキスをした。それだけで、由美は、躯から力が抜けた。

彼が、ゆっくりと、由美を抱き、タオルをはずした。

「嫌っ、やめて」

由美が逃げようとするのをしっかりとおさえ込み、井上は、乳房を、下から撫であげ、指の間に、ピンクの乳首をはさみ込んだ。

「あっ」

由美の躯の奥がじんとしびれた。

彼は、こよりをよるように、ゆっくりと乳首を揉みながら、キスを続けた。

由美の躯がくらげのようにぐにゃりとしてきた。

それをかかえあげるようにして、彼は、執拗にタッチを繰り返し、次第にその手を、下半身に持って来た。由美の躯は、一瞬、びくんと動いたが、やがて、目をつぶって、されるままになっている。

「上がろうか？」

井上の声がかすれた。

洗い場に上がると井上が、石けんを、二人の躯にいっぱいぬりつけた。そして泡だらけになった躯を密着させた。

なにげなく、由美が躯を動かすと、

「うっ！」

と、井上がうめいた。彼の下半身は、いつのまにか、たくましくなって、泡をはねあげていた。

彼は、夢中で、由美の躯をタイルの壁におしつけ、のしかかってきた。

しかし、経験のない由美には、それをうまく収納することが出来ない。二度、三度、トライしているうちに、彼の躯は、力を失ってしまった。

「ごめんなさい」
「いいんだ、無理をしてごめん」
彼は、やさしく、由美の軀に湯をかけ、きれいにしてくれた。
「見ないで！」
由美は、井上が、じろじろ見ているのに気がつくと、急にはずかしくなってきて、脱衣所の方へ逃れた。
あとから、彼が追ってきて、由美をおし倒せ、あっというまに、今度は、目的を達した。由美は、何度も軀をそらせ、声をあげた。

6

その翌日一日中、彼は、由美と一緒にいた。
由美も、すっかり、もう彼と結婚するつもりになっていた。
ところが、月曜日に銀行に出ると、南田秋彦から電話がかかってきた。
「やあ、元気？　今日会いたいんだけど」
「はあ……」
由美は、とっさに返事が出来なかった。
「いつもの喫茶店で、六時。いい？」
「はい」
「じゃあね」
電話が切れると、隣の席の和子が、
「あら、南田さんとデート？　いいわねえ」
と、ひやかした。
由美は、彼女と適当に喋りながら、心の中では、困り果てていた。
〈どうして、一日でも早く、電話をかけてきてくれなかったのかしら？　土曜日だったら、井上さんとあんなことにはならなかったのに〉
「どうしたの？　計算まちがってるわよ。うわの空なのね」
横から和子が、また、ひやかした。

「そんなんじゃないんです」

由美は、支店長の方を、ちらっと見た。すると、偶然、支店長も、こちらを見ていて眼が合ってしまった。そんなとき、前なら支店長は、じろっと睨むか、すました顔をするのに、今日は、にっこりと笑った。

〈南田物産の件があるから、支店長がおもねているんだわ。これを断ったら、反動で、どんなに意地悪をされることか……〉

とにかく、断るにしても、一度は秋彦に会わなくてはいけないと思った。

〈それに、むこうだって、やめる話をするのかも知れないではないか〉

由美は、彼に会ってはっきり断るより仕方がないと思った。

約束の時間に、喫茶店に行くと、秋彦が先に来て待っていた。

コーヒーを一杯飲み終わると、彼は、

「今日は、和食がいいかと思って、料理をたのんでおいたんだけど」

と、いった。

いつものレストランでの食事と違うことで、由美は、彼の心をはかりかねていた。

〈断る話になるので、人にきかれないようにゆっくり話したいと思っているのかしら？〉

ところが、彼と一緒に料亭に行くと、驚いたことに、彼の両親と、支店長が先にきて待っていた。

「まあ、そこへ座って。今日は、話をしっかりときめたいということで、ご両親も来ておられるから」

支店長が上機嫌で、由美を、招き入れた。

〈大変だわ。どうしよう？　こんなことになるなんて……〉

由美は、顔が蒼くなった。

今さら、やめるとは、支店長の手前、いい出せなかった。彼と二人で会うのだとばかり思っていたから、ゆっくりと、断りの話をすればいいと思ってい

たのだ。

「さあ、では、ご紹介しよう」

支店長が、得意満面で、由美と、南田物産の社長夫妻をひきあわせた。仕方なく、由美も、かしこまって挨拶をした。

料理が運ばれて来て、酒が来た。なみなみとさかずきに酒がつがれ、支店長がそれを高くかかげた。

「お二人の婚約を祝って、乾杯！」

「乾杯」

由美は、胸がどきどきしてきた。

〈婚約だなんてそんな……。困るわ。私に何の相談もなく〉

しかし、考えてみれば、これは、当然のことだった。

支店長から、正式に、結婚のはしわたしがあり、二人は会って交際したのである。そして、断りはせず、銀行の中でも、婚約がととのったとみんなが思っているのだ。

結婚するのなら、当然、親が出てくるのは、予想されることだった。

社長は、終始にこにこしていて、息子が、気に入ってきめたのだから、私たちにも、異存はないといった。夫人の方は、

「それで、お式の日取りですけど、いつがいいでしょうか？　私共では、節分あたりどうかと思うのですが……」

と、具体的な話をしてきた。

「はい……」

由美が、いいよどんでいると、支店長が、すぐに引きとって、

「それがいい。きまったからには、早い方がいいよ。そうしよう」

といった。

「では、お結納は、今月中に、お日柄を見て考えさせていただいていいでしょうか？」

「はい、あの……」

夫人に見つめられて、思わずいってから、由美は、秋彦の顔を見た。彼は、他人事のように煙草を吹かしている。

〈本当に、この人は、私が気に入ったのだろうか？親に、誰かと結婚しろといわれて、銀行で見かけた私を指名したのではないだろうか？〉

ふと、由美は、そう思った。

いつの間にか、話はどんどんすすんで、結納の日どりや、式の日まで、大まかなことがきまってしまった。

「それで、新居ですが、私どもの邸のとなりが、二百坪ほどあいておりますので、そこに建てようと思っておりますの。どんな家がいいか、考えておいて下さいね」

夫人にいわれ、いよいよ、由美はせっぱつまってしまった。

第三章　婚約指輪

1

由美が断れないでいるうちに、南田秋彦との結婚話は、どんどんすすんでいった。由美は、毎日思い悩んでいた。

由美の意思がはっきりしていたら、どんなに断りにくい話でも断れたのだが、由美自身、迷いに迷っていた。

南田物産のような大会社の社長の息子に見初められて、玉の輿に乗るというのは、女の夢だし、みんなからも祝福されることだった。現に、銀行に出勤して来ても、あのむつかしい支店長が、朝の挨拶をしてくれるし、昼休みには、食事をおごってくれたりする。

上がそれだから、他の男性行員も、みんな由美に対して機嫌をとってくる。最近は、言葉遣いまで違ってきたほどである。みんな南田物産との取り引きをあてにしているのだ。

女子の行員たちの目も違って来た。今まで、先輩面をして、由美にイヤ味をいったりしていた人たちまでが、由美を羨ましそうに見る。

〈もし、この話を断ったら、支店長の顔をつぶしたことになり、銀行にはいられなくなる〉

由美は、それが怖かった。

もちろん、南田と結婚すれば、銀行をやめることになるのだが、井上と結婚する場合は、共稼ぎでないといけない。

この銀行は、男でも、就職の競争率が高いことで知られていて、大学卒の女子は、ほとんど採らないところである。採る場合も、コネがないと絶対ダメだといわれていた。

しかし、どうしても、銀行に勤めたかった由美は、大学の三年のときから、ここを目ざして必死で勉強してきた。

入行試験に、とび抜けた成績をとれば、銀行も考えてくれるのではないかと考えた。だから、それが実って試験に合格したときは、大感激だった。

その銀行をやめるのは悲しかったし、次の就職口を探すのも大変だろうと予測がついた。新聞広告を見て、小さな会社の事務員になるしかなかったが、一度、一流の就職口についた由美にとって、その落差は辛いことだった。

井上の方も断らず、中途半端でいる間に、とうとう結納の日が来てしまった。

〈今だったら、まだやめられる……〉

と、思いながら、人形のように、由美は、髪のセットに行き、振袖を着て、仲人を待った。

仲人は、有名な代議士がなり、支店長が一緒についてきた。

時間きっちりに、仲人はやって来た。

由美の両親は、ただ、恐縮して、おじぎばかりしていた。

田沢という代議士夫妻は、慣れたもので、しばらく雑談したあと、扇子を前において、改まって挨拶をした。

結納金は、五百万円で、それ以外に、ダイヤの指輪が、婚約のしるしとして持って来られた。

すべての儀式が終わると、代議士夫妻は、出された料理にも手をつけず、いそいで帰って行った。

「よかったね、由美」

「よかった」

両親が、涙をこぼさんばかりにいうのをきいて、由美は、もう、この結婚は断れないと思った。

結納金は、最初に一千万円といわれたのを、あまり多くても、負担になるからといって半額にして貰ったのである。

支店長が、銀行は、年内でやめるように先方がいっているということと、指輪は、これからずっとはめておくようにと注意して帰った。

「普通は、銀行には、お客さんよりも高価なアクセサリーはして来ないようになっているけど、いつ先方が銀行に来られるかわからないから、いつもしておいた方がいい。デートに突然誘われることもあるだろうしね」

由美は、その支店長の言葉を思い出して、指にダイヤをはめて見た。

二カラット近いというその指輪は、由美の華奢な指によく似合い、光り輝いていた。

「もう、断れない」

由美は、指輪をみながら呟いた。

2

翌日、指輪をして銀行に出ると、女子行員たちが、わっと集まって来た。

「まあ、すてきね、ちょっとはめさせて」

と、いう人もいれば、

「一千五百万円くらいかしら？　いや、もっとするかしら？」

と値ぶみをする同僚もいた。

「式はいつなの？」

ときいたのは、来年、恋愛で結婚する奈奈子だった。

「二月の節分ということだったけど」

と由美がいうと、奈奈子は、

「あらっ、私と同じ日だわ。どうしよう、みんなあなたの方の式に行ってしまうわ」

と、がっくりしたようにいった。

「ねえ、私も呼んでくれる？」
　といったのは、オールドミスの藤村夏子という上司だった。
「はい。もちろんです」
　と、答えると、夏子は、急にやさしい顔になって、
「うれしいわ、お祝いは何がいいかしら」
　と、いった。
〈ああ、お祝いまで貰ったら、もうやめることは出来ない〉
　と思いながら、由美は、みんなににこやかに応待していた。
　南田秋彦は、背も高くスマートだし、顔もハンサムだった。井上より、ずっと、外見はいいのだが、問題は心だった。
　表面上、彼が由美を見初めたということになっているが、二人っきりでデートしている時、本当に、彼に愛されているのかわからなくなるのである。
〈身分違いの私を見初めて、強引に結婚まで持って行ったのだとしたら、もっと、熱っぽい態度をとるのではないだろうか？〉
　と、由美は思った。
〈もし、彼が、本当に私を愛しているのなら、結婚してもいいけど、不安だわ〉
　そんなことを考えて勤めているうちに、三時になった。
　銀行のシャッターが、静かに下りはじめる。勤務は、そのあとも続くが、何といっても客がいるのといないのとでは、緊張が違う。
　シャッターがおりてしまうと、少し、休憩していいことになっていた。
〈化粧を直して来ようかしら？〉
　そう思ったとき、目の前の電話が鳴った。
　受話器をとると、それは、井上からだった。
「もしもし、由美？　僕だけど、今日会おうよ。六時に喫茶店『リラ』で。いいね」
「ああ、ちょっと待って。そんな時間には行けませ

んわ」

由美は、悲鳴に近い声をあげた。

今、井上に会うのが怖かった。折角、南田秋彦にきまりかけた心が動揺するのがわかっていたからだった。

しかし、その一方では、彼に会って、はっきりと話をつけなければいけないという気もしていた。

井上は、

「じゃあ、七時にしよう。もし、遅くなっても待っているから。じゃあ」

といって、電話を切った。

それからの数時間、由美は、心の中で、悩み続けた。

行かないですますという方法もあった。

何度誘われても行かなければ、彼もフラれたのだと気がつくだろうと思った。しかし、結婚式の当日になって、彼に乗り込まれても困る。

秋彦との結婚は、必ずその日までに、雑誌や、週刊誌にのり、うわさにもなると思われたからだった。

〈行って断ろう。彼だって今の若者なんだから、一度関係を持ったぐらいで、ぐずぐずいわないだろう〉

最後にそう決心したのは、六時になって、仕事が終わる直前だった。

〈指輪をはずして行こう。でないと、彼を刺激してまずい〉

と、最初は考えたが、途中で思い直して、はめて行くことにした。

〈彼が、この指輪を見れば、財力の差が実感としてわかるだろう。彼がくれる婚約指輪は、せいぜい五十万円くらいのものだから、彼も、仕方なくあきらめてくれるに違いない〉

3

井上は、何も知らず、にこにこと、由美を迎えた。

「仕事大丈夫だった？　あとで、もう少し遅い時間にしたらよかったと気がついたのだけど」

彼は、そういうと、

「沖田先生のところへ原稿をとりに行ったら、一晩泊まって行けということでね。帰り道でささえを買って来たんだ。はい、お土産」

と、ささえのたくさん入った籠をわたしてくれた。

由美が、ささえが好きだというのを覚えていてくれたのだ。

由美は、さすがに、胸がつまったが、ここでくじけてはいけないと思って、黙って受けとった。

「おすしでも食べに行こうか？」

「ええ」

「どうしたの？」

はじめて井上は、由美の様子がおかしいのに気づいたようだった。

「あの、私、あなたにお話があるんです」

「あ、そう。じゃ、すしを食べながらきこう」

井上は、そういうと、六本木のすし屋に由美を案内した。

「僕も、いろいろ話があるんだ」

彼は、そういうと、畳敷きのコーナーに座った。

「今日、母がくにから出てくるんだ。会ってくれる？　九州からだから、夜の十一時十六分に着くから、会うのは、明日になるけど」

「えっ、お母さまが……」

由美は、絶句した。

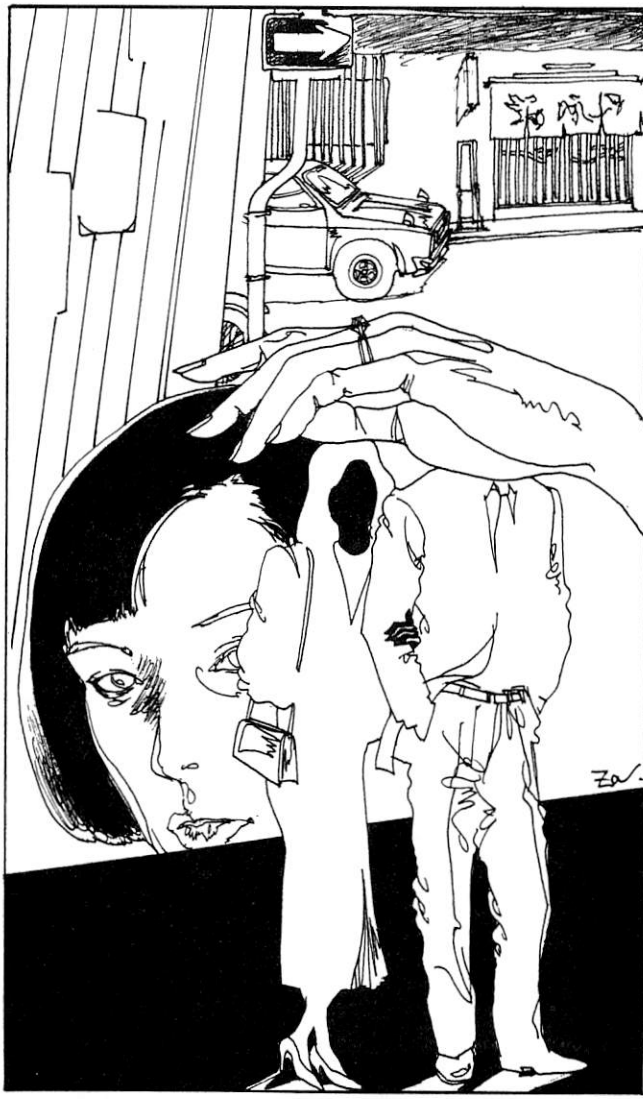
彼だけならいいが、九州からわざわざ、母親が出て来るとなると、断るのは容易でないと不安になってきた。

彼は、由美のしている婚約指輪にも気がつかないようだった。

「あの……、私、縁談があるんです。支店長を通じて、ずっと前からいわれていたんですけど……」

由美が切り出したのは、上にぎりの桶が来て、彼が、一きれつまんだときだった。

「そんなの断ってしまえよ。君は、僕と結婚するんだから」
井上は、すしを頬ばりながら、こともなげにいった。
「それが、断れないんです。断ったら、銀行やめないといけないんです」
「どうして？　そんなこと、勤め先の上司が強制できないだろう？　なんだったら、明日、僕がいいに行くよ」
井上は、はじめて真剣な顔になっていった。
「それが、断り切れなくて、もうきまってしまったんです。ごめんなさい」
由美は、頭をさげた。
「きまってしまったっていっても、そんな……」
といってから、井上は、はじめて、由美のしている指輪を見て、はっとしたように、
「まさか、それは……」
といった。
「ええ。婚約指輪なんです。結納も入ってしまって、ごめんなさい」
「そんな君！　うちの母に何といったらいいんだ！」
井上が、大きな声を出したので、すし屋にいた人が、みんなこっちを見た。
由美は、うつむいた。そのとき、
「あら、由美さんじゃない？」
と声がした。見ると、同じ銀行の奈奈子だった。彼女は、恋人らしい若い男性と来ていた。
由美の顔が蒼ざめた。
〈井上と会っていたことを、彼女が喋ったらどうしよう？〉
由美は、あわてて、奈奈子のところへ行って、
「奈奈子さん。あの人は、同じ大学の先輩なの。誤解されるといけないから、このことはだまってて」
と、たのんだ。
「いいわよ。でも、どういうことなの」



奈奈子は、好奇心にみちた目で由美を見た。
「今晩かえったら話します。おねがい！」
由美は、それだけいうと、もとの席に戻った。
「出ましょう、話は、歩きながらします。同じ銀行の人がいるので」
「ここでいいじゃないか。僕と君とは、結婚を約束した仲なんだよ。どうして逃げ隠れするんだ」
大きい声でなおもいう井上を、やっと外へ連れ出した。
「ごめんなさい、本当に。実は、あなたに会う前から、話はすすんでいたんです。でも、私はきめかねていたんです。あなたに会って、ああいうことになったので、翌日断ろうと、彼と会ったら、ご両親が来てしまって……」
由美は、一生懸命いいわけした。しかし、井上は承知しなかった。
「これから支店長の家へ行こう。そして、婚約をやめてもらおう。愛のない男と結婚してもうまくいくはずがない。君とのことを洗いざらいいって……」
「やめて下さいっ！　なりゆきでこうなってしまったんです。毎日、銀行に行っていると、どうしても、支店長のいうことには、反対できなくて……」
「では、やめればいいじゃないか。これから、相手のところにも行こう」
どうしてもきかない井上をなだめて歩いているうちに、ふと見ると、ラブホテルのところまで来てしまっていた。
「ここへ入ろう。中で話をきくよ」
「嫌ですっ。おねがい」
「じゃあ、支店長のところへ行こう。今からがだめなら、明日、銀行へ行く。そして、支店長に話をする。いいね」
井上は、本当に怒っていた。
仕方なく、由美は、
「では、ここへ入りましょう。それで、あきらめて下さい。あきらめてくれないのなら帰ります」

と、冷静にいった。

井上は、黙ってじっと考えていたが、

「わかった。じゃあそうする」

といって、ラブホテルに入っていった。

〈仕方がないわ。なんとか彼にあきらめて貰わなければ〉

由美は、唇をかみしめた。

4

由美は、ラブホテルに入ったことが一回もなかった。

大学時代は、中原次郎の部屋へ行ったり、自分の部屋になっている家の離れへ、彼を呼んだことはあるけれど、最後の線は守っていた。彼に失恋して京都旅行をした時に、レイプされた以外に、軀を許したのは、井上だけである。それも、勤めるようになって借りたマンションでだった。

〈一流ホテルでならともかく、あきらかに、セックスが目的とわかるラブホテルへ行く人って、よほど神経の太い人だわ〉

と思っていたのに、今、男の人とラブホテルへ入ったのである。

〈ホテルの人に顔を見られたらどうしよう〉

と、心配だったがそれは杞憂だった。

入口を入ると、各部屋のカラースライドが並んでいて、使っている部屋は、電気が消してある。

「どの部屋にする？」

井上が、慣れた様子できいた。

「どこでも」

由美は、小さい声でいった。一刻も早く、ここから脱け出して帰りたかった。

「じゃあ、これにしよう」

井上が選んだのは、ディズニーランドの間だった。

彼は、自動販売器でジュースを買うような手軽さで、スライドの下に、金を入れ、ボタンを押した。

すると、カチャンと音がして、カギが落ちて来た。
「さあ、いこう」
〈顔を見られなくてよかった〉
由美は、ほっとした。
ドアをあけて、井上が先に入り、あとから恐る恐る入って行った由美は、
「あら、きれい！」
と、思わず叫んでしまった。
中は、ディズニーランドに出て来るお伽話の世界だった。
すみに、白雪姫が眠るのにふさわしいピンクのベッドがあり、七人の小人がベッドのぐるりをとりまいている。
中央には、ぐるぐる廻る大きなカップがあって、二人が、むき合って座れるようになっている。滑り台も、ブランコもある。
そして、部屋のあらゆるところに、ディズニーの漫画に出てくるミッキーマウスや、うさぎ、りす、ドナルドダックなどの縫いぐるみが飾ってある。
「楽しいだろう？　こんな部屋」
「ええ」
と答えたが、やっぱりまだ気が重かった。
二人は、しばらくカップに入って子供のように遊んだ。由美の心がすこしほぐれてきた。やがて井上は、カップを出ると、
「風呂に入ろうか？」
と、いった。
風呂には、滑り台をすべりおりて入るようになっている。
「でも、お話を」
「いいじゃないか。終わってからにしよう」
井上はいい、さっさと服を脱ぎ、滑り台をすべっていってしまった。
〈早く終わった方がいい。話し合いをつけて家に帰り、奈奈子に電話をしないと。彼女は今頃、電話してきているかもしれない〉

由美は、思いきって服を脱ぎ、滑り台に上がった。
滑り台の両端に、脚で、突っかい棒をしながらすべらないと、すごいスピードが出てしまうので、由美は、あられもなく両脚を開いてすべりおりた。
浴槽の中で、井上が、にやにやしながら見ている。
浴槽の中でも、洗い場でも、井上は、由美の軀に隙をみてはタッチしてくる。
やがて、石鹸の泡を軀全体に塗り、抱きついてきた。
はじめは嫌がって、軀をずらしてばかりいた由美も、次第に気分が乗って来た。
なんといっても、井上は、はじめて軀を許した男なのである。
由美の軀も泡だらけになって、乳房や、下半身の繁みが、彼の軀とふれ合う度に、
「あっ」
と吐息が洩れる。
眼がとろんとして、肩の力が抜けてきた。
「由美」
と、かすれた声で井上がいって、肩を抱きしめる手に力が入り、唇を合わせてきた。
お湯で暖まった軀に、冷たい彼の唇が、快い。
彼は、ぴったりと密着しながら、うしろから、手を入れて、繁みにさわってきた。びっくと由美の軀が動く。
「いやっ」
しかし、その声は小さかった。

5

風呂から上がると、井上は、由美をベッドに抱いて連れていった。
そして、腹這いになって煙草に火をつけた。
「君も腹這いになれよ」
「こう？」
「そうだ。君と結婚したいんだ。僕は、そのつもり

で、母親も呼んだんだよ」
「すみません。私もそのつもりだったんですけど」
由美は、こうして彼と並んで話していると、彼とずっといたくなり、銀行へ出ると、南田秋彦と結婚するつもりになる自分が情けなかった。
「僕は、君を信じていたのに、悲しいよ」
井上は、煙草を消すと、沈んだ声でいった。由美も悲しくなって来て、ふとんに突っ伏してしゃくり上げた。
「泣くなよ。こっちも泣きたくなる」
井上は、そういうと、肩にキスをした。
そのとき、井上は、由美の婚約指輪に気がつき、
「こんなものはずせよ」
といって、むしり取るようにして指輪をはずして、サイドテーブルにぽんとおいた。
井上は、由美の肩に、顔を伏せた。
由美は、やっぱり井上の方が好きだと、はっきりわかった。
〈でも、今更どうすることも出来ないわ〉
そう思うと、自分が悲劇の主人公になったようで、激しく泣き出した。
彼は、背すじに添って狂ったように、キスの雨を降らせてから、突然、うしろから、のしかかって来た。
「あ！」
由美が、はね起きようとするのを強い力でおさえつけ、彼は、犬のように、由美の中に入って来た。
「好きだよ」
彼は、手をまわして、由美の繁みにわけ入ってくる。
由美は、思わずのけぞった。軀の中を、思いがけない快感が走る。
「うっ！」
井上は、激しく動きはじめた。
由美の軀はこきざみにふるえ続け、やがて、弓なりに硬直した。

もう何も見えず、何もきこえなかった。軀の一点だけに神経が集中し、そこから軀中の水分が奔流のように流れ出て行った。

井上も、ぐったりとして、由美の背中に、おおいかぶさって来た。

由美の軀は、思い出したように、びくっと余震を繰り返していた。やっとそれがとまった時、井上が、下へおりた。

由美は、ねそべったまま、じっとしていた。軀を合わせたこともない秋彦のことは遠くになってしまっていた。

ふと気がつくと、バスルームで、シャワーの音がした。井上が、軀を洗っているのだ。

由美は、のろのろと、軀をおこした。

下半身から、しずくがしたたりおちる。

「君も、シャワーを浴びて来たら」

井上がいった。

由美はバスタオルで軀をおおいながら、バスルームに入った。

少し熱めのシャワーを浴び、次に、ぬるめの湯を浴びると、軀がしゃんとした。

〈井上さんとは別れたくない。秋彦さんは、こんなよろこびを私に与えてくれるのだろうか？〉

髪をとき、身じまいをしていると、井上が、冷蔵庫から、コーラを出して、コップに入れてくれた。

「おいしいわ」

由美は、一息に飲んでしまった。

ベッドのはしに腰を下した井上が、

「僕たち、やっぱり結婚しようよ。勤めはやめればいいじゃないか」

と、いった。

「ええ。明日いってみます」

「これから、うちに来て、おふくろに会ってくれないか？　たとえ、やめるにしても、一度だけ会ってくれないと、困るんだよ」

「ええ」

「もし、どうしても駄目になったら、あとで、そう知らせるよ」

由美も、彼の立場を考えると、従わないわけにはいかなかった。

二人が、外へ出てタクシーを待っていると、すっと、前に車がとまった。

ガラス窓があいて顔を出した男を見て、由美は、「あっ」といった。それは、中原次郎だった。

彼は、二人をじっと眺めてから、窓をしめると、風のように走り去った。

「中原だったね」

「ええ」

それっきり、井上は、黙り込んだ。

6

由美は、夜中の二時に、マンションに戻って来た。

井上の母親は、いかにも田舎の人らしい純朴な感じの人だった。

由美を見ると、娘に対するように、にこにこして、持って来た干し柿や、ぶどうを出してくれた。

「我ままな息子ですけど、よろしくおねがいします」

と、頭をさげ、井上の小さい頃の話などを楽しそうにした。

しばらくすると、式の日どりや、結納のこともきいた。

「畑を売ることにしたから、費用は心配しなくていいから。明日にでも、お宅のお父さんや、お母さんに会いに行きたいんだけど」

信じ切った様子で、いう母親に、由美は、どうしたらいいかわからず、井上の顔を見た。

「でも、急だから、明日というのは都合があるかも知れない。きいてみないとね」

井上は、由美に代わっていってくれた。

「はい。明日は、父も仕事でおりませんので、改め

てということにして下さい」

由美は、人のいい老母を見ているうちに、自然に秋彦の母親と比較していた。

秋彦の母親は、都会的で、きれいな人だったが、冷たい感じで、内心で何を考えているかわからなかった。

〈あの人が、お姑さんだったら、神経が疲れるにきまってる。それに、私を見下したようなところもあるし……〉

今夜は、もう遅いからと、井上がいい、家に戻ってきてからも、由美は、ぼんやりと考え込んだ。

決心するなら今だと思った。

井上と結婚するか、秋彦と結婚するか。

考え込んでいるところへ電話がかかって来た。

〈奈奈子さんだわ〉

しかし、電話に出てみると、相手は黙ったままで、しばらくすると、電話は切れた。

〈一体誰だろう？　まさか、秋彦さんでは……〉

最近、秋彦が、ときどき、電話をしてくるようになっていた。

短い電話で、これという話題もないのだが、由美は、心待ちにしていた。

彼が電話してきたのなら、こんなに遅くまで出歩いていたことを何といったらいいだろうか？

〈そうだわ。実家に遊びに行っていたことにしよう。結婚のことで色々相談に行っていたといってもいい〉

ほっとして、ベッドに入ったが、急に、中原と奈奈子に見られたことが気になってきた。

〈二人に喋られたらどうしょう？〉

と考えて、自分は、南田秋彦と結婚するつもりなのだと気がついた。

彼と別れるつもりなら、別に見られても構わないのである。

〈両親が、大よろこびで、結納が入ったことを、近所の人や、親戚にもフレ廻っているのに、どうしよ

う。体の弱い母親に、心配をかけたくない〉
という気がする。
奈奈子に電話を入れようと思ったが、いくらなんでも、この時間では遅すぎると思い、由美は、時計を見つめているうちに寝入ってしまった。
翌日、銀行に出ると、奈奈子が、由美をさけるようにしていることに気がついた。
気のせいか、二、三の女子行員も、由美の方をむいて、ひそひそと話しているようだった。
昼休みにやっと奈奈子をつかまえると、彼女は、
「あなたって、すごい人なのね。恋人がいるのに、南田さんと婚約するなんて」
と、堅い表情でいった。
「あれは、大学の先輩ですわ。食事ぐらいしてどうして悪いのですか？」
由美が、強く出たのが悪かったらしい。奈奈子は、
「そんならいうわ。私、あなたたちを尾けたのよ。そしたら、ラブホテルに入ったじゃない」
由美は、はっとした。
が、すぐに、
「そんなことないわ。あの人には、たしかに結婚を申し込まれていたけど、何でもないの。おねがいだから、誤解されるようなことといわないで。あなただって、恋人と一緒だったじゃないの」
と、いった。しかし、奈奈子の表情は、よけい堅くなった。
「私は、あの人と恋愛して結婚するんだから、何もやましいことないわ。あなたは、結納まですんで、婚約指輪まで貰っていながら、別の人とラブホテルに入ったんだわ」
奈奈子にいわれて、由美は、あっと思った。婚約指輪がないのだ。
はめなれないものなので忘れていたが、たしか、ラブホテルで、はずして、そのままだったような気がする。
由美は、奈奈子を説得するつもりだったが、それ

より、指輪の方が気がかりだった。

あっけにとられている奈奈子をおいて、由美は、外に出た。

そして、ラブホテルへ車をとばした。行ってみないと、何という名前だったのかさえ忘れていた。

受付けのところで、由美は、係員をよんだ。

第四章　京都旅行への誘い

1

恥ずかしい思いをして、ラブホテルを訪ね、ダイヤの指輪が落ちてなかったかときいたが、結果は、ないということだった。

由美は、すっかり落ち込んでしまった。

同僚の話では、千五百万円もする指輪だという。

〈私に、そんなお金はとてもないわ。婚約を解消するのなら、指輪を返さなければいけないし、結婚するにしても指輪はいる〉

家に帰って来てぼんやりしていると、電話がかかって来た。

〈秋彦さんかしら？〉

どきっとして受話器をとると、実家の母親だった。

「あ、お母さん」

由美は、ほっとしていった。

「どうしたの。びっくりしたような声を出して。あのね、今日、タンスや鏡台など道具類を見て来たのよ。マホガニーで、ちょっと高いけど、とてもいいものが見つかったのよ。あなたが見ていいとなったらきめるつもりだけど、いつがいい？」

「……」

「それから、電気製品もひととおり見ておいたわ」

「ありがとう」

仕方なく、由美はいった。

「どうしたの？　元気がないわね。風邪でもひいたの？」

さすがに母親だけあって、由美の声からいつもと違うことがわかったらしい。
「大丈夫よ。では、今度の土曜日にでもね」
結婚準備は、着々とすすんでいる。
〈一体どうしたらいいだろう〉
食事もせず、じっと考え込んでいた由美は、井上に電話をしてみることにした。彼は家にいた。
「やあ、昨日はどうも」
井上はダイヤの婚約指輪がなくなったことをきくと、
「あ、そうだ。しまった。あの時、サイドテーブルにおいたね。僕が明日ききに行ってくるよ。いや、今から電話した方がいいな」
と、いった。
「いえ。私、今日行って来たんですけど、ありませんでした」
「なかった？　それは大変だ。あれ、高いんだろう？」
「ええ。今日にでも返そうと思っていたのに、なくなってしまったんですわ」
「いくらぐらいするんだろう？」
井上は、心配そうにいった。
「よくわかりません。千五百万円ぐらいじゃないかって友だちがいってました」
「千五百万円ねえ……」
井上は、考え込んでしまった。
「あればなければ、婚約を解消することが出来ませんわ」
「僕が出来るだけ金を作るよ。そして、わけを話して、あとは、毎月返すとかというわけにはいかないかなあ」
「……」
そういう虫のいい話が出来るとは思えなかった。むこうは、結婚式場まできめ、案内状まで作っているのだ。断るのなら、婚約指輪と、結納金をそろえてぽんと返すしか方法はない。それでも、結納金だ

けですむかどうかわからないのだ。
〈不動産の売買などだったら、手付金を貰った方は、倍返しにしないといけないということをきいたことがある。五百万円の倍というと、一千万円だわ〉
「駄目かなあ。じゃあ、母にいって、畑を売って貰うよ。全部できるとは思わないけど」
「……」
由美は、黙って電話を切った。
ひょっとして、井上が指輪を持って帰ってくれているのではないかと思ったのだが、そののぞみも絶たれてしまったのだ。
その夜、由美は一睡も出来なかった。
〈婚約者がいながら、他の男とラブホテルへ入ったりしたから罰があたったんだわ〉

2

翌日、由美は銀行を休んだ。
眠っていないので、とても勤めに行ける状態ではなかったし、たとえ、行っても、指輪をしていないと、奈奈子たちに何をいわれるかわからなかったからである。
欠勤の電話をかけてからやっと眠り、昼頃、電話のベルで目が覚めた。
〈ひょっとして、あのラブホテルから、指輪があったといって来たのではないだろうか?〉
ラブホテルには、名前をいわず、電話番号だけ書いておいて来たのである。
「もしもし」
しかし、相手は、秋彦だった。思わずぎくっとして、受話器を握りしめた。
「あ、秋彦さん」
「今日、デートしたいと思って銀行に電話したんだけど、休みだというから、心配になってかけてみたんだ。風邪でもひいたの?」
「ええ。ちょっと」

「明日は大丈夫？　明日の夜、食事でもしない？」
「はい」
「じゃあ、明日、七時に、この間行ったレストランで待ってるから」
「はい」
由美は、受話器をおくと、その場に座り込んだ。
〈どうしよう。デートの時、指輪がないと、理由をきかれる〉
絶体絶命だった。
〈指輪をなくしたといってみようか？〉
と、考えた。
すると、そんな大切なものをどうしてなくしたのだということで、彼が怒って、破談になるに違いない。
それなら、相手を傷つけずにすむ。指輪を弁償するのも待ってくれるだろう。
へでも、どこでなくしたのかとか、警察に届けたかとか、しつこくきかれるにきまってる。どうしよう？〉
食欲はなかったが、いつまでも考えていても仕方がないので、近くの喫茶店まで、食事にいった。
一人でぼそぼそとピラフを食べていると、隣の席の話し声が耳に入って来た。
「あら、素敵な指輪じゃないのォ、どうしたの」
「彼に買って貰ったの」
「えっ」
「嘘よ、そんなわけないじゃないの。イミテーションよ」
「なんだ。びっくりしたわ。でも、本物みたいだわ」
「でしょう？　偽物にも色々あるのよ。ガラスのもあるし、ホワイトジュリコンのも。これは、今はやりのセラミックダイヤなの。ちょっと高いけど、結構よく見えるでしょう？」
由美は、そちらを見た。話しているのは二十歳すぎの若い女の子だった。

黒いワンピースを着た方が、指にその指輪をしている。

〈そうだ！　同じようなイミテーションの指輪を買おう。それで当座の間に合わせるのだ〉

由美は、食べかけのピラフを残して立ち上がった。そして、銀行に行って、キャッシュカードでお金を三十万円引き出した。

〈これで買える範囲のを買おう〉

一旦、家に帰って、ダイヤの保証書を出して見た。それには、一・七八カラットと書いてある。写真も載っている。

〈これを見せて、同じような指輪を探して貰おう〉

由美は、百貨店に出かけた。

貴金属を売っているコーナーとは別の階に、ファッションリングや、セラミック指輪を売っているところがあった。

親切そうな女店員がいたので、由美は、保証書を見せ、これと同じようなのが欲しいといった。

「ああ、本物は、貸金庫にでも預けておいて、普段なさる分をお求めなんですね」

「ええ。なくすと困るから」

すでになくしてしまったとはいえない。

「それでしたら、これをお求めになったお店で、ご相談なさる方が、同じようなスペアが出来ると思うんですけど」

「そんなに、そっくりでなくてもいいんです。似たようなのだったら」

女店員は、熱心に探してくれ、一つの指輪を持って来てくれた。

「これなんかどうでしょうか？　カットが同じですから、ちょっと目にはわかりません。心もち小ぶりなんですけど」

由美は、まず、その値段を見た。九万八千円だった。

「これにしますわ。サイズがどうかしら？」

幸いサイズも丁度よかった。由美は、それを買い

求め、早速指にはめた。

3

翌日、由美は、元気をとり戻して銀行に出かけた。
支店長が、すぐにやって来て、
「もう大丈夫？」
と、きいた。
「はい、昨日はご迷惑をかけました」
ふと気がつくと、奈奈子が、じっと、由美を見つめていた。
夜七時に、由美は、秋彦と会った。
秋彦は、食事を注文してから、改まっていった。
「ちょっときたいことがあるんだけど」
「何でしょうか？」
由美は、なんとなく不安な気持ちできいた。
「変な手紙が来たんだよ。君が、ラブホテルに入るのを見たって」
「ええっ」
由美は、息がとまるほど驚いた。
しかし、その驚き方を、覚えがないことをいわれたためだろうと解釈したらしく、秋彦は、あわててポケットから問題の手紙を出した。
「これなんだ」
見ると、由美が、ホテルに入っていた時間が書かれ、ラブホテルの名前も書いてあった。
〈次郎だろうか？　奈奈子だろうか？〉
しかし、由美は、そしらぬ顔で、
「嘘ですわ。あなたとのことをみんなうちの女子行員は羨ましがっているので、こんな中傷をするんですわ。私、ラブホテルなんか入ってません」
といった。
「ごめん、ごめん、それで安心したよ。中傷だとは思ったけど気になったからね。それに、あの日は、いくら電話してもいなかったから。どこへ行ってたの？」

「実家の方へ行ってました」
「実家？　でも、電話がかからないから、お母さんの方へもかけてみたんだよ。うちには来てませんということだったけど」
〈しまった！　母にいっておけばよかった。どうしよう？〉
しかし、由美は、自分でも驚いたくらい落ち着いていった。
「あ、思い違いしてましたわ。あの日は、大学のときの友だちと食事をして飲んでたんです。結婚のお祝いをしたいというので、一緒に見に行って、そのあとずっと喋ってたんです」
「何という人？」
「岡田良子さんです」
「ああ、仲のいい人だね」
秋彦はうなずいた。
「嫌ですわ、そんなことといって。秋彦さんだって、お友だちとお飲みになることだってあるでしょう」
「あるよ。でも、手紙に書いてある日に偶然、君がいなかったものだから」
といっているところへ食事が来たので、その話は、それきりになった。
食事が終わってディスコへ行ったとき、秋彦は、
「ねえ、京都へ二～三日旅行しない？　父の代わりに仕事で京都へ行くんだけど」
と、いった。
音楽がやかましいので、彼は、由美の耳に手をあてていった。
「えっ？　なに」
由美は、わざときこえないふりをした。
秋彦は、黙っていたが、ディスコから出て、車に乗ると、もう一度いった。
「もう、結納をかわしたんだから、いいだろう？　婚約旅行したいんだ」
「でも、銀行が休めるかしら？」
「この間、支店長にきいたら、君は、ほとんど休ん

でいないから年休があまってるっていってたよ。大丈夫だよ」

「考えてみます。うちの親は古い人なので」

由美が即答しなかったので、彼は、少し不機嫌になった。それは、帰るまで続いた。

彼に送って貰って家に帰りつくと、由美は、服も着がえず、ベッドに寝ころんだ。

秋彦は、由美のことが心配になって来たのだと思った。それで、京都へ旅に行って、由美とのきずなをしっかりとかためたいと思ったのだろう。

〈指輪のことがバレないでよかった〉

と思いながら、自分はやっぱり、秋彦と結婚したいのだと気がついた。

彼と結婚すれば、なにもかもうまくいくのだ。

〈そうだわ。指輪は、京都旅行中に落としたことにしよう。それなら、彼も許してくれるわ〉

それに、正直なところ、由美としては、秋彦とセックスがうまくいくのかどうか心配だった。京都行きは、それをためす機会でもある。

〈もし、彼とのセックスがうまくいかなかったり、味気ないものだったら、それから断ることも出来る。一度でも、そういうことがあれば、彼の両親も、強くは出ないのではないだろうか〉

ただ、行き先が、京都というのが、気になった。京都では、レイプされた苦い思い出がある。でも、そのことを、秋彦にいうわけにはいかなかった。

翌日、電話して来た秋彦に、由美は、京都行きを承知した。

「そう。よかった。じゃ、楽しみにしてる」

秋彦は、明るい声でいって電話を切った。

問題は、井上だった。彼には、指輪がなくなったことをいって以来、連絡していない。

〈やっぱり、井上さんの話は断ろう。もう今さら、秋彦さんの話は断れないといって〉

そう思って、思い切って電話をかけた。

「やあ、こっちから電話かけようと思ってたんだ。

指輪やっぱりない？」
「ええ」
「じゃあ、母に相談してとにかく、五百万円だけ作ったから、会おうよ。相手の人はなんていってた？」
井上は、由美が、指輪のことを話して、縁談を断ったものだとばかり思っているようだった。

4

「それが、断れなかったんです」
由美はいった。
「どうして？」
「お金も出来ないと思ったし、母なども、着々と結婚の準備をしているので」
「そんなこと、ひどいじゃないか。僕は母親にいって、五百万円作ったんだよ。結婚の費用がいるといって」
井上は憤慨していた。
「すみません。でも、ご迷惑をかけたくないんです」
「そんな、水臭いじゃないか。それに、母なんかは、畑を売ってお金をこしらえたんだよ。君は、僕を愛してないのか？」
「そんなことありません。好きです。でも……」
「やっぱり金持ちの彼の方がいいのか？」
「……」
「今となってひどいじゃないか。とにかく、会って話そう。ね？」
「申しわけありません。お母さまには、お詫びしておいて下さい。私も辛いのです。でも、結納が入ってしまっていて、どうにもならないんです。私のことは忘れて下さい」
ここでしっかり断らなければと思い、由美は、一生懸命いった。
「ここまできて、もう引き返せないよ。君が断りに

くいのだったら、僕が行って断ってくる。今からすぐに」

「待って下さい。そんなことされたら私、死んでしまいます。やめて下さい」

「……」

急に、井上は、黙り込んだ。彼は、ショックを受けているのだろう。

しかし、由美は、何もいわなかった。ここで、何かいったら、彼と別れられないと思った。

しばらく黙っていた井上は、

「とにかく、一回会って話したい。このまま別れるなんて出来ないよ」

と、沈んだ口調でいった。

それでも由美が返事をしないでいると、

「今度の土曜日の午後、五時に、喫茶店『リップ』で待っている。来てくれるね？」

といって、電話が切れた。

〈やっぱり、しっかり話をつけておかないといけないわ。土曜日には行こう〉

由美は、心にきめた。

井上に断ったことで、やっと自分の気持ちも、きまった感じだった。

もう、秋彦一すじで行かないといけないと思った。

翌日、秋彦から電話があった。

「今度の土曜日、京都のホテルとったからね。新幹線の切符も用意しておいたから、朝八時に東京駅に来てくれないか。いいね？」

「はい」

由美は、受話器をおいてから、母親に電話をかけた。

秋彦と婚約旅行に行くというと、母親は、驚いて、

「まだ、結婚もしてないのにそんな……」

と、いった。しかし、しばらく色々いってから、父親に相談に行った。

〈反対してくれてもいいわ。そしたら、彼にもそういえる〉

由美は、心の中で思った。
だが、しばらくして、電話口にもどって来た母親は、
「もう、結納も入っているし、仕方がないだろうって。けど、旅行したために断られないように、気をつけないといけないよって」
と、いった。
「では、道具を見に行くのは、今度にするわ」
親が承知したので、ほっとしながらも、まだ心が重かった。
〈土曜日には、井上さんに会って話をつけるはずだったのに、どうしよう〉
電話をかけなければいけないと思いつつ、とうとう土曜日の朝になってしまった。
駅からかけようと思って、少し早めに行ったが、すでに、秋彦は来ていた。
「やあ、よく来てくれたね。はい、切符」
秋彦は、にこにこしていった。
由美は、秋彦が売店に週刊誌を買いに行ったわずかなすきに、井上に電話し、京都へ行くとだけいって電話を切った。

5

ひかりが動き出すと、由美は、もう井上のことは忘れることにした。旅に出るというのは、やはり気がはずむものである。
「新婚旅行は、海外だから、その前に、国内旅行をしたいと思ったんだ。君に、京都を見せてあげたいと思って。京都って、まだ行ったことがないでしょう？」
秋彦が、何げなくいっている言葉に、由美はどきっとした。
「ええ。修学旅行で行ったきりです」
「ああ、修学旅行でね」
秋彦は、修学旅行で行ったといっただけでもがっ

かりしたようにいった。
〈一人旅をして、レイプされたことがあるといったら、この人は、どんな顔をするだろうか?〉
と、由美は、胸がどきどきした。
秋彦は、流れていく窓外の景色をじっと見つめている。
途中で、昼食の時間になり、駅弁を買うことになった。
由美は、旅行の楽しみの一つは、駅弁を食べることだと思っていたから、何にしようかと、そわそわした。
〈一番好きなのは、幕の内だから、それにしよう〉
幕の内といっても、何段階もある。一番いいのを買ってくれるといいなあと思っていると、売り子を呼びとめた秋彦が、無造作に、
「うなぎ弁当二つ」
といって、金を渡した。
「お茶いりますか?」
と売り子がいうと、いらないといい、釣りを受け取った。
「はい。お弁当。僕はうなぎが一番好きなんだよ」
秋彦は、そういうと、おいしそうに弁当を食べ出した。
由美は、うなぎが嫌いだった。
〈ひと言、何を食べたいか、きいてくれればいいのに〉
由美は、しばらく包みをあけず、じっとしていた。
「君、食べないの?」
不思議そうな顔で、秋彦がきいた。
「あの、うなぎはちょっと……」
「どうして? うなぎはおいしいよ。食べてみなさい」
そういわれると、食べないわけにいかない。仕方なく、由美は、包みをひらいた。
脂っこい匂いがして、胸が一杯になった。それでも、ほんの少し箸をつけた。

京都に着いて列車から降りるとき、秋彦は、由美の残した弁当を見て、
「もったいないね」
と、いった。
ホームに降りたつと、さすがに、京都に来たという実感がした。
二人は、中京区の藤家という日本旅館に泊まることになった。
由美は、ホテルの方が好きだったが、秋彦は、日本旅館でないと泊まった気がしないという。
部屋は、床のついた八畳間と、六畳、それに、三畳の玄関の間がついていた。
入口は、ガラスの入った格子戸で、カギがかかるようになっていた。
座敷に落ち着くと、お茶を持って入って来た女中が、宿帳を出した。
秋彦は、自分の名前を書き、その横に、他一名と書いた。
妻と書くと思っていた由美は、がっかりした。
〈こういう旅行の場合、たとえ、愛人でも、妻と書くものだというわ。それなのに〉
秋彦は、お茶を飲むと、タクシーを呼ぶようにいった。
「どちらへ行かはりますの？」
女中がきいた。
「そうだね。東寺へ行って写真をとりたいな。それから、了徳寺へ行こう」
由美は、嵯峨野でないことにほっとしたが、自分にどこへ行きたいかきかず、どんどんきめてしまう秋彦に失望していた。
〈井上さんだったら、私の気持ちを大切にしてくれるだろうに〉
こんなことで、結婚生活がうまくやっていけるのかと、気がかりだった。秋彦は、甘やかされて育ったせいか、独善的で、少しでも彼の意見と違うと、不機嫌になる。

二人は、タクシーで、まず、東寺に行った。

「わあ、鳩がいっぱい！」

数百羽の鳩が、境内にむらがっていた。

慣れているとみえて、そばへ行っても逃げない。

由美は、バッグに、クッキーが二つほどあったのを思い出して、小さく砕いて、まいた。たちまち鳩が、集まって来て、ラグビーのようにタックルして食べる。

由美の心が和んで来た。

秋彦は、退屈そうに見ていたが、

「学生時代、鳩を捕えて友だちと食べたんだけど、おいしかったよ」

と、いった。

「ま、可哀そう」

由美は、眉を寄せた。

五重塔を背に、お互いに写真をとり合って、二人は、東寺を出て、了徳寺に向かった。

6

了徳寺というのは、右京区鳴滝にある浄土真宗大谷派の寺である。

丁度、由美たちが行った日は、大根焚きの行事が行われていた。

「この寺はね、建長四年、親鸞聖人が、月輪寺参詣の途中立ち寄ったところ、庵主が、手作りの大根を煮て親鸞に奉った寺なんだ。聖人は喜んで、そばに生えていたススキの穂をとって、『帰命尽十方無碍光如来』と書いて尼に与えた。それから、その日を記念して、大根を焚いてふるまうようになったんだそうだ」

秋彦は、調べて来たらしく、得々といった。

由美にとっても、暖かそうな湯気が上がる大根焚きの行事は、珍しく面白かった。

二人は、焚き上がった大根を貰い、ふうふう吹き

ながら食べた。

旅館に戻ると、部屋についた風呂に、一人ずつ入った。

秋彦は、一緒に入ろうといわなかったので、緊張していた由美は、ほっとした。

風呂から上がると、二人は、浴衣と丹前を着た。

「落ち着くね、丹前を着ると。ホテルでは浴衣しかないからね」

「ええ」

今度は、由美は、素直にいった。

やがて、和風の座卓いっぱいに、料理が出された。

〈やっぱり、彼のいうとおり、旅館はいいわ。こんなすてきなお料理が出るんだもの〉

由美は、お腹がすいていたので、夢中で食べた。

薄造りの目板がれいの刺身、かにの酢のもの、ゆずがま、鯛のあらだき、煮もの、お吸物、すべてがおいしかった。

「味が薄いね。母が関西出身なので僕は、こういう薄味が好きなんだ」

秋彦が、満足そうにいった。

いつも辛い味付けをしている由美は、結婚したら気をつけなければと思った。

テレビを見たりしているうちに、すっかり、夜になった。

〈いよいよだわ〉

由美は、軀を堅くした。

初夜といえばいえたが、それならもっと甘い期待や、はずんだものがあるはずだが、今日は、何か新製品のテストのような雰囲気だった。

〈秋彦さんの気に入らなければ、婚約が解消されるのだろうか?〉

秋彦は、なかなか寝ようとはいわず、いつまでもテレビを見ている。

そのうち、由美は、ねむくなって来た。昨夜は遅くまで準備をしていたし、朝は早く起きたからである。

やっと彼が腰をあげたとき由美に反にして
れが切れてすぐには立てなかった。
「先にふとんに入っていなさい。歯をみがくから」
彼の言葉に、由美も、あわてて風呂場に入って歯
をみがいた。
由美は、持って来たピンクのネグリジェに着がえ
た。そして、畳の上に敷かれたふとんに入った。枕
もとに、和風のスタンドがついている。
二つのふとんは、ぴったりとくっついていた。
やがて、彼が来て、浴衣と丹前を肩から落とすと、
ブリーフ一枚で、ふとんにもぐり込んだ。
くるりと、由美の方をむくと、さっと、こちらの
ふとんに移って来た。
彼は、勢いよく、由美の下着をはぎとると、あっ
という間に、折りかさなって来た。
五分ももたずに、彼は、動きをとめ、終了した。
そして、自分のふとんに戻って、寝息をたてはじ
めた。

あっけにとられるような早さだった
〈一体、どうしたのだろう？　まさか、これだけで
は……〉
由美は、熱くなった軀をもてあまして輾転反側し
た。
それでも、眠ることが出来ず、とうとう由美は起
き上がって、風呂場に行き、熱いシャワーを浴びた。
そして、シャワーの雨を、下半身の敏感なところに
降らせた。
とろけるようないい気持ちだった。しかし、ふと、
〈これからの結婚生活の間、いつも、こうして、シ
ャワーの雨を降らせ続けなければいけないのだろう
か〉
と思うと、急に、寒々として来た。
由美は、今度は、ぬるいシャワーを浴び、やっと、
心を落ち着かせてふとんに入った。
翌朝目が覚めて、顔を洗い、化粧をしていると、
秋彦が起きて来た。

「おはよう」
「おはようございます」
由美は、彼が、どんな感想を持ったのかきいてみたかったが、彼は、黙ったままだった。女中が、お膳を運んで来た。
さて食べようとしたとき、隣の部屋が、さわがしくなった。
「どうしたんですやろ」
見に行った女中が、とんで帰って来た。
「隣の部屋のお客さんが、死んではります」
「えっ」
「本当?」
由美と、秋彦が同時にいった。
「はい、井上というお客さんですけど」
女中がいった。

第五章　密室殺人

1

由美と秋彦は、だだっと廊下にとび出し、隣の部屋にかけつけた。

部屋の前には、従業員や、客が集まり、中をのぞき込んでいる。

あけられた戸から中をのぞくと、丹前を着た男性が、うつ伏せに倒れていた。首には、紐が巻きついている。

旅館のおかみと、旅館の主人らしい中年の男性が、呆然として、死体のそばに立っていた。

〈井上さんだわ。どうしてここへ〉

由美の顔から、血の気がひいた。

外の道路を、パトカーがサイレンを鳴らして走って来て、とまるのがわかった。

やがて、刑事たちが廊下を駈けて来た。秋彦はそれを見ると由美にささやいた。

「部屋に戻ろう」

「はい」

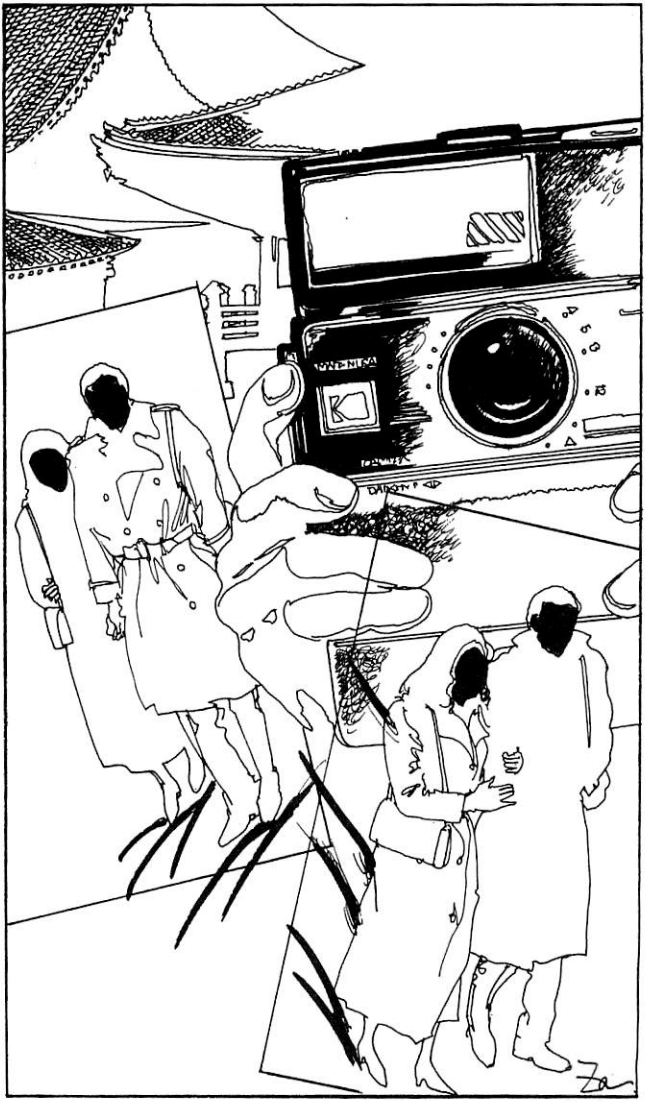
「顔が蒼いよ。かかわり合いにならないようにしよう」

秋彦は、由美を引っぱって、部屋に戻った。係の女中も入って来た。

「申しわけございません。どうか、お食事を召し上がっとくれやす。あとになったら、食べられへんかも知れまへんよってに」

彼女がお茶を入れてくれたが、由美は食べるどこ

ろではなかった。
秋彦は、それでも、軽く一杯御飯を食べた。
「どうしたの？　食べないの」
秋彦は、由美を見つめた。しかし、とうとう由美は、みそ汁を一口飲んだだけだった。
「人が死んでいるの見たのはじめてですから」
「そうだね。だけど、どうなるのかな？　僕たちは、外出していいんだろうか？」
女中は、帳場へ行ってきいてくるといって出て行った。
しばらくすると、女中の代わりに、おかみが顔を出した。
「ご迷惑をおかけしてすんまへん。刑事さんが、殺人事件やよって、宿のお客さん全員にお話おききしたいゆうてはりますので、しばらく外へ出んようにお願いしたいのどす。申しわけございまへん」
おかみの顔も蒼ざめている。
「死んだのは、どんな人なの？」
秋彦がきいた。
「東京から来た会社員の人どす」
「へえ。一人で来たの、アベックじゃないの？」
「お一人だけどす。昨日の夕方になって突然、京都駅の旅行ガイド会社から、一人、泊めて貰えへんかとお電話があったので、お泊めしたんどす。本当は、予約のないお方は、お泊めせえへんのどすけど」
〈井上さんは、私と秋彦さんを追いかけて来たんだわ。そして、私たちが、この旅館にいるのを確かめて、直接来たのでは泊まれないと思って、旅行社にたのんだのに違いない。でも、一体、誰が彼を殺したのだろう？〉
由美は、井上が死んだことにショックを感じながらも、心の底では、ほんの少し、ほっとしたのも事実だった。
彼が京都まで追いかけて来たことから、彼の執念を知って、今さらのようにおそろしくなった。彼が、その執念でまとわりついたら、秋彦との結婚は破れ、



それだけでなく、両親や銀行に大変な迷惑をかけることになる。その上、ダイヤや、結納金を返済しないといけないことになり、由美は破滅してしまうだろう。

その彼がいなくなったのは、正直いって助かったという気がする。一方、彼の丹念な愛撫やセックスが思い出され、軀の奥がやるせないような気持ちになった。

「ちょっとすみません」

入口の戸をあけて、刑事が二人入って来た。一人は、京都府警の狩矢というものだと名乗ったあと、話をききたいといった。

「隣の部屋で亡くなった男性をご存知でしょうか？」

狩矢は、じっと二人を見つめた。

「いいえ。全然知りませんが……」

秋彦がいうと、狩矢は、由美に眼をむけた。

「あなたは、知ってるんじゃないですか？」

「えっ？　どうしてですか？」

狩矢は、手袋をはめた手で、一枚のポラロイド写真を見せた。

それには、秋彦と由美が、並んでいるところが写されていた。

「井上という人は、あなたたちを尾けていたようなんですが」

秋彦が、写真をのぞき込んだ。

「知りません」

由首は、堅い表情で答えた。ここは、あくまでも知らないで通そうと思った。

すると、刑事が、ビニールの袋に入った封筒を見せた。それには、由美の名前が書いてある。

2

〈彼が何か書き残したのかしら？　それだと、全く知らないといっては、かえって疑われる〉

由美の頭は、めまぐるしく回転した。

「すみません。この井上という人は、どんな顔の方ですか？　さっき、入口からのぞいたんですけど、うつ伏せでよく見えなかったんです」

由美は、狩矢の顔を見ていった。

「じゃあ、ちょっと、こっちに来て下さい」

狩矢は、由美だけを連れて、隣の部屋に行き、死体の顔を見せた。

「あっ、この人は、私の大学の先輩で、井上さんという人です。井上という名前は多いので、気がつきませんでした」

由美は、はじめて知ったというように、演技した。

「あなたとどういう関係の人ですか？」

狩矢の眼はきびしかった。

「別に、どういう関係ではありません。上級生というだけで……」

と、いってから、はっとした。彼の母親と、由美は会っている。彼の母親は、きっと由美のことを、井上と結婚する相手だというだろう。

〈どうしよう？〉

由美は、必死になって考えた。そして、言葉を続けた。

「あの……こういうことといっていいかどうかわかりませんが、井上さんは、私に、結婚して欲しいといっていました。私は、婚約したあとでしたし、お断りしました。先輩ですから、あまりきつくはいえませんし、迷惑していました」

「つまり、この人は、あなたに片想いして、追いかけて来たということですか？」

狩矢は、井上の顔をぐっと、由美に近づけた。由美は、思わず顔をそむけながら、

「そうです。でも、私は、全然知りませんでした」

と、いった。

「ところで、この封筒ですが、彼は、何をあなたに書こうとしたと思いますか？」

狩矢が、封筒を突きつけた。

〈恨みごとが書いてあるのだろうか？　まさか結婚のことが書いてあるのでは……〉

由美は、緊張した。中味によっては、自分のいっていることが嘘で、井上とは、軀の関係があったことがわかるのだ。

〈でも、つまらないことをいわないようにしよう。たいしたことは書いてないのかもしれないから〉

由美は、息を吸い込んで気持ちをととのえてから、

「さあ、わかりません。何が書いてあったんでしょうか？」

と、いった。

狩矢は、じっと由美の顔を見つめてから、

「実は、中味が入ってないんですよ」

と、いった。

「えっ、便箋が入ってなかったんですか？」

由美は、驚きながらも、ほっとした。しかし、狩矢は、むつかしい顔をして、

「多分、中には、便箋が入っていて、何か書いてあったんだと思います。それとも便箋は書きかけで、封筒とは別のところにあったのかも知れません。しかし、この人を殺した犯人が、中味を持ち去ったのです」

と、いった。

「どうして持ち去ったのかしら？」

「それは、犯人にとって都合の悪いことが書いてあったからだと思いますよ」

「でも、私じゃありません。私だったら、封筒も持ち去りますわ。中味を持って行っても、封筒をおいておいたら、何にもなりませんから」

由美は、憤慨したようにいった。

「しかし、封筒と、便箋は、別の場所にあったので、気づかなかったのかもしれないし、中味さえ見つからなければ大丈夫と思ったのかもしれない」

狩矢は、由美を疑っている様子だった。

〈それにしても、彼は一体、何を私に書こうとしたのだろう？〉

由美は、それを、第三者が持っていることに、よけい怖れを感じた。

部屋に戻ると、秋彦が待っていた。

「遅かったね。何をきかれたんだ？」

秋彦は、いらいらしたようにいった。

3

「びっくりしましたわ。だって、死んでいたのは、私の大学の先輩の井上さんなんですもの」

由美は、わざと明るく興奮したようにいった。

「その男と君は、一体どういう関係なんだ？」

「関係なんかありませんわ。とてもいい人で、勉強もよく出来た人です。刑事さんの話では、私に片想いしていて尾けて来たんじゃないかって」

「そんな男がいたのか」

秋彦は、不機嫌にいった。

「私は、井上さんがそんなに思いつめているなんて知らなかったんです。確かに、結婚してくれないかって冗談のようにいわれましたけど」

人の好さそうな井上の母親の顔が目に浮かんだが、今は、自分を守るのに必死だった。

「でも、その男は自殺したんじゃないんだろう？殺されたとなると君にも疑いがかかるんじゃないかな」

秋彦は、考え込んでいる。

「でも、私は、井上さんを殺したりしませんわ。もし、あの人と私が深い関係にあったとしたら、こそこそ尾けて来たりしないで、二人の前に出て来て文句をいうはずですわ」

「でも、今まで、そういう男がいることは、僕にいわなかったじゃないか」

「男女共学の大学を出たんですから、挨拶するくらいのお友だちは、たくさんいますわ。あなただってそうでしょう？」

由美は強気でいうと、秋彦は黙った。

しかし、しばらくすると、
「でも、殺人事件に巻き込まれるのは困るんだよね」
と、いった。
「すみません。だったら、婚約を解消して下さってもいいわ」
由美は、本心からいった。
彼との昨夜のセックスが思い出された。
〈いつもあんなのだったら嫌だわ。こうして、婚約旅行までしたのだから、彼の方から断る場合は、結納だって返さないわ〉
由美が強く出たので、秋彦は、あわてたように、
「解消なんかしないよ。ただ、ちょっと驚いただけだよ」
と、いった。
外出が禁止されたので、二人は、所在なく、部屋の中でぶらぶらしていた。
死体は、京大病院に運ばれて行った。午後から解剖されるのだということを、二人は、係の女中からきいた。
〈そのうちに、彼の母親が来るに違いないわ。そのとき、顔を合わさないようにするためには、どうしたらいいだろう?〉
由美は、それが気がかりだった。
あの母親が、刑事に何をいっても仕方がないが、秋彦といるところへやって来て、色々わめかれては困るのである。
しかし、母親は、幸い、二人の部屋へはやって来なかった。
所轄署へ行って話をしているのかもしれないし、まだ着いていないのかも知れない。
女中の話で、井上の死んだ部屋が、密室になっていたことが、やがてわかった。
「あのお部屋は、ここと同じで庭に面してますけど、ガラスのサッシ戸がついて、カギがかかってたんです。入口は、ガラスのはまった格子戸が二枚入って

いて、二枚の重なったところと、柱とに、カギがかかってたんどす。朝、早くたちたいということやったので、電話をかけたんどすけど起きはらへんかったし、お一人の部屋やから、あけてもええやろと思うてあけたら死んではったんどす。おかしおすやろ？　警察の方でも、これは、密室殺人やなあというてはりました」

「お部屋のカギはどこにあったのかしら？」

由美が、きいた。

「へえ、部屋の中にありました。帳場にも合いカギがありますけど、しっかり管理してはって、今日あけたときには、あの部屋の係が帳場から借りてきたんどす。自殺やったらええのどすけど」

女中は、困惑したような顔でいった。

「でも、首を締められて死んでいたのでしょう？　自殺ということはないわ。それとも、首を吊ったあと、紐が切れて下に落ちたのかしら？」

「そういうこともないと、刑事さんがいうてはりました。もし、毒を飲んで死んでいたら、完全に自殺と思ったともいうてはりました」

二人が話しているのをきいていた秋彦は、

「いつまで、ここにじっとしていないといけないんだろう。折角、京都に来たのだから、嵯峨野にでも出かけたいんだけど」

と、ため息をついた。

女中が行ってしまったあと、二人は、テレビをつけたが、それぞれ別のことを考えているらしく、黙ったままだった。

由美は、心の中で、井上を殺したのは、秋彦ではないかと考えていた。

〈彼は、私と井上とのことを知っていて、彼が尾いてくるのを見て、夜中に彼の部屋に話しに行き、殺してしまったのではないだろうか？〉

しかし、彼が、ライバルを殺すほど由美を愛しているようには思えなかった。

〈でも、彼は、金持ちの一人息子で、我ままだ。気

にいらないことがあると、カッとする性質でもある。井上のことを知って、発作的に殺したということも考えられる〉

由美は、ぼんやりとテレビの画面を見つめた。

その時、電話のベルが鳴った。

二人がここにいることは、あまり人は知らないはずである。

由美が受話器をとった。

4

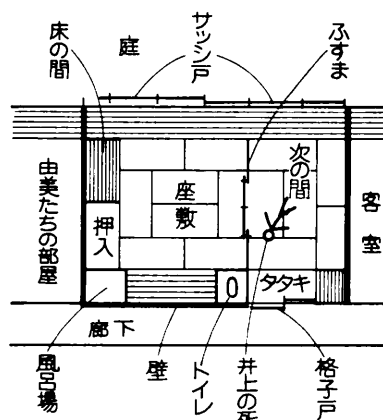
「もしもし」

由美は、受話器に呼びかけたが、相手は何もいわない。やがて、電話は切れた。

「間違い電話ですわ」

と、秋彦にいったが、なんとなく気味が悪かった。

由美は、することがないので、井上が死んでいた部屋の見取図を書きはじめた。



女中の話では、由美たちの部屋と対称になっているが同じ間取りだときいたので簡単だった。

「何書いてるの？」

秋彦が、そばに寄って来た。

「井上さんの部屋の見取図を書いてるんです。密室殺人だというので、犯人は、どういう風にして殺し

たのかと思って。私、推理小説が好きなんです」

由美は、強いて明るくいった。でも内心では、自分に疑いがかからないようにということで、必死だった。

〈早く犯人が見つかって、解放されたいわ〉

秋彦は、しばらく見ていたが、サッシ戸をあけて、庭を眺めた。

何を考えているのかわからず、由美は、気づまりだった。

〈本当に愛している人だったら、こうして部屋に何時間もいても、気づまりどころか楽しいはずだわ。私は、この人を愛していないのだろうか?〉

由美は、図面を見ているふりをして考えた。

「ちょっと、交渉してくる。嵯峨野へ行っても、帰りはここへ戻ってくればいいんだろう? 容疑者でもないのに、いつまでも足どめするのはひどいよ」

突然、秋彦はそういうと、部屋を出ていった。

由美は、図面を眺めた。

〈井上さんの部屋に入るとしたら、入口の格子戸から入るか、サッシ戸から入るしか方法はないわ。でも、中からカギがかかっていたら、どうして入ったのだろう?〉

と、まず、考えた。

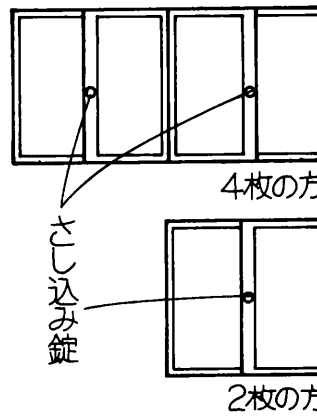
しかし、すぐ気がついた。

〈多分、中へ入るときには、何か口実を設けて、井上さんに戸をあけさせたのだわ。そして、井上さんを殺し、外へ出て行ったのに違いない〉

犯人は、サッシ戸の方か、格子戸のどちらからか出た。そして、そのとき、自分の出入りしなかった方の戸は、出る前に内からしっかり閉めたに違いないと思った。

〈たとえば、サッシ戸の方から出たのなら、格子戸の方は、しっかり戸締りし、サッシ戸から庭に出る。そして、なんとかして、外から、サッシ戸を閉める。そのなんとかしてというのが問題なんだわ〉

サッシ戸は、八畳の座敷の方に四枚、六畳の次の



間に二枚入っている。

一体どんな風にカギがかかっているのかと、由美は、縁側へ行ってみた。

四枚の方は、二ヵ所、二枚の方は一ヵ所のさし込み錠で錠がかけてある。

「あら、さし込み錠なのね」

由美は、呟いた。

由美のいるマンションなどでは、ぐるっと廻る金具でとめるようになっているからである。

女中が入口から入って来て、そばまで来たので、由美は、さし込み錠のことをきいてみた。女中は、笑いながら、

「ああ、それは、庭からでもあけられるようになっているんどす。もちろんカギは、帳場でしっかり管理しています」

と、いった。

そのあと女中は、

「ちょっと失礼します。お掃除をしますので」

と、いった。

5

掃除が終わっても、秋彦は戻って来ない。

〈刑事さんと、私のことで話しているのかしら？それとも、井上さんのお母さんと会ったのかもしれない。どうしよう？〉

じっと待っていると、よけいに気になるので、由美は、密室の謎の続きを考えることにした。

サッシの方は、一通り考えたので、次は、格子戸の方である。

日本旅館でも、部屋の入口は、ドアのところが多いが、ここは、木の格子戸で、ガラスが上を少しだけあけて入っている。

女中が、前には、ガラスは入ってなかったのだが、用心のため、二～三年前にガラスを入れたのだといった。二枚の格子戸の重なるところに、さし込み錠がかかっていて、これも、外からと中からとかかるようになっている。

〈犯人が、格子戸の方から出たとしたら、カギを持って出て、外から掛けるより仕方がない。でも、その場合は、そのカギを、部屋の中へ返すには、どうしたらいいだろう?〉

ガラスが少しあいている上から投げ込むことも考えたが、カギは、次の間でなく、八畳にあったというから、とても出来ない。

考え込んでいるところへ、秋彦が帰ってきた。

「おかえりなさい。遅かったですね」

と、由美がいうと、

「帳場にいた刑事さんと一緒に、捜査本部まで行って来たんだ。父の会社の話なんかもして、身元もしっかりしてるから、それでは、五時までに帰って来て下さいということで、出てもいいことになったよ」

「うれしい!」

由美は、本心からいった。ここにじっと、何時間もいるのは耐えられなかったからである。ただ、行き先が、蟇峨野というのは嫌なので、

「蟇峨野まで行ってると、次々にお寺をまわって、五時までには帰って来れないのと違いますか?」

といったが、秋彦はきかなかった。

「いや、予定通りにしよう。こんなことで予定をかえるのは嫌だよ。早く、用意しなさい」

といった。
由美はあわてて化粧をなおし、服を着がえた。
「寒いかもしれないから、コートを着て行った方がいいよ」
秋彦がいい、由美もそれに従ったが、嵯峨野が近づいたとき、そのコートは、あのいまわしいレイプ事件のときのだと気づいて、しまったと思った。
車で、まず行ったのは、大覚寺である。
「平安時代のはじめに、嵯峨天皇が、離宮をいとなんだ所なんだよ。だから、寺というより御所という感じだろう?」
秋彦が機嫌よく説明した。
見るものほとんどが、重文指定のものである。
二人は、境内にある大沢の池のそばに立った。
「まるで竜が出て来そうな池ですのね」
広大な池を見ながら由美がいった。
「東西も、南北も二百メートルあるときいている。秋には、ここで、月見の宴が催されるんだ。竜頭鷁首といって、鷁のような首をつけた船や、竜の頭の船が出て、見物客を乗せて、夜の池を漕いでいくんだ。僕も前に一度乗ったことがあるけど、その時は、小雨が降っていて、本当に竜の出て来そうな感じだったよ」
秋彦がいった。
こんな沼のような池に沈んだら、浮き上がって来れないだろうと、由美は、身ぶるいした。
「次は、化野の念仏寺に行こう。コートを着た方がいいよ」
二人は、化野に向かった。
ここは、昔から風葬の地といわれ、無縁仏や、水子供養の地蔵がまつられている。
「わあ、すごい数の石仏ですね」
念仏寺に行った由美は、見わたす限りの石仏に感動した。一つ一つ顔が違う。
由美は、線香を買って来て、石仏に供えた。女性の観光客も多い。

「パンフレットとお守り買ってくるよ」
秋彦が寺の事務所に行ったあと、由美の肩が、ぽんと叩かれた。
ふり返ると、若い男が立っていた。
「誰？」
と、いうと、相手は、にやにやした。
「一年前、お会いしましたね？　いい躯してたなあ」
「あっ！」
由美は、思わず、後ずさった。
それは、一年前、由美をレイプした中の一人だった。
「警察にいうわ」
「いったらいいじゃないか。今、一緒だったのは、あなたのご主人？　それとも恋人？」
「本当に、警察に電話するわ。罪になるのよ」
「どうぞ。それより、あの人に知れたら困るんじゃないの」
「……」
由美は、黙り込んだ。
「俺、あんたが忘れられないんだよ。もう一回つき合って欲しいな」
「いやです。私、結婚するんですから」
「それなら、今晩、夜中に、会おうよ。約束してくれないと、ほら、彼が出てくるよ」
「夜などに出られません」
「この薬飲ますんだ。ウイスキーか何かに入れて。睡眠薬だから、彼は眠ってしまう。十一時に、京都駅のタクシー乗り場。いいね。来なかったら、彼に全部バラすぜ」
その時、本当に、秋彦が、むこうから歩いて来た。
「早く」
男は、薬包紙をそばの石の上におくと行ってしまった。
彼が近づいて来た。
由美は、急いで、薬包紙をハンドバッグに入れた。

「どうしたの？　今、男の人と話してたね？」
秋彦は、男の去った方を見ながらいった。
「京都を案内しましょうって。あなたと一緒だといったら、がっかりしてたわ」
「アハハ」
秋彦が、そのまま信じたらしいので、胸をなでおろした。
あと、滝口寺と、二尊院に行ったあと、道で土産ものを買って、二人は、旅館に帰って来た。
旅館の部屋に戻ると、今買って来たばかりの土産ものを並べてみた。竹細工は特にたくさん買い込んで来た。
竹かご、竹のフォーク、竹の指輪、竹の人形などである。それから和紙で作った嵯峨面なども気に入ったものの一つだった。
京菓子も色々買って来た。
そういうものを見ているうちに、食事が出来て来た。
「風呂へ入ってからにする？　それとも、食事を食べて、寝る前に風呂にする？」
珍しく、秋彦が、由美の意見をきいた。
「そうですね。お風呂を先にして、それから、お食事しましょう。その方が落ち着きますわ」
と、由美はいった。
心の中では、化野で会った男のことを考えていた。
そのとき、刑事が入ってきて、二人が、部屋に戻っているのを見ると、安心したように、大きくうなずいた。
「今晩は、もう出ないで下さい。明日の朝は、ちょっとお話をきかせて頂きたいと思います」
秋彦が、風呂に入っている間に、あけておいた庭から、小犬が入って来た。この旅館で飼っている犬らしい。
犬は、座卓のまわりに来て、料理の匂いをかいでいる。
その時、由美の頭に閃いたことがある。

〈そうだわ。あの男の渡した薬、本当に睡眠薬だろうか？　この犬で試してみよう〉

由美は、焼き魚の裏側を少しとると、それに、ほんの少しさっきの粉薬をまぜて、小犬に与えた。

〈あんまりたくさん与えて、死んでしまったら困るわ〉

ぺろっと食べてしまった小犬は、眠るどころか、ますますじゃれついてくる。

由美は、もう少しとって、また与えた。

小犬は、平気な顔で食べてしまった。

〈少なくとも、青酸カリなんかじゃないみたい〉

由美は、外に出て行って、あの男と会う気持ちはなかったが、秋彦が今夜ぐっすり眠ってくれたら、自分も気楽に眠れると思って、ウイスキーの瓶に、薬をとかし込んだ。

そして、なにげなく見ると、小犬が、部屋の隅にうずくまって眠っていた。

あわてて、由美は、小犬を庭におし出して、戸を閉めた。

「おーい、由美」

「はい」

「バスタオル持って来てくれ」

「はい」

〈彼は、もう夫になったように振舞っている〉

由美は、バスタオルを持って行って彼に渡した。

「君も早く入って来なさい」

「はい」

由美は、急いで、着がえを持って風呂場へ行った。

風呂から上がると、秋彦は、待ち兼ねたように、ビールを注いだ。

「最初はビールだ。あとは、水割りにしよう」

そのときになって、はじめて、由美は、ウイスキーにわけのわからない薬を入れたことを後悔した。

〈もし、彼が死んだら大変なことになるわ〉

でも、もう間に合わない。

〈それに、今、寝てしまったら、十一時には目を覚

ましているわ〉

とにかく、運を天にまかせるより仕方がなかった。

一時間ほどビールを飲んでから、今度は、ウイスキーを飲みはじめた秋彦は、やがて、突然、横に倒れて眠り込んだ。

由美は、胸がどきどきした。

時計を見ると、八時半だった。

第六章　密会

1

〈このまま寝込んで死んでしまうのではないだろうか？　今、医者を呼んで手当てをしたら助かるのに、放っておいて死んでしまったら、私は殺人罪に問われる。どうしよう？〉

由美は、眠り込んだ秋彦を見つめてうろたえた。

しかし、睡眠薬を飲ましたので手当てをして下さいとはいえない。

由美は、縁側のガラス戸をあけた。犬は、由美が出したままの恰好で眠りこけている。

〈どうして、わけのわからない薬をウイスキーに入れてしまったのだろう。私が馬鹿だったわ〉

もし、秋彦が死んで、それが由美のせいだとわかったら、隣室で死んだ井上の死も、由美が殺したと思われるだろう。

立ったり座ったり落ち着かないでいるとき、突然部屋の電話が鳴った。

びくっとして電話機を見つめた。次の瞬間、秋彦がこの電話で起きるのではないかと思い、そばに駈け寄った。しかし、彼は、全然知らん顔で眠っている。

仕方なく、受話器をとった。

「もしもし」

「あ、どうも。彼は眠った？」

「あっ」

それは、嵯峨野で会った男だった。

「あの薬、大丈夫なんですか？　死んだりしませんか？」

由美は、せき込んでいった。

「アハハ。飲ましたんだね。大丈夫や。死んだりせえへんよ。それなら、ちょっと早いけど、今から出て来る？」

男は、余裕たっぷりにいった。

「嫌です。あなたなんか」

彼が死なないときいた途端に、由美は、怒りがこみあげて来た。

「そんなことゆうてもええの？　来なかったら、旦那に明日の朝バラすよ。ついでに、昨夜の夜、あんたが睡眠薬を飲ましたあと、抱いたって」

「そしたら、彼が訴えて、あなたは刑務所行きじゃないの」

由美は、弱味を見せてはいけないといい返した。

「だったら訴えたらいい。俺が誰かわかってればね。どこの誰ともわからないんじゃないの。旦那にだって電話でしかいわないからね」

「……」

由美は黙り込んだ。

絶体絶命だった。

〈こんなことがわかったら、婚約解消になるだけでなくて、結納金も指輪も返さないといけないわ〉

由美の気配を感じたらしく、男は命令口調でいった。

「じゃ、すぐ出て来いよ。あんまりぐずぐずしていると、旦那が起きてしまうよ。京都駅のタクシー乗場。わかったね」

電話は切れた。

行かないと、秋彦に何もかも話されてしまう。そして、婚約がこわれたら、銀行のみんなの笑いものになる。いや、それだけでなく、勤め口を失ってしまう。

〈ここは、眼をつぶって、あの男に従うしかない。でも、そうしたら、いつまでもつきまとうのではな

いだろうか？〉

それからの十分間が、由美には、何時間にも思えた。考えに考えた末、由美は京都駅に行くことにした。

〈彼の名前とか住所をなんとかしてきき出すのだ。彼が帰るとき尾けてもいい。彼の身元がわかれば、いずれ訴えることも出来る〉

由美は、手早く服を着がえた。

ニセの指輪と時計ははずしていくことにした。彼に巻き上げられては、明日から、たちまち困るからである。

部屋から出るときには、さすがに気になった。留守の間に、秋彦が起きて由美がいないと気づいたら、大変なことになる。

〈運を天に任せるよりない〉

最後は、そう決心して部屋を出た。入口から出ては、帳場の人に見つかるので、サッシ戸をあけて、庭から忍び出た。

〈戸締りは出来ないけど、大丈夫かしら？〉

由美は気になりながらも、裏木戸をあけ、外へ出た。

2

京都駅へ行くと、あの男が、タクシーの列のうしろに立っていた。

意外にすっきりした背広を着た脚の長い男である。ひげもそって、思っていたよりも若い感じだった。

由美がそばへ行くと、男は黙って先に歩き出した。由美も後に続いた。男は少し先で、通りかかったタクシーをつかまえて、由美を促して乗り込んだ。

「どこへ行きますか？」

運転手に、男は、京都南インターそばまで行くように行った。

「お楽しみですな」

運転手はにやりとして車をスタートさせた。やが

て車は、インターそばのラブホテル街へ入っていった。そして一軒の前にとまった。
「入ろう」
「でも……」
「ここまで来て何ゆうてるのや。運転手が変な顔してるやないか」
仕方なく、由美は、あとに続いた。
そこのラブホテルは、今はやりの色々な仕掛けのあるホテルでなく、ありふれたラブホテルだった。
部屋に入るなり、男は由美に抱きついて来た。
「嫌っ！　嫌」
由美は、反射的にふりはなそうとした。レイプされたときのことが頭のすみをよぎったからだった。
「悪かった。ごめん。まあ、ジュースでも飲もう」
男は、前のときとは違って、すぐに手をはなし、紙袋から缶ジュースを出した。
由美はジュースを飲まず黙って壁を見つめていた。
「早く帰りたいんだろう？　だったら、早くすませ
う。風呂に入ろうか？」
「嫌です。私は入って来ていますから、あなただけ入ったらいいわ」
「俺も入ったからいいんだよ。逃げられると困るからね」
由美は逃げようと思ったのでなく、風呂に彼が入っている間に、彼の免許証とか名刺など、身元がわかるものを探したいと思ったのだが、失敗だった。
男は、由美の前で服をぬぎ、みるみる裸になった。
「早く脱げよ」
彼はそういうと、ベッドにもぐり込んだ。
「あなたなんていう名前？　名字が嫌なら、名前だけでもいいわ。じゃないと嫌よ」
「いいやないか。名前なんか。もし、偽名やったらどうするんや」
男は、いらいらしたようにいった。
「名前をいってくれないと気分が乗らないわ。途中で名前呼びたいのよ」

「えっ、ほんまに？」

男は、意外に本気で喜んで、

「マモルっていうんや。本当やで」

といった。

由美は心をきめて服をぬぎ、ブラジャーとショーツだけになって、彼のベッドにもぐり込んだ。そして眼をつぶった。

〈私って悪い女なのかしら？　テレビなどだったら、こういうとき、相手を刺し殺すべきなんだけど〉

「可愛い」

男が呟いた。そして、由美の唇に、自分の唇を重ねた。由美は、それをふりはらった。唇までは嫌だった。

急に男が狂暴になった。彼は、手荒く、由美のブラジャーとショーツをはぎとると、由美の軀を激しい勢いで抱きしめた。

「痛いっ！」

由美の声に、男は、はじめて気がついたように、手をゆるめた。しかし、強引に唇や、首や、胸にキスの雨をふらせた。

そして、乳房をぐっと握りしめた。由美は、痛さにのけぞった。しかし、それに挑発されたように、彼は、由美の脚を大きくおしひろげ、手をもぐり込ませた。

「やさしくして……」

由美は、悲鳴のような声を出した。

彼は、ふとんをはねあげ、由美の裸の軀をあらわにした。

そして、由美が軀をよじって逃げるのを押さえつけて、下半身に、キスをした。

「ああっ」

由美は、思わず感じてしまった自分にうろたえて声を出した。彼は、何度も執拗にキスを繰り返す。

次第に由美は、軀がバターのように溶けていくのがわかった。

〈憎い男なのに、殺してやりたいくらい嫌いな男な

のに〉
と思うほど、軀が小きざみにふるえてくる。
「もう……」
男は、うめくようにいうと、由美の脚をおしひろげてのしかかって来た。
その瞬間、由美は、思わずのけぞった。
快感が足のつま先から、頭のてっぺんにかけ抜けて行った。
男が激しく動き、そのあとは、もう無我夢中だった。男がぐったりとおおいかぶさって来たとき、はじめて由美は我にかえった。
右手がしっかりとシーツの端を握りしめていた。つま先が妙に痛かった。やがて、ゆっくりと由美の上から降りた男は、裸のまま、煙草に火をつけた。
「今何時？」
由美が男にきいた。
「十一時ちょっと前」
「帰らないと」
由美は、秋彦のことが急に心配になった。
「まだ大丈夫だよ。風呂に入って、食事でもどう？」
「いりません。早く帰らないと」
由美は、急いで風呂の湯を入れに行った。
不思議に、最初感じたほどの嫌悪感はなかった。
「旦那とどっちがよかった？」
男が、笑いながらいった。
「知りません」
由美は相手にしなかった。彼は、シャワーだけ浴びると服を着た。由美も急いで風呂場に行き、少しだけたまった湯で、軀を洗って服を着た。
ホテルの前で、タクシーをとめ、男は、宿まで由美を送った。
「じゃあね。俺、京都に住んでるんだ。だから、もう会えないと思う。元気でね」
男はそういうと、由美に手を振った。

3

庭からそっと部屋に入ると、秋彦は、よく眠っていた。

由美は、彼をふとんに移し、もう一度バスルームの湯を入れて入った。そして、軀をごしごしと洗った。

嫌なことをしてきたはずなのに、何故か、軀がさわやかで、気持ちがすっきりしていた。

由美は、バスルームを出ると、裸の軀を鏡に映した。

ピンク色に上気した軀は、すべすべして若々しい。ウエストがくびれ、大きな乳房がつんと上をむいている。

〈大丈夫だわ、何も変わっていないわ〉

由美は、ほっとして、ふとんに入った。

秋彦が、無意識に、由美の胸に手をおいた。

〈あの男は、もう会わないといってくれた。京都にさえ来なければ、大丈夫だわ〉

由美は、その夜、ぐっすりと眠った。

朝、目が覚めると、秋彦はもう起きて、入口から差し込まれた新聞を見ていた。

「あっ、すみません」

由美は急いでふとんから出て、洗面所に立った。戻ってくると、食事が運ばれて来た。

「昨日、どうしたのか眠ってしまった。よほど疲れてたんだろうね。ごめん」

秋彦が、由美にいった。

「いいんです。私も疲れてましたから」

由美は、うつむいていった。

「昨日、夜中にちょっと眼が覚めたけど、君どこかへ出た？」

「え？　いいえ」

「おかしいな、君がいなかったような気がするんだけど」

「ああ、お風呂に入って、顔の手入れをしてたんですけど」
「手洗いに立ったとき、いなかったみたいだけど」
「じゃあ、庭に出てたんですわ。京都の夜だから、なんとなく感傷的になって」
「こんなに寒いのに」
秋彦は不思議そうだったが、食事の用意が出来たので、座卓についた。
「ホテルだと、こうして畳の部屋へ食事を運んで来てくれないから、日本旅館はいいね」
「ええ」
「あれっ、ダイヤの指輪どうしたんだ?」
秋彦は、由美が指輪をしてないのに気がついていった。
「えっ? ああ、ゆうべ時計と一緒に枕元に……」
由美は、茶碗をおいて、寝床のあった方に行った。
「ないわ! どうしたのかしら?」
由美は蒼くなった。確かに、夜、外へ出る前に、時計と指輪をおいて行ったのに、ないのだ。
〈彼が隠したのだろうか? まさか、あの男が、私が部屋を出たあと盗んだのでは〉
由美は、おろおろした。
秋彦も食事をやめて、探しに来た。
結局、指輪も腕時計もなかった。
「女中さんが、ふとんを片付けるとき、持っていったんじゃないか」
秋彦はそういうと、由美が何かいう前に、帳場に電話をかけた。
〈大変なことになってしまった。でも、もし泥棒が入ったのなら、これで、指輪をなくしたことがうやむやになる〉
由美は、複雑な気持ちで、秋彦がおかみに話すのをきいていた。
すぐに、おかみが女中をつれてやって来て、
「この人が盗んだりするはずがありまへん。うちも信用にかかわりますよって、警察にとどけましょ

う」

と、いった。

おかみの電話で、警察官がすぐやって来た。

「ところで、その指輪は、いくらぐらいの値打ちのものですか？」

手帳を出して、警官がきいた。

「えーと、千二百万円でした。千五百万円のを負けてもらったんです。買ったのは、東京です」

「何、千二百万円もする指輪ですか？」

警官の顔が緊張した。

4

「なくなった時計は、いくらぐらいですか？」

警官がきいた。

「三万五千円ぐらいです」

「え？　千二百万円もする指輪をしてるのに、時計はそんな値段ですか？」

由美は、恥ずかしさに赤くなりながら、

「はい。指輪は、婚約指輪でいただいたんです。時計は、私自身が買ったものですから安いのです。私は、平凡なOLですから」

と、いった。

「すると、今度、玉の輿に乗られるということですか。なるほどね」

警官が帰ると、秋彦は、ため息をついた。

「すみません。大変なことをしてしまって」

由美は、頭をさげた。

「しかし、おかしいね。この部屋には、君と僕しかいなくて、寝るときまであったというのに、夜の間になくなるなんて」

秋彦は、考え込んでいる。

由美は、冷汗が出て来た。しかし、秋彦は、由美が、しょんぼりしているのを見ると、

「まあ、仕方がないよ。あきらめよう。ただ、一生懸命見たてて買って来た母が、残念がるだろうと思

うと辛いけど」
と、いった。
〈この人は、大切にされて育ったから、我ままなところがあるけど、とてもいい人なんだわ〉
由美は、そんなやさしい彼を裏切って、昨夜あんな素性もわからない男に抱かれたことが申しわけなかった。
「さあ、気分晴らしに、どこかへ観光に行こうか？」
「はい」
由美は、ほっとした。
「でも、拝観停止問題が起こってから、京都の寺を見るのも嫌になったね。それでもお寺見たい？」
「京都の街を見るだけでも楽しいですわ」
由美は、甘えるようにいった。
「そう。じゃあ、車で観光しよう」
二人は、タクシーを呼んで外に出た。
車は、京都の街を北行する。
「運転手さん。どう景気は？」
秋彦は、気さくに話しかけた。
「あきまへんな。お寺がみんな拝観停止になってから、観光客がぐっと減ってしもて。今は停止になってへんのどすけど、もう一つ盛り上がらなくて」
運転手は、憤慨しながらも、気のいい男とみえて、
「あそこが本願寺ですわ」
とか、京都の通りの名前などを説明してくれる。
「あ、そうや、三十三間堂は、見といた方がよろしいで。行ってみまひょか」
親切な運転手は、そういうと、すぐに、三十三間堂へ連れて行ってくれた。
「むかいは、博物館です。そんなら、ここで待ってますよって」
三十三間堂は、内陣の柱の間が三十三あることから名付けられたもので、正式には蓮華王院というのである。堂内には、中央に大きな立像があり、千一体の千手観音がまつられている。

「これは壮観だな」
秋彦が、ずらりと並んだ仏像に目を見はった。
由美も感動して立ちつくした。
一通り見終わると、秋彦は、手洗いに行った。由美があたりを見まわしていると、子供がそばへ来て、
「はい、これ」
と、紙切れを渡した。
「なあに？」
笑いながら、紙切れを開いて見た由美は、中に書いてある文字を読んで、びっくりした。

あんたの指輪と腕時計を拾った。指輪は、ニセモノだったよ。主人に届けると困るんじゃないのかな。

Tより

「これ誰がくれたの？」
由美は、子供を見つめた。
「男の人」
「その人、どこへ行ったの？」
「あっち」
「あっちって？」
由美は、子供の指さす方を見たが誰もいない。
子供は、走って行ってしまった。
秋彦が戻って来て、
「どうかしたの？」
と、いった。
「いえ、可愛い子供がいたから話をしていたの」
由美は、そっと、紙切れをポケットにしまい込んだ。

5

〈私が部屋からぬけ出すのを見て、泥棒が入ったんだわ。そして、売り払おうと思って、指輪がニセモノであることがわかって、腹いせに、尾けて来て脅

かしたんだわ〉

指輪を秋彦に送りつけて来て、ニセモノであることがわかったら困ると、由美は、気が気でなかった。それで、そのあと、京都の街をまわっても、心はうわの空だった。

運転手に教えられて、由美たちは、京都会館の近くの「六盛」という店で、手おけ弁当を食べた。

手のついた桶に、色とりどりの料理が、盛られている。この桶は、たる源というたる作りの名人が、手づくりで作っていることで有名だという。

東京の六本木に匹敵するという若者の街北山通りや、白川通りを散策し、三時に宿に帰って来た。

「どうする？　東京へ帰る？　それとも、もう一泊しようか？」

秋彦が、きいた。

「銀行は、今忙しいときなので、帰りたいんです。いいでしょうか？　もう少ししか勤めないので、最後をちゃんとしておきたいのですけど」

由美は、遠慮がちにいった。京都にいると色々なことが起こるので、早く帰りたかった。それに、あの泥棒につけまわされても困る。銀行なんかいいじゃないかというと思った秋彦が、意外にあっさりとうなずいた。

「また、新婚旅行もあることだから、今回は、早く帰っておこうか」

二人は、旅館を出て京都駅に向かった。

ホームに待っているとき、ふと、うしろを振り返ると、意外な人物がいた。

次郎だった。

中原次郎は、由美と顔が合うと、すっと顔をそらした。

〈彼が、どうして京都に来ていたのだろうか？〉

由美は、気になった。

東京に着いて、秋彦と別れ、自分のマンションに着いたのは、八時すぎだった。

さすがに疲れていた。

指輪をなくしたことは、しばらく隠しておくようにと、秋彦はいった。

ベッドに横になっていると、突然、電話がかかって来た。

「もしもし」

それは、次郎だった。

「はい。何でしょう」

由美は、切り口上でいった。もう結婚する相手がきまっているのに、彼とよりを戻す気は、全くなかった。

「井上さんが、死んだね」

次郎は沈んだ声でいった。

「ええ」

「君が殺したんじゃないの？」

「まさかァ、ひどいわ」

由美は、激しい調子で抗議した。

「しかし、井上さんと君とは、ラブホテルへ入ったりしていた仲じゃないか。井上先輩は、君と結婚すると喜んでいたのに、ひどいのは、そっちじゃないか」

次郎は、憤慨しているようだった。

「でも、恋愛と結婚は別だと思うわ。私、銀行の上司の紹介で、結婚相手がきまったから仕方がないわ。第一、あなたが、そんなことという資格ないわ。私は、あなたと結婚するつもりでつき合っていたのよ。それなのに……」

由美は、急に悲しくなって来た。あの頃の悲しかった気持ちを思い出したからだった。

彼も、黙ってしまった。やがて、

「でも、僕は、君を殺さなかったし、ラブホテルへも行かなかったよ」

と、いった。

「私は、井上さんを殺してなんかいません。隣の部屋に、井上さんが泊まっていたことさえ、全然知らなかったわ」

「信じられないね。警察はだまされても、僕たちは

君が犯人だと思ってるよ。井上さんは、きっと、君と約束していて、君が、夜やってくるのを待っていて殺されたんだ。君は、井上さんとの関係が、結婚相手に知れるのをおそれて、彼を殺したんだ」

次郎は、どこまでもいいつのる。

「それより、あなたは、どうして、京都へ行ったの？　あなたこそあやしいわ」

由美は、攻勢に出た。

「僕？　僕は、井上さんが死んだとゼミの教授からきいて、松尾や、杉下と一緒に京都に行ったんだ。彼のお母さんにも会って、色々、話をきいたよ。彼が、君と結婚するといっていたこともね」

「そうなの。わかったわ。でも、本当に私は殺してないのよ。あなただけは、信じて欲しいわ。私だって、井上さんを殺した人が知りたいわ」

由美は、涙声でいった。

「泣いてごまかすなよ。とにかく電話は切る」

彼は、由美が泣き出したりで、困惑したらしく、電話を切った。

6

由美は、眠れなくなってしまった。

京都での井上の死を、ゼミの教授はじめ友だちがみんな知っているときいて、心が重くなった。

〈みんなは、私を犯人だと思っているのだわ〉

友人みんなを失ってしまったことが悲しかった。

〈それにしても、井上さんを殺したのは誰なのだろうか？　そして、井上さんが、最後に、手紙に書いて私に知らせようとしたことは、一体、何なのだろうか？〉

眠ったのは、朝方になってからだった。

数時間しか眠っていないので、ふらふらしたが、銀行に出ることにした。

年末の忙しいときに、欠勤したので、みんなの風当りは強かった。

中でも、奈奈子は、冷たい目で、由美を見ていた。
昼休みになって、彼女が、由美のそばへやって来た。
「京都で、井上という人が死んだわね。井上というのは、この間、あなたと一緒だった人でしょう？」
「知りません」
由美は、唇をかみしめた。
「私の彼が、丁度京都に行っていて、事件のことを詳しくきいてきたのよ」
「そうですか。でも、私と関係ないわ」
そのとき、奈奈子が、大きい声をあげた。
「あらっ、指輪してないのね」
由美は、はっとした。しかし、彼が内緒にしようといったので、
「家においてあるの。勤めにはめて来るのはまずいと思って」
「そう」
彼女は、じっと、由美を見た。
〈彼女から、井上とラブホテルに行ったことを、秋彦にいわれたら困る〉
そう思った由美は、机の下の袋から、京都で買って来た人形を出して、
「あの、これ、お土産ですわ」
と、いった。
「あら、人形で買収するの。でも、いいわ。頂いておくわ」
彼女はそういうと、人形を持って行ってしまった。
銀行から帰って来ると、由美は、ベッドへ倒れ込んで、ぐっすりと眠った。
遠くでベルが鳴っているような気がして、目が覚めると、それは、電話のベルだった。
あわてて受話器をとると、秋彦だった。
「あ、昨日は色々有難うございました」
由美は、目がすっかり覚めてしまった。
「今日、銀行へは行った？」
「はい」

「僕は、一日眠ってたよ。ところでね。母の誕生日が明日なんだけど、君に来て欲しいというんだ。明日、銀行が終わってから、来てくれないか？」
「ええ、喜んで。でも、指輪がありませんわ。婚約指輪をはめていかなければ、おかしく思われますわ」
「あ、そうか。どうする？」
〈ニセの指輪なら、売ってるけど、話すわけにはいかないわ〉
「どうしましょう？」
「仕方がない。京都の宿で盗られたことを話そう。いつまでも、隠しおおせないだろう」
「そうですね。怖いけど、そうします。お母さんは、なんておっしゃるかしら？」
「わからない。母は、色んなことを気にする方だからね」
秋彦の声も、沈んできた。
「お母さまは、形とか、カットとかよくご存知なのでしょうか？」
やっぱり、ニセモノで、この場をしのごうと思ったが、彼は、
「ニセモノで似たものがないかと僕も考えたんだけど、母は、そういうことに詳しいから駄目だね」
と、いった。
「そうですか……。では、本当のことをいいます。それで、お話がこわれても仕方ありません」
由美は、はっきりといった。
〈なくなってよかったんだわ。もし、あのままニセモノをして行ってたら、彼のお母さんに指摘されて、恥をかくところだった〉
「僕も、一生懸命、口ぞえする。とにかく来て欲しい」
「プレゼントは、何がいいでしょうか？」
「花と、それから、ペンダントか何かがいいな」
秋彦は、こともなげにいった。
「ペンダントですか？　どんなペンダントです

「そうだね。金にルビーか何か、あしらったものがいいんじゃないかな」

〈そんな高いものを……〉

由美は、思った。

第七章　誕生祝いのパーティ

1

由美は、翌日、秋彦の家へ行った。

敷地が千坪近くあり、建坪が百五十坪という豪邸を見ただけで、由美は、圧倒された。

その上、婚約指輪をなくしている。由美は、最初から気おくれがしていた。

「まあ、いらっしゃい。お待ちしてましたのよ」

大きな母親は、上品らしいイブニングを着て玄関にあらわれた。宝石もいっぱいつけている。

〈まるで、外国のパーティに招かれたみたいだわ〉

由美は、紺色のワンピースを着た自分が、ひどくみすぼらしく思えた。

「さあ、どうぞ」

吹き抜けの玄関ホールには、イタリアのベネチアで買ったというシャンデリアが輝いている。

応接間の方へ案内されたとき、螺旋階段から、秋彦が降りて来るのが見えた。

応接間は、三十畳ほどの広さで、本当に、薪の燃えている暖炉が中央にある。

えんじ色の絨毯に、まっ白い皮張りのソファがおかれ、まわりには、大理石の台座に、ギリシア神話に出て来るような彫刻が立っている。

〈すばらしい家だわ。私がこんな家の女主人になれるのかしら？〉

由美は、さすがに興奮して来た。

すでに、二十人ほどの客が集まっている。

みんな　着物とか、ドレスばかりで、まるで、芸能界のパーティのようだった。

〈こんなパーティと知っていたら、もっと華やかなドレスを着てきたのに〉

由美は、秋彦が、教えてくれなかったことがうらめしかった。

いよいよ客全員が集まった。

秋彦の母親、華子が、客に、由美を紹介した。

「今度、秋彦と結婚することになりました由美でございます。どうかよろしくおねがいします」

「由美さん、こちら、私の大学の時の親友で、彌生さんなの」

華子は、にこやかに一人一人ひき合わせていった。

客の大半は、華子の親戚や、友人だった。そのうち一人が、ふと気がついて、

「それで、もう、婚約指輪はおかわしになったんですか？」

と、きいた。

「ええ。結納も、婚約指輪もすみました。由美さん、みなさんに指輪をお見せなさい」

華子は、由美のそばにやって来たが、由美が指輪をしてないのを見ると、はっとしたように、立ちどまった。

秋彦が、そばにいって、耳もとで、一こと二ことささやいた。

「あ、そう」

華子は、うなずくと、みんなに向かって、

「指輪は、今、寸法直しに行っているそうでございます。ダイヤでございまして、一・七八カラットのものでございますが。ね、由美さん」

「はい、申しわけございません。間に合わなくて」

由美は、ほっとしていった。

やがて食事がはじまった。

本職のコックが三人来て作ったというフランス料理は、まるで、結婚式のようだった。

由美は、食べ方の作法を間違わないようにと、緊

張した。

食事が終わると、ダンスパーティになった。

秋彦の両親をはじめとして、来客のみんなが、ペアになって踊る。

〈これが、上流階級なのだわ〉

由美は、年配の男女が、楽しそうにワルツを踊っているのを見て、ため息をついた。

〈うちの母に、ダンスを踊れといったらどんな顔をするだろう〉

そう思っていると、秋彦がそばに来て、

「踊ろうよ」

と、手をとった。

ディスコダンスならともかく、社交ダンスはあまり踊れない由美は、躊躇したが、秋彦に引っぱられて、部屋の真中に連れ出されてしまった。

大きな拍手が起こり、二人を残して、みんなは、さっと、席についてしまった。

〈情れがましいわ。どうしよう?〉

と、思っているうちに、音楽が鳴り、秋彦は、華麗に踊り出した。

2

由美は、コチコチになりながら、必死でついていった。秋彦がうまくリードするので、なんとか、ボロを出さずに、一曲踊り終えることが出来た。

ほっとして、席に着こうとすると、秋彦が、もう一曲踊ろうという。

今度は、みんなも出て来て踊り出したので、由美も、うなずいた。

少し慣れたのと、人混みの中に入ったのとで、由美もリラックスして来た。

「ねえ、指輪のこと、寸法直しに出したといったの?」

由美は、ターンしながら、秋彦にきいた。

「ああ。あの場面で、なくしたとはいえないだろう。

また、時期をみて、ゆっくり話すよ」

秋彦は、小声でいった。

席に着く間もなく、由美は、飲みもののサービスをいいつけられた。

一人一人に、何がいいかきき、すぐに持って行くのは、なかなか疲れる仕事だった。

でも、飲みものを受けとると、色々と話しかけてくれるのはうれしかった。

「おきれいね。いいお嫁さんが見つかってよかったわね」

とか、

「結婚式が楽しみだわ」

と、好意的にいってくれる人もいたが、

「秋彦さんと、どこで知り合ったの？」

と、きく人もいる。

「はい、銀行に勤めてまして、支店長さんから、秋彦さんを紹介されました」

と、答えると、その人は、満足したようにうなずいた。

ディスコに行って知り合ったとか、飲みに行って意気投合したというのでは困るらしい。

いよいよ、バースデーケーキを切ることになった。

彼女の友人の一人が、ピアノをひき、みんなが、ハッピーバースデーを歌い、ロウソクが吹き消されると、拍手が起こって、ケーキカットになる。

由美は、カットされたケーキを小皿に入れて配ったり、紅茶を配ったり大わらわだった。

ひととおり、ゆきわたると、いよいよプレゼントが渡される。華子は、うれしそうに礼をいい、一つずつ、あけて披露する。時計、ブレスレットなど、みんな高価な品物ばかりである。

由美は、自分の番になると、うやうやしく、プレゼントをささげた。

「どうも有難う。さあ、何かしら？」

華子は、うれしそうに包みを開いた。

由美は、どきどきしながら、華子の指先を見つめ

た。

中から、金に、小さなルビーをあしらったペンダントがあらわれた。

「まあ、うれしいわ。似合うかしら?」

華子が、胸にペンダントをかかげた。

「よくお似合いだわ」

みんなが手を叩いた。

「由美さんどう?」

「はい。色が白くていらっしゃるので、とてもよくお似合いです」

「そう、有難う」

華子は、上機嫌だった。

〈よかった。無理して買って来て〉

由美は、ほっとした。

パーティがお開きになって、みんなが帰ったあと、由美が後かたづけを手伝っていると、華子に呼ばれた。

「今日は、どうも有難う。それはそうと、由美さん、指輪を寸法直しに出したということだったけど、どういうことなの? 結納のとき、ちゃんと合ってたはずだけど」

「はい。それはあの……」

由美は、秋彦の顔を見た。

「本当のことをいうと、あれは、なくなったんだ」

秋彦が、ずばりといった。

「なくなったって、どうして……。どういうことなの?」

華子が、悲鳴のような声をあげた。

由美は、じっとうつむいていた。

秋彦が続ける、

「この間、二人で、婚約旅行で京都に行ったんだ。そのとき、盗まれてしまったんだよ」

「婚約旅行? 京都に行ったんですか? そんなこと、お母さん知らなかったわ」

華子は、きびしい眼で、由美を見た。

「僕が誘ったんだよ。彼女は、嫌だといったんだけ

ど、婚約したんだからといって、強引に」
「……」
華子は、黙っている。しばらくしてから、
「それでどこで盗られたの？　外で？」
と、きいた。
「いや、眠っている間に、なくなってたんだ。戸締りもちゃんとしたはずなんだけど」
〈まずいわ。どうしよう〉
由美は、心の中で叫んだ。
案の定、華子が、きっとした表情でいった。
「それはおかしいわ。一体、誰が盗んだの？」
「わからないよ。二人とも眠っていたんだから」
「由美さん、本当のことをいって頂戴」
「本当に、どうしてなくなったかわからないのです。私も、夜ねる前に、はずして、時計と一緒においておいたはずの指輪が、朝なくなっているのを知って、心臓がとまるほど、びっくりしたんです。申しわけありません」
「あなた、あれは、千二百万円もするんですよ。どうして、指にはめておかなかったの？　婚約指輪って、大切なものなんですよ」
「はい。すみません。ごめんなさい」
華子は、黙って、大きなため息をついた。
「私、ショックを受けて、何も考えられないわ。秋彦、あなたから、詳しい話をききたいわ。由美さんに帰ってもらいなさい」
秋彦は、考えていたが、
「じゃ、由美くん、帰ってよ。また、連絡する」
と、いった。
「では、失礼します。本当に、すみませんでした」
そういうと、由美は、一人で外へ出た。

3

秋彦は送って来なかった。
由美は、暗い夜道を、とぼとぼと歩いた。

車はなかなか来ず、来ても、とまってはくれなかった。

随分遠くまで歩いて、やっと、電車に乗り、家へ帰って来た。

心配だった。

〈婚約は、解消になるのだろうか？　その場合、指輪の弁償をしないといけないのかしら？　結納金は？〉

由美は、キッチンの椅子に座って考え続けた。

そして秋彦の家とは、比べものにならない粗末な家具や、部屋を見まわした。

実家で、一生懸命に、嫁入りの仕度をしている母親の顔が目に浮かんだ。

秋彦との縁談は、いつでもこわれていいと思っていたが、今となると、解消になるのは辛かった。

秋彦から、何か電話があるかと、遅くまで待っていたが、連絡はなかった。

それからの三日間は、由美には、三年間のように長かった。

やっと、四日目に、彼から電話があった。

彼の声は、元気がなかった。

「やっぱり、母が、君を疑っているんだよ。眠っている間になくなったなんておかしいって。その上、隣室の井上という男が死んだこともわかってしまってね。君との関係を、しつこくきかれたよ」

「あなたがいったんですか？」

「いや。京都ではどこで泊まったのかというから、宿の名前をいったら、新聞の記事を読んでいて、じゃあ、同じときに、同じ宿に泊まったんじゃないかといわれて……」

「それで、結局どうなったんですか？」

由美は、暗い予感を覚えた。

「母は、婚約を解消した方がいいんじゃないかというんだ」

「そうですか……。あなたは？」

「僕は、解消したくないけど」

「私は、どうしたらいいんですか？」
由美は、涙ぐみながらいった。
彼は、無言だった。
「でも、私、指輪は、お返しできませんわ。それに、結納金も、結婚の仕度に使ってしまって、全部返せませんわ」
由美は、秋彦が、それはいいといってくれるのではないかと考えたが、彼は、
「そういう話は、改めてしよう。それより、今日、うちの母のところに、変な手紙が来たんだよ」
と、いった。
「どんな手紙ですか？」
「あの指輪を盗んだという男が、あれは、ニセモノのダイヤだったというんだ。それを読んで、母親は、君が信じられなくなったといった」
「そんな……」
と、いったが、由美は、それ以上いうことが出来なかった。
〈もう、駄目だわ。彼も、私に愛を失ってるのだわ〉
今度は、由美が沈黙した。
「どこの誰ともわからない人のいったことを信用するのなら、結構ですわ。私、別れます。でも、指輪も、結納も返せません。だって、私は、あなたに、私の大切なものを捧げたんですもの」
由美は、すすり泣きながらいった。
突然、秋彦が、大きな声を出した。
「そうか、わかったよ。君は、計画的だったんだ。僕と婚約して、ダイヤの指輪をせしめ、それを売り払って、ニセモノをはめていて、誰かに盗ませたんだ。そして、結婚をこわして、結納金までとり込むつもりなんだ。怖い女だよ、君は」
そして、彼は、電話を切ってしまった。
由美は、その場に泣き伏した。
確かに、彼がそう思うのも、無理はなかった。
〈やっぱり、釣り合わない縁だったのだわ。でも、

私は、そんな女ではない。どうしたらいいのだろうか？〉

4

あれから考えると、幻か夢のような誕生パーティだった。

贅沢で、華やかで、まるで、外国映画に出て来るような上流階級のパーティで、由美は自分もその社会の一員になったのだと思った。しかし、それが、一瞬にして消えてしまったのだ。

〈すべて、私が、優柔不断だったからだ〉

秋彦の一家は、由美が計画的に、ダイヤの指輪と結納金をだましとったと思っているが、けっしてそんなことはないのだ。

井上が好きだと思っているときに、玉の輿である秋彦との縁談を、支店長からすすめられた。

しかし、秋彦が、煮え切らない態度で、本当に、結婚する気があるのかどうかわからず、あせっていた。

そのとき井上から軀を求められ、与えてしまった。彼は、結婚しようといってくれた。その気になった翌日に、正式に、秋彦との結婚がきまってしまった。

当然、井上は、納得しない。彼を説得するために入ったラブホテルで、ダイヤの指輪を忘れてきてしまった。

千二百万円もするダイヤをなくしたとはいえず、由美は、ニセモノのダイヤの指輪を買って、一時しのいだ。

しかし、やっぱり、指輪をなくしたことが、不幸のはじまりだった。

その指輪を婚約旅行中に盗まれて、ニセモノであることがわかってしまったのだ。

由美は、ため息をついて、顔をあげた。

秋彦からは、連絡がとだえていた。由美は結婚のため銀行を退職するという届けを出していたので、

ある日、支店長に呼び出された。

支店長の顔は、今までと違って、冷たく、きびしかった。

「えーと、銀行を退職するという届けが出ているので、そのように手続きしました。今月一杯で終わりということです。書類に印鑑を押して、あとは、事務の方で、月末に退職金を受け取りなさい。よろしいね」

「あの……支店長、お話が……」

由美は、すがるようにいった。

「何ですか？」

「ご存知かもしれませんけど、秋彦さんとの縁談は、解消になると思います。ですから、私は働かないといけないのです。続けてここに、勤めさせては頂けませんでしょうか？」

「林くん、それはむつかしいと思いますよ」

支店長は椅子をまわして向き直った。

「あなたが何もいわなければ、こちらもこれ以上いわないでおこうと思ったのだが、今回のことは、うちの銀行にとっても、ショックでしたよ。あんたは、大変なことをしてくれたんですよ。あんたは、南田家から貰ったダイヤを売り払って、まがいものの指輪をしていたそうじゃないか。たまたまそれがバレて、結婚を解消する話になったら、指輪も、結納金も返さないという。あきれ返った話だよ。これじゃまるで結婚サギじゃないか。本当に、今回はじめて、君という女の怖さがわかったよ。そんな女とわかってみれば、うちのような信用が第一の銀行には、おいておけないんだよね」

支店長は、由美のことを林くんといったり、あんたといったり、君といったりした。その混乱ぶりに、支店長の怒りがあらわれているようだった。

由美は、うなだれた。

〈やっぱり、支店長も、私のことを悪女だと思っている……〉

それでも、由美には、生活がかかっている。

「支店長、それは誤解なんです。ダイヤがなくなったときのことは、秋彦さんが一番よく知っているし、ニセモノだというのも、私には、覚えのないことなんです。指輪を盗んだ泥棒が、あれはニセモノだったと電話か、投書をして来たということですけど、それもおかしいと思うんです。泥棒が、そんなことというのもおかしいし、私が本物をしていたことを知っているからこそ、ニセモノだといったのではないかと思うのです。何も知らない泥棒だったら、高そうな指輪だと思って盗んでみたが、ガラスだったら、『何だ!』ということで、終わりだと思うのです。私は、むしろ、秋彦さんが、何かケチをつけて、私との結婚を破約にしたのではないかと思ったほどですわ」

由美のいいわけを、哀れむような顔できいていた支店長は、

「あまりいわない方が、君のためなんじゃないかね。秋彦くんは、婚約旅行に、君と京都に行って泊まった二日目に、君が、夜中に、外に出かけたといっておられる。そして、そのあと、指輪がなくなったというわけで、君が、どこかへ持ち出して、ニセモノを捨てたのではないかという疑いを持っておられるのだ。それに、君と深い関係にあった男性が、君たちの隣の部屋で、殺されたというではないか。そういうことがあったら、どんなに君を愛していても、男の方は、嫌になるのは当然だよ」

「井上さんという人が、どうして、私と深い関係にあったというんですか?」

由美は、必死だった。

「うちに勤めている奈奈子くんが、君と井上という男がラブホテルに入るのを見ているということだよ。……とにかくだね、うちにとって、南田物産は、大切な得意先なんだ。こんなことで、気まずくなって、取引きが出来なくなると困るんだよ。秋彦くんだって、君が、この銀行にいたんじゃあ、銀行に来ることも出来ないだろう? 免職にしないのを、せめて



もの情けだと思って欲しいな」

そういうと、支店長は、出て行けという風に、ドアを指した。

5

結局、由美は、銀行を退職することになった。それでも、あと一週間は、勤務しなければならない。その一週間が、針のむしろだった。

みんなの由美を見る目は、手のひらを返したように冷たく、きびしくなった。

今までは、取引先の南田物産の御曹子と結婚するということで、みんなが、由美の機嫌をとっていた。その反動がきたことと、由美が、ダイヤの指輪や、結納金をだましとった凄い女だということが、銀行内に広まっていたからである。

誰も、由美に話しかけず、誰も、由美に仕事を持って来なかった。由美は、完全に孤立していた。お弁当も一人で食べ、出勤しても何もしない日が続いた。

〈こんなに辛いものなら、たとえ、支店長が勤めさせてあげるといっても、勤めを続けることは出来ない〉

と、由美は、納得した。

その中で、唯一人、由美にやさしい言葉をかけてくれたのは、菱田という独身の男性行員だった。

彼は、みんなの前でも、平気で、由美に声をかけ、ちょっとした仕事をさせてくれた。

また、折にふれ、

「気にしないでいいよ。君がそんな女でないことは、一緒に仕事をしたものなら、誰でもわかっているはずだ。元気を出しなさい」

と、勇気づけてくれた。

由美は、涙が出るほどうれしかった。

普段は、平凡で、目立たない人だが、こういうときに、人の真実はわかるものだと思った。

由美は、銀行の勤め以外にも、辛いことがあった。それは、年老いた両親に、結婚が駄目になったことを告げることだった。

由美の結婚を喜んでくれ、嫁入り荷物をつくるのに生甲斐を見つけていた母親は、婚約解消の話をきくと、急に老け込み、二、三日で病の床に伏すようになった。

由美が病院に見舞いに行くと、母親は、

「結納のお金は、ほとんど使ってしまったよ。日本ダンス、洋服ダンス、整理ダンス、ミシン、洗濯機、戸棚、本箱や、ふとん、着物など、恥ずかしくないものを買い込んだからね。どうしたらいいの？」

と、悲しそうにいった。

由美も、マンションに運び込まれたそれらの品物を見るにつけ、ため息が出て来た。

「大丈夫よ。むこうが断って来たのだから、返さないですむようにするわ」

といったが、本当に返さずにすむかどうかは、わからなかった。

南田家からは、半月後に、改めて話をするということになっていた。

その日が、とうとうやって来た。

由美は、両親と一緒に来るようにといわれたが、母親は病気なので、父親と一緒に、南田家の門をくぐった。

父親は、南田家と、自分の家との生活の違いに、すっかり気おされた様子だった。

6

部屋に通されると、秋彦と両親がいて、むつかしい顔で、座っていた。

まず、母親が、婚約を解消する理由を説明した。

「うちとしては、婚約指輪をなくしたとか、ニセモノになっていたとか、そういうことだけでなくて、もっと、根本的に問題になる点があるのです。ご自

分の胸に手をあててお考えになるとわかると思いますが……」

華子は、そういって、じろりと由美を見た。

「わかりません。どういうことでしょうか？」

「私の口からいわないといけないんですか？　では、申しますけどね……」

その時、秋彦が、たまりかねたように、さえ切った。

「いいじゃないか。くどくどいわなくても、やめることにきまったのだったら」

「いえ。こういうことは、ちゃんとしておかないといけませんよ。うちが、一番気にしているのは、井上という方と、あなたとのことですわ。銀行の方にきいたところによると、あなたは、その方と、ラブホテルに行っていたというじゃありませんか。その人が、京都まで追いかけてきて、亡くなったということは、一体、どういうことなんですか？　まさか、あなたが殺したんじゃないでしょうね」

華子は、自分の言葉に、一層興奮して来たようだった。

「ママ、それはひどいよ。この人は、そんな人じゃないよ」

秋彦がとりなすが、華子はきかなかった。

由美は、井上とラブホテルへ行ったことや、京都で夜中に外出して、むかしレイプされた男に軀を許したことは事実なので、ただ、黙っていた。しかし、しばらくたって、由美は、決心したように話し出した。

「私は、井上さんを殺したりはしていませんし、指輪のことも知らないのです。でも、いくらいってもきいて下さらないと思うので、これ以上はいいません。でも、私の立場も考えて下さい。私は、そちらから望まれて、婚約し、秋彦さんが、どうしてもといわれるので、婚約旅行に行ったのです。軀もささげました。井上さんが、京都に来て、隣の部屋に来て泊まっているとは、夢にも知りませんでした。私

も、もう大人ですから、今まで一度も恋愛したことはないとはいえませんが、それは、秋彦さんも同じでしょう？　でも、私は、秋彦さんと結婚しようときめ、そのあかしに銀行には、退職願いを出してしまいました。手続きは、すでにすんでしまっていて、婚約解消の話が出てから、続けて勤めさせて欲しいといったのですが、手遅れだったのです。私は、これから、結婚する相手も、勤め先も失って、それでもなんとか生きていかないといけないのです。生活に困っていらっしゃらない秋彦さんやご両親には、この辛さはわからないと思います。私は、ダイヤの指輪を売り払ったりはしていません。それは、お調べになったら、わかることじゃないでしょうか。母は、結納金で一生懸命嫁入り仕度をしていましたが、結婚が駄目になったときいて、病気になってしまいました。私には、結納をお金でお返しすることはできません。買ったタンスとか、冷蔵庫、着物でよければ、お返しします。でも、なくなった指輪は、お返しできないのです。どうしてもといわれるようでしたら、私の躯も返して下さい。この結婚は、私から断ったのでなく、そちらからお断りになったわけですから」

さすがの華子も、由美の言葉には、押され気味だった。

「では、何も返さず、別れるというのですね？」

「何もとはいっていません。結納で買った品物はお返ししますといっています。もし、私のところにお金があったら、何もかも、叩き返していますわ。でも、出来ないのです」

由美は、じっと秋彦を見た。

「ママ、仕方がないじゃないか。解消に応じてくれたのだから」

秋彦が、母親にいった。

「わかりました。むこうへ行って、お父さまと、相談してきます」

秋彦を残して、二人は、別室へ行った。

「秋彦さん、どうか娘を貰って下さい。たのみます」

突然、由美の父親が、秋彦に頭をさげた。

秋彦は、困ったように、顔を伏せた。

由美は、悲しくなった。

「お父さん、こんな家に貰ってもらわなくていいのよ。頭をさげることはないわ」

秋彦は、無言だった。やがて、秋彦の両親が出て来た。

「タンスや、洗濯機を返して貰っても仕方がない。でも、うちの方の秋彦に、何の失点があるわけでもない。大方の原因は、あなたにあるのだから、指輪の半額、六百万円だけを、ローンで返して下さい。秋彦にも、残りの六百万円を返済させます。私どもは、結納金の五百万円を、損することで、三方、傷みわけということで、どうでしょうか？」

はじめて、秋彦の父親がいった。

たしかに、理屈としては、妥当かもしれないが、六百万円を返すというのは、由美にとって大変なことだった。

由美が黙っていると、

「毎月五万円、十年間で返して下さい。真面目に返し続けて下されば、秋彦の新しい結婚がきまり、あなたの誠意がみとめられた時点で、考えてあげてもいいと思っています」

と、華子がいった。

由美は、承知するよりなかった。

「では、さようなら。元気でね」

玄関を出るとき、秋彦がいった。由美は、うなずいた。

退職金は、月給の年数倍ということで、四十万円に満たなかった。その中から、由美は、二十万円を四カ月分として、南田家にふり込んだ。

無収入だから、あとの二十万円で、当分、食べていかなければならなかった。

毎日、新聞の求人欄を見て、職業探しをする日が

続いた。

ある日、家に帰ってくると、病院から母親が、急性肺炎で亡くなったという電話が入った。

〈もとはといえば、私のせいだわ〉

由美は、母親の死体のそばで、泣きあかした。

葬式は、淋しいものだった。

由美は、火葬場で母親が灰になるのを待ちながら、心の中で決心した。

第八章　新しい殺人

1

由美は、勤め先と婚約者を失い、その上、母親まで心労で亡くしてしまって、深く傷ついた。

もとはといえば、自分が井上とラブホテルに行ったことが原因だが、それにしても井上が殺されたのは、おかしいと思った。

〈私の結婚が破れただけなら許せる。でも、井上さんを、一体、誰が殺したのだろう？〉

井上は、何かを由美に知らせたくて、手紙の上がきを書いたのに違いないが、中味はなかった。

井上だけならともかく、井上の母親は、気の毒で仕方がない。

〈一度、おわびに伺おう。なんといわれても、彼が死んだのは、私のせいに違いないわ〉

由美は、そう決心すると、手土産を持って彼の母親をたずねた。

彼女は、田舎に住んでいたのだが、井上が、こういうことになったので、四十九日までは、東京の彼のマンションに留っているということをきいていた。

チャイムを鳴らすと、しばらくして、ドアがあいた。顔を出したのは、母親だった。しかし、由美の顔を見ると、顔色が変わった。

「あんたのために息子は死んだのやッ。顔も見とうない！」

母親は、ドアを閉めようとした。そういわれることは、あらかじめわかっていたから、由美は、必死

でドアをあけ、懇願した。

「ごめんなさい。許して。でも、私の話もきいて下さい。私は、陽一さんが誰に殺されたか、突きとめたいのですっ」

「折角忘れようと思ったのに、顔も見とうない」

二人は、玄関で押し問答を繰り返したが、とうとう母親は、根負けして、由美を中へ入れた。

「陽一さんの位牌をおがまして下さい。お願いです」

と、由美は繰り返し、母親は、やっと、由美を仏壇の前に案内した。

まだ、白木の位牌で、うしろに写真がかざってある。

母親が供えたらしい御飯や、花が、悲しみをあらわしていた。

長い間、ひざまずいて拝んだあと、由美は、母親に、自分が殺したのではないこと、陽一の仇を討ちたいことを話した。

最初は、すべて由美のせいだと相手にしなかった母親も、東京で一人ぼっちでいた淋しさもあってか、次第に、由美の話に耳をかたむけるようになった。

由美は、正直に、自分がどうして南田秋彦と婚約するようになったかを説明し、その婚約も解消になったことを話した。

しばらくきいていた母親は、

「ダイヤの指輪というのは、ひょっとして、このことやないでしょうか？」

といって、奥に行き、チリ紙に包んだ指輪を持ってきた。

それは、確かに、由美が、秋彦から貰った指輪だった。ただ、そこには、「ニセモノ」という紙片がむすびつけてある。

「確かにこれですわ。どうして、これが……」

由美は、驚いて指にはめた。きっちり合った。由美が、リングの部分に、うっかり傷つけたあとも残っている。

「私が、京都で盗まれたのは、これじゃありません。私がニセモノを買ったのですから、よく覚えていますわ。これは、井上さんと行ったホテルで忘れて来たものです」

母親は、考えていたが、

「そのとき、多分、陽一が忘れてあるのに気がついて、ポケットにでも入れて帰って来たんと違いますやろか。指輪がなくなったら、あなたの婚約が解消になると思って」

と、いった。

「でも、ニセモノと書いてありますわ。私が貰ったのは、本もののダイヤの指輪です。一流店の保証書もついていました……」

「きっと、はじめからニセモノやったんですわ。陽一は、あなたにそれを知らせたくて、京都まで行ったんと違いますやろか。これは、あの子が死んで、一週間ほどしたとき、机のひき出しの奥にあるのを見つけたんです。何でしたら、持って行って、どこかで鑑定して貰うたらどうですか？　あの子は、学生時代、宝石店にアルバイトで行ってたこともありますよって、持って帰って来たものの、おかしいと気がついたんやと思います。それで、あなたに返さずに、鑑定に出したんやないでしょうか？」

田舎の人だと思っていたが、陽一の母親は、仲々しっかりしている。

「わかりました。これを貸して下さい。調べてみます。……ところで、陽一さんが、アルバイトで勤めていた店というのは、どこですか？」

「ちょっと待って下さい。確か吉田宝石店というのでしたが……」

母親は、陽一の住所録から、その店を見つけてくれた。

2

由美は、その店へ行き、指輪の鑑定をして貰った。

「ああ、これは、よく出来ていますが、ホワイトジュリコンですね」
店の人は、あっさりといった。
そして、前に、陽一が、この指輪を持って、鑑定してくれといってきたことを話してくれた。
「それはいつですか？」
由美は、せき込んできいた。
日付けは、由美が京都へ旅行する直前だった。
次に、由美は、秋彦の母親が、婚約指輪を買った店を訪れた。
指輪についていた保証書を見せ、ジュリコンの指輪を出して、自分が受けとったのはこれなのだが、どういうことかときいた。
「これはジュリコンですね。うちが出したものではありませんよ。うちは、信用ある店ですし、こんなものを出すはずはありません。確かに本物をお渡しました」
宝石店の主人は、ニベもなくいった。
「でも、私のいただいたのは、これなんです。そのために、私がどうかしたのじゃないかと思われて、婚約まで解消になったのです。調べていただけませんか？」
由美はくい下がったが、相手は、じろっと、軽蔑した顔で由美を見て、
「お客さん、商売の信用にかかわります。いいかげんにして下さい。うちは、ちゃんと鑑定したものを売ってるんですから、いいがかりをつけないで下さい」
といい、由美を外におし出した。
みじめな思いで外を歩きながら、由美は考え続けた。
〈確かに、あれだけの一流店が、ニセモノを出すはずがない。ひょっとしたら、サイズ直しを秋彦がたのんでくれたときに、悪い店員がいて、すりかえたのではないだろうか？〉
しかし、それは証拠がない。井上とラブホテルに

行かなければ、何のうしろめたいこともなく、はっきりさせることが出来るのにと残念だった。

ぼんやりしながら歩いていると、四つ辻のむこうを秋彦が歩いて行くのが見えた。

〈彼のことばかり考えていたからかもしれない〉

と思ったが、念のため小走りに走って追いかけて見た。

やっぱりそれは、秋彦だった。彼は、女性と夢中で喋り、駐車場の方へ行く。

由美は、その女性を見てはっとした。

それは、奈奈子だった。

二人は、停めてあった秋彦の車に乗り込み、仲良く走り去った。

〈どうして奈奈子が……〉

由美は、その場に突っ立って考え込んだ。

あの様子では、秋彦と奈奈子は、前からの知り合いのようだった。

由美がラブホテルに行ったのを告げたのが、奈奈子だとはわかっていたが、それは、彼女が支店長に告げ口し、それを、支店長が、秋彦にいったものだと思っていたが、支店長が、そんなことを喋るはずがない。彼は、由美と秋彦が結婚してくれ、自分の銀行と取り引きしてくれることを希望していたのである。

〈奈奈子は、私が秋彦さんと婚約したのをとても羨ましがっていた。だから、自分がとって代わろうとして、色々、彼に告げたんだわ〉

奈奈子だって彼がいて、ラブホテルにも行っているのに、よく人のことをいえたものだと思ったが、由美には、今さらどうしようもなかった。

3

マンションに帰って、考え込んでいるとき、電話がかかって来た。

それは、学生時代の恋人のあの次郎だった。

彼に　由美が婚約を解消したことを知っていて心配で近くまで来ているという。
「出て来ない？　喫茶店で話をしようよ」
次郎は、昔のように、やさしくいった。
「はい」
由美は、思わずそういってしまった。今は、孤独で淋しくて、誰かと話がしたくてならなかった。
喫茶店で、由美は、彼にすべてを打ちあけた。
彼と別れて、その淋しさをまぎらわせるため京都に行ったとき、レイプされたことも、話した。そうでないと、婚約旅行の最中に部屋を抜け出した理由が、説明できないからである。彼は、熱心にきいてくれ、由美をなぐさめてくれた。
「それは、申しわけなかった。君が、そんな目に会ったとは全然知らなかった」
彼は、由美をいとおしそうに見つめた。
「君の気持ちはわかったよ。可哀そうに」
彼は、そういってから、

一タイヤの指輪は　彼が　盗んだものじゃないかな？　きっと、彼は、君の指輪が、自分のわたしたものじゃないって気がついたんだ。それで、君がいない間に、指輪をとって、調べさせたんじゃないか」
と、いった。
「でも、どうして、最初に、婚約指輪がニセモノになっていたのかしら？　あとの場合は、私自身がなくしたので、ニセモノをつけてたんだけど、その前に、ニセモノになっていたのがわからないわ」
由美は、次郎に話すことで、心がおさまってきた。
「銀行ではずしていたことはない？」
「えっ、銀行で？……ああ、何度かはずして、箱に入れて、机のひき出しにしまっていたことがあるわ」
由美は、思い出しながらいった。
「それだよ！　そのとき、その奈奈子という同僚が、すりかえたんだよ。君を、彼と結婚させないため

に」

「あっ、そうだわ。そういえば……」

由美は、思わず、大きな声をあげた。

たしかに、彼女になら、すりかえるチャンスは、何度もあったはずである。

「口惜しいわ。彼女に何もかもこわされてしまったんだわ。じゃあ、井上さんを殺したのも？」

由美は、きっと顔をあげた。

「そうかも知れないね。彼女は、君たちや、井上さんを尾けていて、彼を殺したんじゃないかな。すべて、君を、窮地におとし入れるためにだ」

「許せない！」

由美は、唇をかんだ。

「でも、証拠がないね。証拠がなければ、彼女を告訴することは出来ないよ」

「どうしたらいいの？　このままじゃ嫌だわ」

由美は、すっかり、彼によりかかっていた。

「まず、どういう風にして、井上さんを殺し、部屋を密室にすることが出来たかを考えないといけないんじゃないかな」

彼は、一生懸命、由美から話をきいて、考えてくれたが、結局、わからなかった。

「わからないね。でも、君が悪い女でなくてよかったよ。何といっても僕の初恋の人だからね」

次郎は、はじめてにっこりした。

うなずきながら、ふと由美がテレビの方を見ると、見覚えのある男の顔が大写しになった。

「あっ、あの人は？」

次郎が、テレビの方をふりむいた。

南田物産社員の加川良夫さん二十七歳が、自宅のマンションで、毒を飲んで死亡しているのが見つかりました……。

「あの人だわ。私をレイプし、婚約旅行中に呼び出した人よ」

由美は、次郎にささやいた。
「えっ、本当？」
「一体どうしたのかしら？　あの人は、京都に住んでいるといってたし、名前も、別の名前だったわ。それが、南田物産の社員だったなんて……」
由美は、頭が混乱してきた。
次郎は、じっと最後まで見てから、
「彼は、京都生まれで、京都の高校を出て、東京の大学へ行き、南田物産につとめたんだね。彼は、君が、南田物産の社長の息子と婚約旅行に行っていたことは、当然知っていたはずなのに、おかしいな」
と、いった。
「秋彦さんが、社長の息子さんだということを知らなかったのかしら？」
「いいや。そうは思わないね。二人は、グルだったんじゃないかな。というより、秋彦が、彼に、君を連れ出して犯すことをたのんだんじゃないかな」
「なんの理由で？」
「それはわからないけど、たとえば、奈奈子という女性が出来たので、君と別れる口実にしようと思ったんじゃない？」
「ひどいわ。そんなの」
「あ、ひょっとすると奈奈子という女性が、命じたのかもしれないね。君と、社長の息子を結婚させないために、あの女を犯してくれといって」
「彼が私と結婚したくなかったら、そういえばいいのに、卑怯だわ。でも、彼女がやったとしたら、どうして、この男の人と知り合ったのかしら？」
由美は、まだ、全部の事情がわからなかった。
「どっちにしても、この男が死んだのは、自殺じゃないね。秋彦か、奈奈子という女性に殺されたんだ。道具に使われて哀れだね」
次郎は、考え込んだ。
「怖いわ、犯人は、井上さんと、この男と二人も殺したのね」
由美は、軀をふるわせた。

4

突然次郎は、大きくうなずいてから、
「そうだ！　この死んだ加川という男の葬式に行ってみよう。友だちに週刊誌の記者になった石上や、テレビ局へ行った田沢もいる。葬儀には、加川の友人として、君をレイプした男も来るだろうし、南田物産の社長や、息子の秋彦もやってくるんじゃないかな。僕が写真をとるとまずいから、彼等にたのんで、葬儀のようすを、ビデオカメラや、写真にとらせよう。何かわかるかも知れない」
と、いった。
「有難う。うれしいわ。もし、秋彦さんと奈奈子さんが親しい関係だったら、彼女も行くかもしれないわ。でも、石上さんや、田沢さんに、私の京都でのことは話さないでね」
由美は、すっかり次郎にまかせる気になっていた。
何といっても、彼は、由美の初恋の男性なのである。
翌日、次郎は、加川の葬儀に出かけていった。
由美は、家で結果を待っているつもりだったが、加川の家が、自分の知っているビルの向かい側にあることを知って、行ってみることにした。
五階建ての小さなビルの屋上に上がると、向かい側の加川家が、よく見えた。
このビルの三階には、学生時代に、ジャズダンスの教室があって来たことがあるのだった。
今は、三階は、パソコン教室になっていた。
加川良夫は、京王線の初台にある「シャトウ初台」というマンションで死んだのだが、実家が京都式の葬式をすることになったのである。
彼の家の前には、名前を書いたシキビが並び、白と黒の縞模様のテントが張られて、受付けが行われていた。人が、長い列を作って、焼香の順番を待っていた。
由美は、最後に会ったときの彼のやさしさを思い

出していた。レイプされた男なのに、不思議と彼には、悪者という印象がなかった。

焼香がはじまったらしく、列が動きはじめた。腕章をつけた男が写真をとっている。

〈次郎も、この列のどこかにいるのだわ〉

三十分ほどしたとき、霊柩車と、黒塗りの大型ハイヤー五台が、道に横付けになった。

その陰になって、人々の動きが見えにくくなった。

急に、その霊柩車とハイヤーが、横にのき、そこへ、白い外車が滑り込んできた。

人々が、道をあけた。

車から出て来たのは、南田物産の社長と息子の秋彦だった。みんなが頭をさげる中を、二人は家の中へ入り、十分ほどで出て来た。

みんなが見送る中を、二人は運転手があけるドアから車の中に吸い込まれ、やがて、静かに車は動き出した。

約一時間で葬儀は終わり、写真を持った母親らしい人と、父親らしい人物が挨拶しているのが見えた。

やがて、喪服の一団は車に分乗し、霊柩車を先頭に走り去った。

帰りのタクシーの中で、由美は考えた。

〈南田物産のように大きい会社で、平社員が死んだからといって、社長親子がくやみに来るのは異常なことだわ。きっと、秋彦さんに、うしろめたいことがあったからやって来たんだわ〉

家に帰って、テレビをつけっ放しにして着がえていると、テレビが、加川良夫さんの死には、他殺の疑いも出て来たと報じていた。

彼が飲んで死んでいたのは、農薬の入った缶コーヒーだったが、彼の近くでは、その銘柄の缶コーヒーが売られていないこと、残りの農薬がどこを探しても見つからないこと、缶に、指紋が拭きとられたあとがあることなどが、その理由としてあげられていた。

〈やっぱり、彼は、殺されたんだわ。奈奈子さんか、

秋彦さんに〉

由美は、怖ろしさにふるえながら、テレビを見つめた。

そのとき、玄関のチャイムが鳴った。

5

ぎくってしてしばらく息をこらし、そっとドアののぞき穴から見ると、それは、次郎だった。

「あーよかった。びっくりしたわ」

由美は、彼を部屋に招じ入れた。

「へえ、女らしいきれいな部屋だね」

はじめてこのマンションに来た彼は、珍しそうに、中を見まわした。

学生時代、彼はアパートに住んでいたが、由美は、両親と一緒に住んでいたので、自分の部屋に彼が来たのははじめてだった。

「ちょっと着がえさせてね」

次郎はそういうと、黒背広を、持って来たセーターとジーパンに着がえた。

まるで、新婚夫婦の夫が、会社から帰って来たように、自然な感じだった。

彼は、ホームゴタツに入ると、ポケットから二十枚ほどの写真を並べた。

「ポラロイドカメラでとってもらったんだ。あと二十枚ほどあったけど、年寄りだったり、近所の人だということがわかったから、借りないで来たんだ」

由美は、一枚ずつ見ていった。死んだ加川と同じくらいの年齢の男性ばかり写っている。

しばらく見ていった由美は、一枚の写真を手にとると、「あっ」といった。

何かで振りむいたらしい彫りの深い顔の男が写っている。

「もう一人の男だわ」

「なるほどね。この男が、どこにいて何をしているのか調べてみよう」

次郎はそういって　その写真を別の封筒に入れた。
「色々有難う、次郎。実は、私も、向かいのビルから眺めていたの」
由美は、自分の見たことを話し、社長や秋彦を見たといった。
「僕は中にいたんだけど、奈奈子らしい女性がやって来たよ。彼女は、棺が出るまでじっと遺族席のそばに立っていたけど、秋彦が来ると、顔を見合わせて合図したような気がしたな」
由美は、奈奈子の写真を出して来てみせた。
「ああ、この女性だった。黒いワンピースを着ていたけど、指に紅いルビーの指輪をはめていたので、非常識だなと思ったよ」
次郎は、写真をおいた。
「お腹すいてない？　やきめしでよかったら作るわ。色々お世話になったから」
由美はそういうと、キッチンに立った。
冷蔵庫をあけようとしたとき、突然、うしろから、次郎が抱きついて来た。
「君が好きだよ」
次郎は、由美を羽がい締めにして、首すじに熱いキスをした。手早くファスナーをおろして、キスは、背すじを下って行く。
「いやっ！」
と軀を動かして逃れようとしたはずみに、ワンピースが脱げて、両肩があらわになった。
「いいじゃないか」
次郎は、由美をくるりとひっくり返すと、その手で、ブラジャーをはずした。
白く張りつめた乳房がむき出しになる。
由美は、キッチンの床に押し倒されてしまった。
何か叫ぼうとする唇を、彼の唇がふさぐ。
長く熱いくちづけだった。
抵抗していた由美の軀から力が抜けた。
次郎は、手早く自分の着ているものを脱ぎ捨てて、由美のショーツを引きはがした。

「あっ」
「好きだよ。ずっと前から君が欲しかった」
彼は、由美の敏感な場所をよく知っている。
彼は、息をはずませながら、指をはわせていたが、耐え切れなくなったように、由美をうつ伏せに押さえつけ、押し入って来た。
激しい彼の勢いに、軀を波打たせながら、由美は思わず唇を噛みしめ、目をつぶった。
「どうしてつまらない男に軀を許したんだよっ！僕のものなのに」
彼は、気が狂ったように叫び、激しく軀を動かしていたが、やがてその声がかすれ、「うっ」と呻いた。
由美の背中が反りかえる。軀の中で、ガス爆発が起こったような感じで、由美は、意識を失った。気がついたときには、彼が、由美の上で、ぐったりとしていた。
由美の軀が、余震のように、ぴくぴくと動く。
「とうとう僕のものになったね」
次郎が、由美を抱きしめて、ささやいた。
由美は、快さの余韻を楽しみたくて、けだるそうにうなずいた。
そのあと、二時間ほどやすんでから、彼は再び挑戦して来た。今度は、ゆっくりと時間をかけて由美を楽しませてくれた。
「君が悪いんだよ。学生時代、どうしても許してくれなかったから」
彼は、満ち足りたようにいうと、ぐっすりと眠り込んだ。

6

夜中に目を覚ました時、二人はお腹がすいていた。
「何か作ってくれよ」
「おにぎりでいい？」
「ああ」

由美は、シャワーを浴びてセーターを着ると、手早く小さなおにぎりを作り、のりを巻いた。
「お味噌汁を作るわ」
二人は、ママゴトのような食事をした。
「僕と結婚する？」
「ええ。でもいいの？　私で」
「いいにきまってるじゃないか」
二人は、甘い言葉を交わし、じゃれ合った。
「もう、事件のこと、どうでもよくなったわ。あなたには、何もかも打ち明けてあるんだもの」
由美がいうと、
「でも、井上さんを殺したやつは、許せないよ。彼だって君とこうしていたかっただろうに」
次郎は、しんみりといった。
「そうだわ。それに、誰がダイヤの指輪をすりかえたかは、やっぱり知りたい」
由美も起き上がった。
「二人で力をあわせて探って行こう。でも、もう僕が知っているんだから、もう一人の男におどかされても、軀を許しちゃ駄目だよ」
「もちろんだわ」
由美は、久しぶりに安らいだ気持ちになった。
しばらくして、由美は、はにかみながら次郎にいった。
「私、婚約が解消になったのも、井上さんが殺されたのも、すべて、神さまが、あなたと結ばれるためにやってくれたような気がするわ」
「そういえばそうだね。さあ、乾杯しよう」
二人は、ビールで乾杯すると、抱き合って眠った。
朝七時に次郎は起きると、あわただしく出勤の仕度をした。
「勤め先のロッカーに背広を一着入れておいてよかったよ。じゃないと、黒のスーツで今日一日いないといけないところだった」
次郎が出て行ったあと、二時間ほどして由美は起きた。爽やかな気分だった。

昨夜、食べ散らかしたものを洗っていると、チャイムが鳴った。
出てみると二人の男が立っていた。
「ちょっとおききしたいことがあるんですがね」
一人が、警察手帳を見せた。
「何でしょうか？」
由美は、サロンエプロンで手を拭きながらいった。
「先日亡くなった加川良夫さんですが、ご存知ですね？」
「どうして私が知ってるんですか？」
由美は、不安におそわれながらいった。
「加川さんは、あなたのことを書き残しているんですよ。詩も書いています」
「知りませんわ」
一体、何を書き残したのだろうと、由美は心配になりながら首を振った。
「嘘をいっては困りますよ。彼は、あなたのことを
[illegible]
あなたに、京都で再会したところから、それははじまっています」
「……」
「あなたは、昨日、加川さんの葬式に行きませんでしたか？　行ったでしょう？」
「いいえ」
「我々は、この事件が殺人ではないかと思って、葬式の間中、あちこちで見張っていたんです。加川さんの隣のビルの屋上に立っていた刑事もいるんですよ」
刑事は、さっと一枚の写真を出した。それには、ビルから、下をのぞき込んでいる由美の姿が写されていた。
仕方なく由美は、葬式に行ったことを認めた。
「でも、私は、あの人が誰なのか名前を知らなかったのです。名前を知ったのは、テレビのニュースを見たときです。ですから、どんなところにいるのか見に行きました」

「あなたが京都でレイプされたのは本当ですか？」
刑事は、無神経な声でいった。
〈こんな男、女にもてないにきまってる〉
由美はそう思いながら、うなずいた。
「もう一度、京都に行ったとき、呼び出して犯したと書いてあるけれど、それも本当ですか？」
「ええ」
由美は、つとめて無表情にいった。
「だから、あんたは、この男に恨みがあった。それで、彼が誰かつきとめて、殺したんだ」
刑事は、断定するようにいった。
「えっ、まさか。私は殺してません。私、さっきもいったように、この人が誰か知らなかったんですから」
「加川さんは、あんたが好きになって、その苦しさをノートに書きつづっていたんですよ」
「私は、殺していません」
由美は、強い口調で繰り返した。

第九章　もう一人の男

1

由美は、刑事が、自分を信じてくれないのが悲しかった。

加川が死んだときの由美のアリバイはない。しかし、加川を殺してはいないのだ。

加川が南田物産に勤めていたことも知らなかったし、彼の住んでいたところすら、今度のニュースではじめて知ったのだ。

「私は、加川さんを本当に殺していません」

もう一度由美がいうと、刑事は、

「それでは、一体、誰が殺したんでしょうね。一番動機のあるあなたが殺してないとすれば」

といった。

「南田物産社長の息子の秋彦さんかもしれません」

由美は、思わず叫んでいた。

「ほう、あなたが婚約解消になった人ですね。どうしてですか？」

「秋彦さんは、私を見初め愛してくれていました。それが駄目になったのは、私が、加川さんにレイプされたこと、そして、そのため脅迫されて、婚約旅行中に彼に呼び出されて犯されたからです。私にも動機があるかもしれませんが、もし、そのことを秋彦さんが知ったら、怒って殺してやりたいと思うのは当然ですわ。たとえ、それが全くの見ず知らずの男でも、自分の婚約者がそんな目に会わされたら腹が立つと思いますが、それが、自分の会社である南

日常茶飯の社員たちということになれば、その怒りはもっと激しいと思いますわ。最初に犯したときには、私と秋彦さんは何の関係もなかったのに、京都では、加川さんは、私が自分の勤めている会社の社長の息子の婚約者だと知っていたはずですから」

「なるほどね。飼い犬に手を噛まれるということですか……」

刑事がいった。

「そうです。たとえ私と別れたにしても、その侮辱には耐えられなかったのではないでしょうか？」

しばらく、じっと由美の顔を見つめていた刑事は、

「あなたは、秋彦さんを愛してなかったんですか？」

と、きいた。

「愛してましたわ」

「今は、どうですか？」

「さあ、わかりません」

由美が正直に答えると、刑事は、

「彼を愛していたけど、婚約を解消されたので、今は恨んでいて、彼を犯人にしたいという気持ちなんじゃありませんか？」

と、いった。

由美は、口惜しくて涙が出た。

「そんなことはありません。出来れば、別の人が犯人だったらいいと思います。もし、彼が殺したのだとしたら、動機は私のことですから気が重くなります。でも、ほかにいるのでしょうか？」

「さあ、今のところ、見つかりませんね。加川さんには、ほかに女性もいなかったし、会社でも真面目に勤めています」

「そうですか。でも、京都で私に対して、あんなことをしたのは誰も知らないのですから、人には表面しかわからないのだと思いますけど」

由美は、そういいかけて、途中で考える目になった。

「どうしたんですか？」

刑事が目ざとく見つけていった。
「あの……、京都で私をレイプした男性が、もう一人います。それは、この人です」
由美は、キッチンにあった写真をとってきた。
「この人のことを少し調べて頂けないでしょうか？もし秋彦さんが犯人でなければ、この人が、犯人なのかも知れないのです。今日の葬儀に、この人も来ていたそうです。きちんとした服装から見て、彼もきっと、今は、どこかに就職して、エリートコースをのぼろうとしていると思います。その彼にとって、私をレイプしたことは、唯一のウィークポイントだと思います。若気のいたりだったと今は悔いる気持ちになっているはずです。それでそのことを知っている加川さんが、邪魔だったのではないでしょうか？　あれはあれだけですんで、どこの誰ともわからなければよかったけど、加川さんが、その女と再会したことをきき、自分のことを喋られると心配になったのではないでしょうか？　是非、この人のことを調べて下さい」
由美は、必死で頼んだ。
刑事は、うなずいてから、写真を貸して下さいと持っていった。

2

刑事が帰ったあと、由美は、キッチンの椅子に座って考えていた。
秋彦のことはとにかく、加川と一緒に自分をレイプした男のことは、いわない方がよかったのかも知れないと気になってきたのである。
〈あの男の身元や名前がどうしても知りたいと思ったから、丁度いい機会だと思ったのだけど、もし、あの男が、加川を殺した犯人だとわかって捕まれば、私も法廷に呼ばれるかもしれない〉
と思ったからだった。
もし、あの男が加川を殺したとしたら、動機は京

都てのレイプのことを永久に口封じしたかったということしかない。すると、そのことについて、自分も裁判で話をきかれるのではないかという恐れである。

しかし、考えているうちに、そうなれば、少なくとも加川殺しの疑いだけは晴れるからいいではないかと思いかえした。

〈今、一番疑われているのは私なのだから〉

あの刑事が、秋彦を犯人と思うはずがないのである。

由美が考え疲れてぼんやりしていると、玄関のチャイムが鳴った。

〈刑事が引き返して来たのかしら?〉

暗い気持ちで出て見ると、立っていたのは、次郎だった。

「あ、次郎」

現金に、由美はいそいそとドアをあけた。

彼は、駅弁を買って来たという。

「今日、東京駅を通ったので、買って来たんだ。一緒に食べようと思って」

「仕事は?」

「ああ。いいんだ。今日は、定期を集めに出たんだけど、うまく話がついて、明日、まとまった契約がとれることになったから、二~三時間、サボっていいんだ」

次郎は、にこにこしていた。大学を卒業する時、彼が銀行に就職したので、自分もどうしても銀行に就職したくなったことを由美は思い出していた。

由美は、お茶を入れ、次郎と一緒に駅弁を食べながら、刑事が来た話をした。

終わりまできいてから、次郎は、急に真剣な顔になった。

「今、きいている間に思いついたんだけど、ひょっとしたら、秋彦という男は、奈奈子という女と深い関係になって別れられなくなったので、君と別れる口実を作るために、加川という男に、君を誘い出し

て犯すようにいいつけたんじゃないかな。前に、彼が、君をレイプしたのを知っていて」

「それはないわ。だって加川さんが、私にそんなことをしたと知ってたら、そのキズ者の私と、結婚しようなんて思わないはずだわ」

由美は、強い口調でいった。

しかし、次郎は、首をかしげた。

「そうかな。彼はプレイボーイだから、加川からその話をきいて、君に関心を持ったのかもしれないよ。ただ、結婚する気なんかなくて、一度、遊んでみたいという気になっただけかもしれない。でも、身分があるから、加川のように、君を道で押し倒して犯すわけにもいかない。それで、結婚したいといい、結納も出して、君を京都まで誘い出した。ところが、そういう興味だから、一度だけでいい。そのあとは、昔、君がレイプされたことをきいた、といって、破談にすればいいと、最初思ってたんだ。

ところが、君は、真剣に結婚のことを考えているし、自分の両親もその気になっている。昔のことをいいたてても、そんなことはなかった、嘘だといい張られては破談に出来ない。加川を証人に出したら、南田物産の社員だということがわかるし、加川を君が訴えるかもしれない。そこで、手っとり早く、もう一度、加川に君を誘うことを命じたんだ。僕が今日、調べて来たところによると、加川と秋彦は、同じ大学で、同じ運動部にいたことがわかったんだ。だから、そのツテで、南田物産に就職したんだと思うな」

由美は黙り込んだ。

3

彼のような金持ちのプレイボーイが、由美のような平凡な女を見初めて結婚するはずがないのだと思えて来たのである。

加川とは学生時代のワル友だちで、相当いろい

なことをして来たのかもしれない。

その加川が、京都でレイプした女だといって、由美のことをきれいだったとか、軀がよかったとかいって、面白おかしく話したのだろうか。

あるとき、加川は、銀行で、由美を見つけて、秋彦に、あの女だと話した。

それで秋彦は興味を持ち、結婚しようといったのだ。

結納金などは親が出すから、秋彦の負担にはならない。

ホステスなどに入れあげる金は、親は出さないだろうが、結婚するといえば、親は喜んで金を出すだろう。

〈私は、秋彦さんのオモチャに過ぎなかったのだわ〉

多分、井上を殺したのは奈奈子だろう。

そのハプニングが起こらなければ、秋彦は、最初の予定通り、夜、加川と出かけたことで由美に引導を渡すつもりだったが、二人を尾けていた加川に殺人のことを知られてしまったので、彼を殺すことにしたのではないか……。

沈み込んだ由美を見て、次郎は、あわてて、彼女を慰めた。

「もういいじゃないか。過去のことはすべて忘れてしまいなさい。僕は、彼のように、結婚をえさに君の軀を奪ったりしない。結婚しよう」

次郎は、由美にキスをした。長く熱いキスに、由美の軀も次第に燃えて来た。

キスが終わったとき、バスルームの水音をきいて由美は、「あっ」といった。

「お風呂のお湯を出しっぱなしにしておいたんだわ」

由美が、バスルームの湯をとめているところへついて来た次郎は、

「お風呂に入ろうか？　一緒に」

と、いった。

「でも……」
「いいじゃないか」
次郎は、すぐ服を脱ぎ捨てて、中へ入って行った。
「早く、早く」
由美は恥ずかしさをこらえて服をぬぎ、タオルで軀をかくすようにして、そばへ行った。彼は浴槽の隅をあけてくれ、手をとって中へ入れた。由美は、浴槽の中で軀をちぢめた。
次郎が、その由美を引き寄せ、しっかりと抱きしめる。
裸の肌と肌が合わさって、快い。
次郎は、由美の顎に手をかけて仰向かせ、キスをした。長いキスに、由美は、息がつまりそうになった。
彼の手が、由美の敏感なところをまさぐる。由美は、軀中の力が抜けて、思わず、湯の中に倒れ込んでしまった。
「あ、耳に水が……」
あわてて起き上がると、次郎は、上がろうといった。
洗い場で、次郎が、由美の軀に石鹸を塗り、泡をたてる。そして、今度は、自分の軀にも石鹸を塗って、二人は抱き合った。
由美が動くと、次郎が、「あっ」といって、軀をのけぞらせる。泡は軀中にあふれて、その中でたわむれているのは快かった。
「ほら、こんなになっちゃった」
次郎がいい、由美の手をとって触れさせた。由美が握りしめた途端に、
「あっ、駄目っ、駄目だー」
といって、次郎は、果ててしまった。
やがて我に返ると、次郎は、
「ごめんね」
と、恥ずかしそうにいった。
「いいの、私、うれしかったわ」
由美は、やさしく、彼の軀に湯をかけ、自分の軀

を洗い出した。
「張りつめた躯してるね。きれいだ」
浴槽の中から次郎が満足そうにいった。
由美は、さっきまでのことを忘れて楽しくなっていた。
〈結婚すれば、毎日のように、彼とこうしていられるんだわ〉
風呂から上がると、ジュースを飲み、次郎は、ベッドに横になった。
「いい気持ちだ。このまま眠りたいな」
「時間ぎりぎりまで眠ってたらいいわ。起こしてあげる」
「そう」
というより早く、次郎は、軽い寝息をたてはじめた。
〈秋彦さんと結婚しなくてよかったわ。両親に気を使って、彼の気まぐれにおどおどして暮らすのは嫌だわ〉
由美は、そう思いながら、目覚ましの時間をあわせた。
翌日、次郎が外から電話をかけて来た。
「あのね、加川という男と一緒に、君にひどいことした男の名前わかったよ」
「え、何というの？」
「江木修一といって、東都女子大の講師をしてるんだよ。びっくりした？」
「ええ、信じられないわ。女子大に勤めてるのに、そんなことをしたことがわかったら大変だわ」
「だろう？　だから、加川を殺したんじゃないかな」
「そうかも知れないわ。加川という人は、社長の息子と友人だし、知られてもそれほど困らないとしても、女子大の先生じゃ、クビになるわ」
「大学は同じだよ、加川と。だから、秋彦とも同じになる」
「でも、そうすると、加川さんを殺しても、秋彦さ

んが喋るかも知れないわ」
　由美は、首をかしげながらいった。
「だから、もし、江木という男が犯人なら、加川も、京都の件は、秋彦に話していないのかも知れないね」
　そのとき、公衆電話のジーという音がして、電話が切れた。
　彼は、公衆電話から、由美に情報を知らせて来たのだ。
　もう一度かかって来たとき、由美は、江木の住所をきいた。
「どうするの？」
「別に。ただ、あまり会いたくないから、そっちに行かないようにしたいの」
「それから、江木には、妻がいるよ」
「えっ、本当？」
「やっぱり、犯人は、江木かな？」

4

　由美は、一年前に、自分を京都で犯した江木という男が、どんな家に住み、どんな男なのか知りたいと思った。
　彼は、もう一人のレイプ犯人加川を殺したのかも知れないし、そうでなくても、加川のように、由美を脅かしてくることがあるかもしれないのである。
〈脅かされる前に、先手を打って、相手の身辺を知っておくと、攻勢に出られる。妻のいる彼は、レイプしたことを喋られたくないに違いないわ〉
　次郎の調べてくれた彼の住所を、由美は、番地をたよりに、探した。
　場所は、港区麻布である。
　大きな邸が建ち並ぶ街だった。
「彼は、こんなに収入があるのかしら？」
　由美は、不安になって来た。

しかし、探しあてた彼の家は、それほど大きくなく、二階建ての五十坪くらいの家だった。

由美は、そっと、門の中をのぞき込んだ。

南側のテラスで、若い女性が、小鳥にえさをやっていた。

白いブラウスに、チェックのスカートをはいた可愛い女性である。

〈あれが江木修一の奥さんなんだわ〉

そう思った途端に、急に腹が立って来た。

自分の奥さんは、こうして大事にしておきながら、由美をレイプしたことに対する怒りである。やがて女性は、部屋の中に入ってしまった。由美は、干されている洗濯ものを眺めた。子供のものはない。

〈子供は、まだ生まれていないらしい〉

すると、結婚したのも、まだ、最近なのかもしれない。

やがて、女性は、上衣を羽織り、買物かごをさげて出て来た。由美は、あとを尾けた。

彼女は、そこから十分ほど離れたスーパーへ行き、買物をはじめた。

ピーマンやタマネギ、ひき肉などをかごに入れる。大して贅沢なものは買っていない。

レジのところで、彼女は、同じ年齢くらいの女性と会い、仲良く喋り出した。

高校時代の話をしていることからみて、同じ高校を出た友人だろう。

二人は、スーパーを出ると、近くの喫茶店に入った。由美も、中に入り、背中あわせのテーブルに着いた。

二人は、由美には気づかず、熱中して喋っている。

話の様子では、江木は、半年ほど前に、結婚したらしく、夫人の父親は、江木の勤める東都女子大学の教授らしい。そして、今の家は、その父親の持家だということがわかった。

「いいわねえ。百合子は、家のローンを払わなくて

いいから。私は、マンションのローンで大変よ」
と相手の女性が喋っている。でも、若さのせいか、話し方が明るくて、そんなに気にしている様子ではなかった。
由美は、なおもきき耳をたてた。
相手の女性の夫は、会社員で、夜遅く帰ってくる様子だったが、江木の方は、六時頃には家に帰って来て、夕食を一緒に食べるという。
「いいわね。うちなんか週に一回か二回よ、食事までに帰って来るの。それも、予定がわからないから大変よ、一応は夕食作らないといけないし……」
と、相手がいうと、百合子は、
「大学では、あまり宴会なんかないからよ。でも、たまには、外で食事をして来てくれると助かるんだけど」
と、話している。
〈江木は、加川が死んだ日も、きっちり家にいたのかしら?〉
由美は、考え込んだ。

5

由美は、江木の家庭での生活は大体わかったので、いよいよ彼に会ってみようと思った。もし彼が、レイプ事件を喋られたくなくて、加川を殺したのだとしたら、レイプされた本人の由美が会いに行くことは危険である。
百合子夫人に喋られては、職業も家も妻も失うことになるからだった。
でも、由美はどうしても、井上や、加川を殺した犯人を知りたかったし、ダイヤの指輪がすりかわり、婚約破棄になった理由をつきとめたかった。
それで、江木に会うことを決心した。
次郎にいうととめられると思って、内緒にし、その代わり、自分が死んだらわかるように、手紙を書いて、ベッドの下に隠した。次郎は、ベッドの下に



秘密の物入れがあるのを知っているから、一番にそこを見るだろう。

由美は、江木の研究室に電話をかけ、彼を、大学近くの喫茶店に呼び出した。

名前は伏せて、学生だが個人的に相談したいことがあるといったのである。

彼は、女子大ではよくある学生の相談ごとだと思ったらしく、気軽に出て来た。

喫茶店は、授業中であることと、コーヒー代が高いことで、学生の姿はなかった。

喫茶店に入って来た彼は、あたりを見まわしてから、一番奥の由美のテーブルに来ていった。

「あの……僕に用事があるといったのは君かな?」

「はい」

由美が顔をあげると、江木は、テーブルに着いた。

「どういうことなの?」

彼は、由美を覚えていないようだった。

[illegible]

た。複雑な気持ちだった。

〈この男が、私の人生を狂わしたのだ〉

由美は、一年前の日付けと、京都の嵯峨野という字をメモ用紙に書いた。

なにげなく文字を読んだ江木の顔が、蒼ざめた。

「あ、あのときの……」

「そうです。あなたは私を覚えていないけど、私は、あのときのあなたの顔は、一生忘れません」

「すまない。申しわけない!……あのときは、魔がさしたんだ」

江木は、がくっと顔を伏せ、小声で呻くようにいった。

「魔がさしたというような感じではありませんでしたわ。手慣れた様子で。でも、あのときまで体験のなかった私は、あれで男性全体に不信感を持ちました。心の傷は、今も消えません」

由美は、燃え上がってくる怒りをおさえて、わざ[illegible]

江木は、うろたえていた。それを冷やかに見ながら由美は、

「私と結婚して下さるか、死んでもらうしか償う方法はないわ」

と、いった。

「えっ、結婚？　それは……」

江木は、ぎくっとしたように顔をあげた。

「奥さんがいるから出来ないでしょう？　百合子さんが、麻布のお宅に」

「どうして、それを？」

彼は、怯えた目をした。

「全部調べたわ。あなたを突きとめるために。あなたが、教授の娘と結婚したことも、教授の持家に住んでいることも」

「やめてくれっ。結婚以外なら何でもする」

江木は、髪をかきむしった。

「加川さんは殺されたわ」

江木は、恐ろしさに口がきけないというように由美を見た。

〈江木は、加川を殺した犯人ではないわ。私が殺したと思って怯えている〉

「出ましょう。歩きながら話しましょう」

由美がいうと、江木は、警戒するように、身構えたが、外がまだ明るいのを確かめると、無言でついて来た。

歩きながら、由美はいった。

「加川さんを殺したのは私じゃないわ。でも、私とあなたは、犯人じゃないかと疑われているんです。もっと、心を割って話しましょう」

由美は、南田物産社長の息子と婚約し、その婚約旅行中に、加川から呼び出されて、それが原因で、婚約が解消になったと話した。

「だから、私は、何重にもあなたたちを恨んでいるわ。ああいうことさえなければ、加川さんに呼び出

されることもなく、婚約も破棄されなかったのですから……」

江木は、息をのんできいていたが、加川が、もう一度犯したことは知らなかったといった。

「でも、秋彦さんと、あなたたちは同じ大学で友だちでしょう。今でもつき合っているはずだわ」

由美は、足をとめていった。

「いや、今は、ほとんどつき合いはないんだ。加川は、彼の会社へ入ったから、もちろんつき合っていたと思うけど」

江木は、由美に何もかも話さなければ、彼女が許さないと知って、少しずつ話をはじめた。

6

江木の話では、彼と加川、南田秋彦は、やはり大学時代の遊び仲間だったという。

加川と南田は、浪人して大学に入り、二年留年したから、江木より三つも年上だが、仲は良かったという。

「僕は、大学の教授になりたくて、必死で勉強し、真面目がとりえの人間だったので、かえって、彼等の自由奔放で、プレイボーイの生活が羨ましかった。秋彦にくっついていると、女の話もきけたし、金が豊かで、楽しいことも多かったしね。彼は気前がよくて、よくおごってくれたし、金も貸してくれた。でも、勉強はいつもサボっていたので、僕が必要だったんだろうと思う。代返もしてやったし、試験のときには、ノートをみんな貸してやったから。加川は、彼といつも行動を共にして、彼に気に入られていた。彼は、成績はよくなかったので、南田の会社に最初からコネで入れてもらうつもりだったみたいだ。京都へ行ったときは、南田も一緒だったんだよ。でも、あの日は、東京から彼に女が会いに来たので、僕たち二人だけで、行動してたんだ」

彼は、ときどき、黙り込んだりしながら話した。

「それで、秋のことを、秋彦さんに話したんですか？」

じっと前を見ながら、由美がいった。

「すまない。宿に帰ってから、加川が話したんだ。秋彦は、僕も行きたかったと、残念そうにしていたよ。彼や加川は、大抵の女遊びはしていて、刺激にうえていたからね」

「秋彦さんや加川さんは、そういう性格だとわかりましたけど、あなたは、どうしてあんなことをしたんですか？」

由美にいわれて、彼はうなだれた。

「僕は、女の体験はあのときまで一人しかなかった。同じ大学の女の子で、その子とは、結婚するつもりだったんだけど、フラれて、あのときは、ヤケになっていた。それで、ああいうことをしたんだ。申しわけない」

「結婚話は、いつ出たんですか？」

「京都から帰ってしばらくして、教授にいわれたんだ。失恋してたし、相手に会ってみると感じがよかったので、すぐきめた」

「教授の娘を貰ったら、有利だと計算したんでしょう？」

由美は、冷たくいった。

江木は、うなずいた。

「それもあったと思う。でも、結婚してからはうまくいってるし、父親が教授なので、学者の生活もよくわかっていて、今はよかったと思ってる。だから、この生活をこわしたくないんだ。君には、申しわけないと思っている。何かで償うことは出来ないだろうか？」

「……」

由美は、黙っていた。

彼に何を償って貰っても、あのときの苦しみは忘れられない。

それに、どうやら、彼は、加川の死とは関係がないらしい。それでも、何か加川のことがきけないか

と思い、最近の加川についてたずねた。
「どうして、加川さんは、もう一度、京都で私を呼び出したのでしょうか？　彼だって、私のことは忘れたかったと思うのに」
「ああ。それは、彼が、ある日電話してきたのです。京都でレイプした女性が、東京の銀行に勤めているって。彼は、そのことを社長の息子、つまり、秋彦にいったといってました。すると、彼が、とても興味を持ったって」
「あなたは、そのとき、どう思ったんですか？」
「僕は、イヤな予感がしました。あなたには申しわけないけど、忘れ去りたかったからです。それで、どこの銀行かもききませんでした」
「本当ですか？」
「本当です。ただ、秋彦の彼女が、偶然にもその銀行にいるって、加川がいってたから、そのことは、ちょっと気になりましたが……」
「どうして？」
「その彼女が、あなたに三人の名前をいって、あなたに僕の名前を知られたら困るなと思いました。やっぱり、彼女からきいたんでしょう？　僕のこと」
「いいえ」
　由美は、彼女というのは奈奈子だと思った。
へでも、奈奈子は、秋彦が私に結婚を申し込んだときいたとき、どうしてヤキモチをやいたり、大さわぎをしなかったのだろう。やめさせることも出来たのに〉
　由美の沈黙を別の意味にとったらしく、江木は、あわてていった。
「本当に、どんなことをしても、償いたいんだ。僕が独身なら、君と結婚したいと思う。けど、今は、妻がいるからそれは出来ないし、君に公表されると困るんだ」
　結局は、彼も、小心で、利己的な男でしかなかった。
「では、南田秋彦と昔のように親しくして、色々情

報を知らせて欲しいの。何故、私と結婚するといったのかとか、加川さんに、私を襲わせたのは、秋彦が命じたのかとか。どんなことがわかっても、私は、何もいわないし、何もしないわ。何が真実なのか知りたいだけなの。あなたから、お金を貰おうとは思わないし、あなたの奥さんや、教授にも、何もいわないわ。私は、秋彦さんには、未練もないし、今は、別の恋人がいますから、大丈夫です」

由美の申し出をきくと、江木は、ほっとしたようだった。

「わかった。そういうことだったら、僕にもやれる。具体的にどうすればいいか教えて下さい」

由美は、彼と別の喫茶店に入り、色々と相談した。

「わかった。任して下さい」

彼は、きっぱりといった。

第十章　真相

1

由美は、江木が約束を忘れないように、彼の家へ二度ほど、無言の電話をかけた。
その効果があったらしく、江木は、それから数日すると、由美に連絡して来た。
「南田秋彦に会いましたよ」
「それで何かわかったんですか」
「加川が死んだことを口実に会って、加川が、京都でレイプした女を、もう一度犯した話をきいたとカマをかけてみたんですよ」
彼の声は暗かった。
「そしたら？」
「そしたら、彼は、ちょっとびっくりしたような顔をして、あの女とは婚約したけど、もともと、結婚する気はなかったのだから、婚約旅行に連れ出したとき、犯してくれとたのんだんだといってました」
「ひどいわ。もともと結婚する気がなかったなんて。でも、婚約指輪や結納まで渡したんですよ」
「彼は、親が遊びの金を出さないとボヤいていたから、親から出る金なら構わないと思っていたんじゃありませんか」
電話のせいか、彼の言葉遣いは丁寧だった。
〈やっぱり、秋彦は、私に興味を持っただけなんだわ。そして、私のせいで解消したことにして、指輪だけは返すようにいうつもりだったんだわ〉
由美は、ちょっと考えてから、

―それで　彼は　奈奈子という女性と結婚するといってたんですか？」

と、きいた。

「いや、結婚はしないって。彼女もそれは割り切っているから、金で話をつけたって」

「へえ。そのお金は、やっぱり親が出したのかしら？」

「いや、自分で出したようなことをいってたけど。五百万で手を打ったって」

「井上という人が、京都で死んだことについては、何かいってませんでしたか？」

由美は、彼から大した情報がきけないので、いらいらしながらいった。

「何もいってなかったね。こっちもききにくいし」

「加川さんの死については？」

「それもわからなかった。折角、親父の会社に入れたのに、死んでしまって残念だって」

「何にもわからないんですね」

由美は、ちょっと不機嫌にいった。江木はあわてて、

「もう少し、時間をかけて加川の死については探ってみます。だから、家に電話しないでくれませんか。妻が怯えているんです」

と、いった。

「私、電話なんかしてませんわ。じゃ」

由美は、電話を切った。

男というのは、身分を失うのがそんなに恐ろしいのだろうか？　学生のときには、あれだけひどいことをしておきながら、今は、大学の講師の地位を失いたくなくて、汲々としていると由美は思った。

江木の情報は、あまり役に立たなかったが、奈奈子に、五百万円の金を渡したというのが気になった。

〈彼は、金に困っていたはずなのに、どういう風にして、彼女に金を払ったのだろう？〉

家にいるのも退屈なので、由美は、事務員の口でも探そうと、外に出た。

手には、新聞広告の切り抜きを持っている。

〈少しでも働かないと食べていけないし、南田家へもお金を返さないといけない〉

しかし、折角行ったのに、その会社は、一足違いで、女性事務員の採用がきまってしまっていた。係の男性は、少し喋っているうちに、由美が気にいったらしく、

「じゃあ、僕の知っている会社が、女性事務員を募集してたから行ってみたらどう？　君みたいに美人で感じのいい子だったら、きっと採用になると思うよ」

と、地図を書いてくれた。

礼をいって外へ出たが、その住所を見ると、前につとめていた銀行の近くだった。

〈折角だけど駄目だわ。銀行の人に、小さな会社に勤めていることを知られたくない〉

そう思ったが、紹介してくれた人に悪いような気がして、行くだけは、行ってみることにした。

2

勤めていた銀行の前を通ったときは、さすがにつかしかった。

大学を卒業して、胸を躍らせて就職した銀行である。しばらく、じっと眺めていると、中から、男性行員の菱田が出て来た。

彼は、由美の結婚が解消になったことを知って、みんなが冷たい目で見るようになった中で、一人だけやさしくしてくれた男である。

「菱田さーん」

由美は呼んでみた。菱田は、こっちを見て、

「あ、どうしてるんですか？」

と、にこにこしながら近寄って来た。

ひょっとしたら、彼は、由美が好きだったのかも知れないという気がした。

「お話をしたくって。でも、どこかへ行くんでしょ

う?」

由美は、彼のかばんを見ながらきいた。

「いや、いいんですよ。お茶でも飲みましょうか?」

二人は、少し離れた場所の喫茶店に入った。彼は、奈奈子がそのうち、結婚でやめるらしいと話した。

そして、由美がどうしているか心配でならなかったといった。

そこで、由美は、自分が見初められる前に、秋彦が、奈奈子と関係があったことを話し、由美とは結婚するつもりがなく、はじめから弄ぶつもりで、しかも、自分の会社の社員に、由美を犯させたのだといった。

「本当ですか。それは許せない。ひどい」

菱田は、自分の妹が犯されたように、憤慨した。

由美はうれしくて涙ぐみながら、奈奈子のことを調べてくれるように頼んだ。

「奈奈子さんは、私が、京都に婚約旅行に出かけたとき、会社を休んで京都に来てたのではないでしょうか? それから、奈奈子さんは、秋彦さんから、五百万円のお金を貰っているんです。それは、一体、いつなんでしょうか?」

由美の話をきいた菱田は、調べてみるといってくれた。

菱田と別れたあと、由美は、その近くの会社に行き、事務員にやとって欲しいといった。やがて、部長という人物が出て来て面接し、あっさりと、由美をやとってくれることになった。職歴をきかれたとき、由美は、前に勤めていた銀行のことを正直に話し、結婚のためにやめたのだが、その結婚が駄目になったので、勤めたいのだと話した。相手は、

「あそこの銀行に勤めていたのなら、うちは、歓迎です。是非来て下さい」

といい、ただし、金銭関係でやめたのかどうかだけ、調べさせて貰うとつけ加えた。

〈支店長が、何というだろうか? でも、もし、駄

目ならそれでもいい〉

と、由美は思った。

翌日、その会社から電話が入り、正式に入社がきまった。

〈よかった。支店長は、悪くいわなかったのだわ〉

由美は、ほっとした。

銀行の近くなのは、奈奈子の様子も見はることが出来ていいと、由美は思うことにした。

夕方になって、菱田が公衆電話から電話をかけて来た。

「奈奈子さんは、あなたが京都へ行ったとき、勤務を休んでいませんよ。そして、おたずねの日、終わったあとも、同僚と遅くまで飲んでいます」

由美は、がっかりした。おたずねの日というのは、井上が殺された日である。

〈井上さんを殺したのは、奈奈子ではないのだわ。一体、誰だろう?〉

由美は、わからなくなった。

すると、菱田が、言葉を続けた。

「南田秋彦さんは、あなたと婚約する前、うちの銀行から、五百万円の金を借り出していて、なかなか返せないでいたことがわかりました。両親に内緒の金らしく、支店長も困っていたようです。ところが、あなたと婚約してしばらくたったとき、その金を、利子をつけてあっさり返しています」

由美は、顔が蒼ざめてきた。菱田は、そのあとも、色々調べたことを話したが、由美の耳には入らなかった。

電話を切ると、由美は、その場にぺたりと座り込んだ。

すべての謎が解けたような気がしてきた。

3

秋彦は遊ぶ金につまり、奈奈子にも結婚を迫られて困っていた。

それで、由美に目をつけたのだ。

〈私を見初めたのでもなんでもないんだわ。彼は、私を道具に使っただけなのだ〉

彼は、度々の放蕩で、親から金を出させる方法がない。しかし、銀行からは、金を返すようにせまられている。

そこで、由美と結婚して身を固めるといって両親を安心させ、結納と指輪の金を出させた。指輪は、母親に買わせて、由美に渡すまでに、ニセモノに代え、保証書と一緒に渡したのだ。

そして、その指輪を売り払い、その金で、借金を返し、奈奈子にも支払ったのだろう。

最初の五百万円の半分くらいは、奈奈子に先渡しした金なのかも知れない。

なぜ由美が選ばれたかというと、前にレイプされた女だときいていたからである。

京都に連れて行き、加川に犯させれば、婚約は解消できると予定していたのだ。

東京でなく、京都にしたのは、加川を京都のものだと思わせ、由美の軀もいただくためだったのだ。

彼は、由美の軀を味わい、その上、金を返済して、奈奈子とも切れることが出来たのである。

しかし、ハプニングが起こった。それは、井上が、秋彦の渡した指輪がニセモノであることを見破ったことである。

彼は、由美にそれを知らせようと、京都まで追いかけて来た。

そして、手紙を書いて女中にでもことづけ、由美に渡そうとしたのだ。秋彦の隙を見ての立ち話では、充分なことが話せないと思ったからだろう。

しかし、彼は、由美が、秋彦と寝るのを見て耐えきれず、秋彦に話をしようとした。そして、秋彦に殺されてしまったのだ。

秋彦は、こんなことが公になると大変だと思ったに違いない。

加川には、翌日の夜、京都に来て、由美を呼び出

すようにいったのに、加川は、一日早く京都に来て、井上殺害を知ってしまったのだ。東京に帰ってそのことを知った秋彦は、彼も殺すことにした。

たいがいのことならとにかく、殺人を知られたのでは生かしておくことは出来なかったのだ。

そこまで考えて、由美は、恐ろしさにため息をついた。

〈秋彦は、私などちっとも愛していなかったのだわ。ただ、お金を捻出するためだけに、私と婚約し、ついでに軀まで奪ったのだ。そのため、私は、加川に犯され、仕事まで失ってしまったのだ〉

そう考えると、秋彦が殺してやりたいくらい憎らしかった。

由美は、二時間もの間、じっと壁を見つめていた。

そして、

〈井上さんを殺したのが彼であることを突きとめて、彼を告発しよう〉

と、心に決めた。

彼が、井上を殺したことがわかれば、動機として、指輪のこともわかってくる。

〈私が彼を殺すより、法でさばかれる方が、彼に復讐できる〉

しかし、井上の殺された部屋の密室の謎が、どうしても解けない。

〈そうだわ。京都へ行こう。そして、もう一度、あの旅館に泊まるのだわ。井上さんが泊まった部屋に私が泊まって、密室の謎を解こう〉

そのためには、せっかく就職した会社をやめないといけない。

〈やめよう。あのくらいの会社なら、また、就職出来るわ〉

と、一旦は思ったが、京都に行って、色々調べるには、お金がかかる。

それに、銀行にいる奈奈子の様子を探るには、あの会社は、絶好の地理的条件にあった。

会社のある五階の窓から、銀行の様子が、手にと

るようにわかるのである。

〈しばらく様子を見よう。その間に奈奈子のことを調べ、秋彦のことも探るのだ。一ヵ月分の月給を貰ったら、休暇をとって、京都へ行こう〉

由美は、そうきめた。

そこへ、次郎が、勤めを終えてやって来た。由美は、彼と食事しながら、すべてを話した。

次郎も、秋彦に、激しい怒りを感じたようだった。

「京都には、僕も行くよ。そして、井上さんの死の真相を突きとめよう」

「うれしい！　有難う」

由美は、彼に抱きついた。

二人は、そのままで、畳に倒れ込んだ。

風呂に入ってないので、次郎の軀から、汗に似た男っぽい体臭が立ちのぼる。

次郎は、荒っぽく、由美のショーツをはぎとり、自分も、下半身をあらわにして、キスをしてきた。

スカートがめくれ上がり、由美は、犯されているような気分になる。そして、それが、決していやでないのに、自分で驚いた。

次郎の手が、由美の花芯を探る。

「いやっ」

「嫌じゃないって」

猫のように、二人はじゃれ合った。

彼の指が、一番敏感なところを探りあて、割って入ってくる。

「冷たいっ！」

しかし、すぐそれは、快さに変わった。

彼の指は、ハープを弾くように、撫で上げ、はじき、撫でおろす。

「好きだよ」

「私も」

と、由美は、あえぎながらいった。

彼は、セーターをたくしあげ、乳房に唇をつける。

「うっ」

由美は、耐え切れなくなったように、呻く。彼は、

由美をひっくり返して、うしろから入って来た。
由美の軀が反りかえる。それをおさえつけるようにして、次郎は、激しく動いた。
由美の軀が、左右に小きざみにふるえる。
「由美っ、由美」
次郎がかすれた声を出した。
やがて、由美の軀がぴくんとはね、動かなくなった。

4

それから数日、由美は、真面目に、新しい会社へ勤めた。仕事は、経理事務だった。
銀行へ勤めるため、簿記なども大学時代にマスターしているし、銀行に一年近く勤めて実地も練習しているので、仕事は思ったより簡単だった。
上司の覚えもよく、意外なことに、給料も、銀行より少し高かった。
はじめは、ほんの少しだけ勤めるつもりで入った由美だったが、この調子なら、しばらく続けてもいいと思うようになった。
だが、京都へ行って、井上が殺された密室の謎だけは解きたいと思っていた。
会社の窓からは、銀行がよく見えた。由美は、希望して、窓ぎわのデスクにして貰い、銀行から出てくる人や、奈奈子のことを観察していた。
江木の話では、秋彦は、奈奈子とは結婚しないといっていたが、菱田にきくと、奈奈子は、そのうち結婚して銀行をやめるということだった。
〈どっちの話が正しいのだろう？　いや、奈奈子は、秋彦と結婚するのではなくて、別の男と結婚するのかもしれない〉
その日も、会社の仕事が終わったあと、由美は窓から銀行を見下ろしていた。
すると、奈奈子が、正装して銀行から出て来た。
同じ銀行に勤めていたので、由美は、奈奈子が、

勤めのあとデートするときは、ロッカーにおいてある服に着がえることを知っていた。

〈誰と会うのかしら？〉

由美は、急いでハンドバッグを持って、外に出た。

奈奈子は、タクシーを待っている様子だったので、由美もタクシーを拾って、角をまがり銀行の通りへ行った。

丁度、奈奈子が、中型車をつかまえて乗り込んだところだった。

「あの車を尾けて！」

と、由美がいうと、運転手は、にやにや笑いながら、走り出した。

奈奈子は、新宿の伊勢丹の前でおり、人待ち顔に立っている。

由美も降りて、物かげに隠れて様子をうかがった。

やがて、やって来たのは、やっぱり秋彦だった。

彼は、軽く手をあげて合図すると、二人は、並んで歩き出し、一軒のパブへ入って行った。

由美は、二人が食事をするのだと見当をつけると、急いで、近所のカメラ店へ行き、ポラロイドカメラとフィルムを買って待った。

一時間ほどで、二人は出て来て、タクシーを捕まえる。由美もタクシーを拾って二人のあとを尾けた。

二人は、渋谷区笹塚のマンションに入って行った。

彼等は、エレベーターに乗らず、そのまま、一階の107号室の前に行き、奈奈子が、カギをあけて、二人は、中に消えた。

〈そうだわ。ここは、彼女の部屋なんだわ〉

由美は、奈奈子の住所を思い出した。

〈秋彦は、お金を渡して彼女と切れたといっていたけど、まだ、続いていたんだわ〉

由美は、南側のテラスに廻った。

一階なので、107号室は、一番端だった。

ベランダのガラス戸には、カーテンがおりていたが、端が少し閉まりきらずにあいている。

そこから、そっとのぞいた。中は、2LDKにな

っていて、南側には、二つの部屋があり、カーテンからのぞけるところには、ベッドが見えた。ピンクのベッドカバーのかかった大きなダブルベッドである。

二人は、十二畳ほどのダイニングキッチンで少し喋っていたが、やがて、秋彦が、裸になり、タオルを持って、風呂場へ行ったようだった。

奈奈子は、髪をゴムでとめ、鏡台で、頭を直してから、服を脱ぎはじめた。

由美は、息をころして、それを見つめた。

5

奈奈子の軀から、すべての衣類がとり去られた。張りのあるヒップ、ぎゅっと締まったウエスト、豊かで色白の乳房、みごとなスタイルだった。

彼女は、その裸体を等身大の鏡に映して、うっとりとしたような顔をしてから、秋彦の消えたあとを追った。

十五分ほどで、まず、秋彦が姿をあらわした。軀には、タオルもつけていない。

最近はあまり運動もしてないということだったが、学生時代ヨット部だっただけあって、筋肉の締まったいい軀である。

由美は、胸の奥が痛くなるような気持ちで、彼を見つめた。

「おーい、早く来いよ」

秋彦が呼ぶと、奈奈子が、バスタオルを巻きつけて歩いて来た。

二人は、テーブルの上のジュースを飲み、もつれあうようにして、ベッドのそばへ来た。

「カーテン閉まってるかしら?」

と、奈奈子がいったので、由美は、あわてて、首をひっ込めた。

しばらくして、由美がのぞくと、二人は、裸のまま抱き合って、熱いキスをかわしていた。

れた。

やがて、二人は、ベッドに倒れ込み、奈奈子が秋彦の首に手をまわし、挑発するような眼を彼にむけた。腰のバスタオルがとれて、黒いしげみが、由美のまっ正面に見えた。

目がくらみそうになるのをこらえながら、由美は、まばたきもせず、凝視した。

秋彦の唇が、奈奈子の喉に、首すじに、背すじに這い、彼の手は、奈奈子の下半身にのびて行った。

奈奈子の軀は、まるで、映画の画面を見るように反りかえり、あえぐ。

〈彼は、彼女のように奔放で、反応の激しい女が好きなのだわ〉

由美は、見ているうちに、自分の敏感なところが、じんと熱くなって来た。

秋彦は、奈奈子の乳房を子供のように激しく吸い、顔を下へ下へとさげて行く。奈奈子の軀が回転して、

秋彦が、押し開いてのしかかろうとする。その瞬間をとらえて、由美は、シャッターを押した。気づかれたかと思って、頭をひっ込めたが、少しして顔をあげると、二人は、夢中で、からみ合っている。

また、シャッターを押した。

「何？　今の」

奈奈子の声がしたので、由美は、そのまま、外へ走り出した。

胸がまだ、どきどきしている。

マンションから少し歩いたところで、写真を出してみると、そこには、由美が思わず、顔をそむけてしまうような、二人の姿態が写っていた。

顔も見える。

〈貴重な写真だわ。これから、もし、奈奈子や秋彦から何かあっても、これがあったら、対抗できる〉

由美はそう思う一方、なんとなく悲しくなって来た。

〈あの男と、私は、同じようなことをしたんだわ。愛もなしに……〉

由美は、家に帰ると、食事の仕度をはじめたが、あの激しい二人の姿が、いつまでも眼の奥にやきついて離れなかった。

〈やっぱり、二人は、結婚するのだろうか？〉

次郎は、三日間、仕事の仲間たちと旅行に出ていた。あんなシーンを見たあとだけに、軀が熱くなっていた。

〈彼がいればいいのに〉

と、由美は、しきりに思った。

そのとき電話がかかって来た。

「あ、次郎」

由美が、とびつくように受話器をとると、それは、菱田だった。

「あ、菱田さん」

彼は、しばらく雑談したあと、

「あ、奈奈子さんの結婚相手がわかりましたよ。東南大学の助教授で、見合いだそうです。彼女は、今月一杯で、退職届けを出しました」

と、いった。

彼女は、奔放なブレイガールだったので、結婚相手には、かえって、真面目な男をえらんだのだろう。

電話を切ったあと、由美は、じっと、写真を見つめた。

〈彼女が、銀行をやめたあと、この写真を、相手の男に送りつけたら、どうなるだろう？　きっと、破談になる〉

奈奈子は、結婚がきまったので、最後に、秋彦と楽しんだのだろう。由美は、やっと、復讐の糸口が見つかったと思った。

6

翌日から、由美は、奈奈子を徹底してマークした。彼女が外出着に着がえて出て来たときには、いつも

尾行して、彼女の行き先をつきとめた。

その結果、彼女の婚約者の住所もわかったし、秋彦とは、その後会っていないことも確かめた。

そして、一番大きな発見は、彼女と、支店長が不倫の関係にあることがわかったことだった。

彼女は、支店長を、自分のマンションにつれて来て、秋彦のときと同じように、由美がのぞいているのを知らずに、激しいセックスをしたのだ。

支店長とは、一週間に一度だけ会っているようだった。

由美は、ポラロイドカメラをやめて、音が小さく、ストロボが光らないカメラで、二人を写した。ポラロイドにしたのは、カメラ店に出さずにすむからだったが、一枚しかとれないのが不便だった。

そのため、家で、現像と焼きつけをすることにした。

支店長には、SMの趣味があるらしく、奈奈子に縛られて、鞭打たせたりしている刺激的な写真もとることが出来た。

〈支店長と奈奈子、秋彦は、グルだったのだわ。支店長は、秋彦が、婚約指輪を売ってお金を返すことを、うすうす知りながら、私を、彼に紹介したのだわ。許せない〉

と、由美は思った。

由美は、早速、支店長に、奈奈子とSMごっこをしている写真を送りつけた。

支店長が、その写真を見て驚愕している様子を思い浮かべると、胸がすっとした。

宛名には、ワープロを使い、由美が送り主だとはわからないようにした。

写真を送ってから二日後、支店長が、外に出て来るのを由美は、待ち受けた。

「支店長！」

「あ、由美くん、久しぶりだね。今、どうしているの？」

支店長は、冷やかにいった。

「はい、勤めています。あの、支店長さん、お話があるので、お茶を飲んで下さいませんか？」

由美は、ゆっくりといった。

「そんな暇はないよ。忙しいんだから」

支店長は、ニベもなかった。

「ちょっと待って下さい。私のところへ、変な写真が送られて来たのです。それには、支店長と、奈奈子さんが、裸でベッドにいらっしゃるのが写っていたんです」

由美は、薄笑いを浮かべた。

「なにっ、君、それを見せなさいっ、どういうことなんだ？」

支店長は、うろたえた。

「ですから、お茶でも飲みたいといってるのです」

「じゃ、少しなら」

支店長は、しぶしぶ、由美と、裏通りの喫茶店に入った。

由美は、あらかじめ自分あてに送ったワープロで書いた封筒と、写真を出して見せた。

「こんなっ、これは、君、合成だ！　誰かが、こんな悪質なイタズラをしているのだ」

支店長は、写真をもぎとろうとした。由美は、すばやくひっ込めた。

「そうでしょうか。銀行をやめた私にまで、こんなものを送って来るのだから、銀行のみんなのところへ、送っているのではないでしょうか？」

「なにっ」

支店長の顔から血の気がひいた。

「奈奈子さんと、こういう関係があったとは知りませんでしたわ」

由美は、冷静にいった。

「たのむ。その写真を返してくれ。五万円、いや、十万円払う。君が持っていても、何にもならないものだ」

支店長は、ポケットから財布を出した。

「そんなお金では売りませんわ。こんな珍しいもの、

私にとっては　百万円もの価値がありますもの」

「百万円？　すると、この写真は君が？」

支店長は、はじめて気がついたように、由美の顔を見た。

「いいえ。知りません。私には、この写真が送られて来ただけですわ。でも、そのうち、こんな写真が、行員の方々のところに送られるのではないでしょうか？　それとも、銀行の閉店後に、玄関に貼り出されるかもしれませんね。支店長のお宅にも、配達されたら、大変ですわね」

由美は、すまして、コーヒーを飲んだ。

「君、百万円出す。それでいいだろう？　これは、合成写真なんだ。きっと、顔だけつけかえたものだろう。それでも、こういうものが配られては困るんだ。たのむ。もし、これを撮った人を知ってるのなら、教えてくれ」

支店長は、みにくく頭をさげた。

「私は知りませんわ。それに、お金もいりません。ただ、私の婚約指輪が、どこへ売り払われたか知りたいだけですわ。秋彦さんは、銀行に五百万円返し、奈奈子さんに、お金を払うために、私に下さる指輪をニセモノにすりかえて売り払ったんですわ。支店長も、そのことは、うすうす知っていらっしゃったんでしょう？」

「知らない。そんなことは」

「じゃあ、奈奈子さんにきいて下さい。私に知らせるとはいわずに。わかったら、私の家に電話して下さい。私は、本当のことが知りたいだけですわ」

そういうと、由美は、写真を持って立ち上がった。

「君、待ってくれ」

「お返事があるまで、この写真を、奥さまのところへ送ったりしませんわ。二日間待ちます。多分、この写真は、奈奈子さん自身がとったものですよ。そして、彼女が渡した人物が、私に送って来たのです。では」

由美は、さっさと店を出た。

第十一章　京都への旅

1

支店長は、翌日の夜、由美のところへ電話をかけて来た。

「君、約束の件だけど、指輪のことは、本当に知らないんだ。秋彦くんに直接きいてみるわけにもいかないしね。しかし、秋彦くんは、友人のタレント青山健二が、小林和子という女性と婚約するに当たって、婚約指輪を買う宝石店を紹介したということだから、もしかすると、彼に譲ったのではないかという気がするね。彼は、タレント仲間に、千五百万円する指輪を、八百万円で手に入れたと喜んでいたそうだ。そのタレントの婚約相手は、いいところのお嬢さんで、彼もミエを張る必要があったらしいね」

「わかりました」

由美は、冷静に答えた。支店長は、急に、おどおどしていった。

「ところで、君、これでいいのかな？　写真を返してくれないか。頼むよ。金も渡すから」

「考えておきますわ。私は、銀行をあんなに冷たく追われた日のことを忘れてはいませんわ。私は、あれだけ、勤めを続けさせて欲しいと頼んだのに」

「すまない。あやまるから、とにかく今度のことは……」

支店長がいいかけるのを、強引に電話を切ってしまった。

〈支店長は、奈奈子に、写真のことはいったのだろ

うか？〉

由美は、翌日、タレント名鑑を買って来て、青山健二の住所をたしかめた。そして婚約発表のあった秋頃の週刊誌も調べて、結婚式が、三月五日であることを知った。

記事によると、青山の相手の小林和子という女性の家は、有名な貿易商で、最初、タレントとしては、それほど売れていない青山との結婚に反対だったが、青山が見初めて強引にアタックした末、やっと、許可が出たという話だった。

由美は、小林和子の両親と、すっぱぬきで有名な数社の週刊誌の両方にあてて、青山が渡した指輪は盗品で、それが証拠に保証書がないはずだという手紙を書いた。

手紙はワープロで書き、消印局も、自分の家とは、全く離れた場所にした。

すぐに、この問題は、週刊誌がとりあげ、テレビレポーターが、青山にインタビューした。

青山は、顔を赤くして怒り、

「あれは、友人の南田物産の社長の息子の南田秋彦君から譲り受けたものです。彼が、婚約寸前まで行った女性のために買ったのだが、婚約解消になったので、千五百万円だが八百万でいいといったから、喜んで譲ってもらった」

と、いった。

レポーターは、秋彦のところへ押しかけて話をきいた。せっぱつまった秋彦は、彼の母親が指輪を買った宝石店の名前をいい、盗品でない証拠に、その店で、きいてくれといった。

宝石店では、確かにお売りしましたと答え、この件は、打ち切りになった。

由美は、この騒動をじっとテレビで見つめていた。

彼は、指輪を買った日付けをいい、宝石店も、その日付けを確認したが、そのあと、一週間もたたずに、彼は、それを青山に譲っていたのである。

彼が由美に指輪を渡したのは、それから二日後で

あった。

〈これで、彼が、指輪をニセモノとすりかえて、私に渡したことがはっきりしたわ〉

由美は、唇をかみしめた。

このさわぎで、少なくとも、秋彦の両親は、息子がしたことがわかったはずである。

それから、銀行の人たちも。

2

〈次は奈奈子だわ〉

由美は、奈奈子が銀行をやめたのを見とどけると、支店長と、奈奈子のセックスの写真を奈奈子の婚約者に送りつけた。

もちろん、今度も名前を書かずにである。

そして、ワープロで打った文面には、彼女は、南田秋彦とも関係があり、その写真もあるとつけ加えた。

由美が、新しい会社へ入って二十五日たって、はじめての給料をもらった日、由美の家へ、奈奈子がどなり込んで来た。

「あなたでしょう？　私の婚約者に写真を送りつけたのは。支店長からもきいたわ。一体、どういう気なのォ。人の結婚をつぶして面白いの」

彼女の顔がまっ青なことから、結婚がつぶれたことが、すぐにわかった。

彼女は、酒を飲んでいるようだった。

由美は、抱いていた恨みをすべてぶつけて喋った。

「あなたはお金をとるため、秋彦さんに私と婚約させ、その婚約指輪を、タレントの青山さんに買わせてお金をとったじゃないの。私は、ニセモノの婚約指輪を与えられ、京都で、彼に騙をうばわれたうえ、友人の井上さんまで殺されたのよ。銀行も追われ、婚約を破棄された女の悲しみを、あなたも味わえばいいのよ。私の復讐はこれでやめておくわ。でも、あなたが反省しないのなら、これから一生、あなた

が婚約する人には、あの写真を送りつづけるわ。それでいいの？」

奈奈子は、銀行ではおとなしかった由美の逆襲に驚き、捨てゼリフを残して出て行った。

〈私は、彼女にも、秋彦にも、支店長にも、復讐したんだわ〉

そう思ったが、由美はなんとなく空しかった。

いくら復讐してみても、青春はかえって来ないし、心労で亡くなった母親は生きかえって来ないのだ。

唯一の救いは、次郎だった。

彼は、真面目に、由美との結婚を考えてくれているし、すべての事情も知って力になってくれている。

彼は、二人で京都へ婚約旅行に行き、ホテルで楽しい思い出を作ったあと、井上の死んだ日本旅館へ泊まって、密室の謎を解くといってくれていた。

「君は、京都という言葉をきいただけで、拒否反応を起こすけど、今度楽しい旅行をして、それを塗りかえてしまうんだ。密室の謎が解けても解けなくてもいいじゃないか。京都から帰って来たら、ちゃんと結婚の日どりをきめよう。そして、新婚旅行には、グアム島に行くんだ。僕は、南田秋彦みたいに、大きなダイヤはあげられないけど、自分の給料をためて、心をこめた指輪をあげるよ」

彼は、そういって、由美を、宝石店へ連れて行き、ルビーの指輪を買ってくれた。

「有難う。本当にうれしいわ。それに、初恋の人と結婚できるなんて最高よ」

由美は、眼にいっぱい涙をためていった。

勤め先には、二日間の休暇を貰い、土曜、日曜を入れて、三泊四日の旅にすることにした。

二月の三日。

二人は、東京から新幹線に乗り、京都へ向かった。

「京都へ行くのにこんなに楽しいのはじめてだわ。最初は、次郎にフラれたときだし、二回目は、気づまりだったから」

由美は、窓の外を見ながら、幸せそうに、隣の席

の次郎にいった。
「僕は女の人と旅行するのははじめてだよ」
次郎も楽しそうだった。
二人は、仲よく駅弁をたべ、手を握りあって京都に着いた。
次郎は、予約した河原町通りのホテルに、由美を案内した。
「わァ、きれいな部屋。うれしいわ」
由美は、部屋に案内されると、子供のように、部屋の中を見まわし、手洗の中まで見てまわった。
部屋には、大きなダブルベッドがある。
「さあ、どこへ行こうか？」
次郎は、ガイドブックをひき寄せた。
由美も、そばへ行って一緒に眺めた。

3

「あっ、きょうは、節分だわ。色々なお寺や神社で催しものがあるみたい。それを見て歩きたいわ」
由美がいった。
「そうだね、一年に一回しかないのに、いい日に来ることが出来たね。そうしよう」
二人は、すぐに、タクシーに乗って、まず、廬山寺に行った。
ここは、紫式部の寺としても有名だと、ガイドブックにかいてあった。
狭い境内は、もう一杯の人で、うしろの方の人は、足台を持って来てそれに乗って見ている。
境内の中央に舞台が出ていて、二人が行ったときにはその上で、三匹の鬼が踊っているところだった。
赤、黒、青の鬼は、手に手に、おのや打出の小槌を持って、ぬいぐるみとは思えないほど迫力があった。
鬼は、一旦、寺の中へ入り、そこで踊ってから、また出てくる。
「あっ、おみくじを売ってるわ」

二人は、寺務所へ行って、おみくじや、幸せの矢、お守りなどを買った。

おみくじは、由美が中吉だった。次郎は、どうしても見せない。

「あんまりよくなかったから、捨てるよ」

さすがに次郎は、不気嫌にいった。

〈もしや、凶？〉

と思ったが、由美は気にしないことにした。

中で、お互いに写真をとり合って、二人は外へ出た。

そのあと、由美たちは、吉田神社の節分を見に行った。

バスに乗って、東一条で降りると、吉田山への参道は、露店がびっしり並び、人波で埋まっていた。

二人は、露店を、一軒一軒ひやかし歩き、吉田神社では、豪華賞品のあたる抽選券つき福豆を買ったりして、楽しく見物した。

ホテルへ帰ると、さすがに疲れていた。

でも、快い疲れだった。

「ルームサービスで食事しようか？　外へもう一度出る？」

次郎がきいた。

「ルームサービスがいいわ」

由美は、いきいきと答えた。

この前、秋彦と来たときには、こんなに楽しい気分ではなく、殿様について来た腰元みたいに気をつかったものだと由美は思った。

食事が来るまでの間に、一人ずつ、さっと、風呂に入った。

「食後すぐ、風呂に入るわけにはいかないから、待っている間に、入っておこうよ」

と、次郎がいったからである。

しかし、次郎が風呂からあがり、由美が入ったとたんに、食事が来てしまった。

由美があわてて出てくると、次郎は笑いながら、

「二人分注文しているのに、一人しかいないから、

ボーイさんが変な顔をしてたよ。連れの女性が来ないのかと思ったか、不倫の関係だから、女が風呂場にかくれてるんじゃないかと思ったみたいだ」

と、いった。

「それで、どんな顔してたの？」

「フラれた男みたいに、しょぼんとしてたら、ボーイが、同情したような顔をしてたよ」

「アハハ」

「じゃあ、食べようか？」

和食をとったのだが、色どりがきれいで、味が薄く、いかにも、京都の料理という感じだった。

二人でビールも飲んだ。

〈これが、本当の婚約旅行なんだわ〉

由美は、心の中で思った。

食事がすんでしばらく、二人は、窓から見える夜景を眺めたり、テレビを見たりしていたが、そのうちに、次郎が、由美を、ベッドに誘った。

「ちょっと酔ったみたいだ」

「そんなに飲まなかったのに」

「君に酔ったのかも知れない」

そういうなり、次郎は、由美の顔をひき寄せて、キスをした。

ハミガキ粉の匂いがした。さっき、由美は手洗いに立ったときに、歯をみがいておいたのだが、次郎もみがいたらしい。

「好きだよ」

「私も」

二人は、ときどき唇をはなして、ささやきあった。

「あっ、ネグリジェに着がえないと」

ホテルの浴衣を着ていた由美が、思い出していうと、

「いいよ。この方が脱がせやすくて」

と、次郎がいい、由美の浴衣をくるりとはいで、あらわになった肩を抱きしめ、自分も裸になった。

次郎は、由美の敏感な場所をよく知っていて、首のうしろから背中へさがりながらキスして来る。

由美に躯をたしんとしてわた

次郎が、乳房にキスしているとき、突然、電話のベルが鳴った。

次郎の手がとまる。

「誰だろう？　誰も知らないはずなのに」

次郎は、立って行って、電話に出た。

「もしもし、もしもし」

そのうちに、ブツッと切れる音が、由美にも聞こえた。

「間違い電話だよ」

次郎が、もう一度、由美の躯に触れたとき、また、電話が鳴った。

「放っとこうよ」

しかし、ベルはやまない。ベルの音で集中できないので、今度は、由美が出たが、電話は切れてしまった。

「無言の電話よ。気味が悪いわ」

二人は、不安そうに、顔を見合わせた。

4

無言の電話に怯えて、由美たちは、とうとう楽しい夜を過ごすことが出来なかった。

やっとムードが盛り上がって来たかと思うと、ベルが鳴るからである。

四度目の無言の電話が鳴ったとき、由美は、たまりかねて、交換台に電話した。

「さっきから、たびたび、間違い電話がかかるんですけど、相手はどんな人ですか？」

交換手は調べてみるといって、しばらく待たせてから、

「その電話は、こちらの交換台を通っておりません。多分、館内電話だと思います」

と、いった。

館内電話ということは、相手が、このホテルにいるということになる。

由美は、軀がぞくっとした。
「じゃあ、何号室からかかってるんでしょうか？教えて下さい。夜中に迷惑なんですよ」
由美は、交換手に激しくいった。
「館内電話は、お調べ出来ません。ロビーなどにもございますし、直通なものですから」
仕方なく、由美は、受話器を置いた。
由美から話をきいて、次郎も、
「気味が悪いね」
と、眉をひそめた。
「一体誰なのかしら？」
次郎と一緒にベッドに入って、由美がいった。
「南田秋彦か、奈奈子、支店長のだれかが、攻勢に出るため、我々を尾けて来ているのかな？」
次郎は、由美の方を向いて、キスをしていった。
「まさか、次郎に彼女がいて、尾けて来ているんじゃないでしょうね？」
由美は、その方が心配だった。
「馬鹿なこといわないでくれよ。折角こうして婚約旅行に来てるのに」
次郎は、気分をこわして、横をむいてしまった。
「ごめんなさい。でも、心配なの。京都に来るといつもなにかあるから、ノイローゼになってるの」
由美は、次郎の肩にすがりついた。
「さあ、また明日があるから、今日は寝よう。女と違って、男は、こう何度もムードをこわされると、うまくいかなくなるんだよ」
二人は抱き合って眠った。
由美は、抱き合っているだけで満足だった。
二人がおとなしく眠りにつくと、不思議に、電話のベルも鳴らなかった。
朝方、由美は、夢うつつの中で、風が吹き込んでくる感じがして、ふとんをかき寄せようとしたが、ふとんが手にさわらない。
それで目を覚ますと、次郎が、ふとんをはいで起き上がっていた。

由美も起き上がろうとして、はじめて、下半身に何もつけていないことに気づいた。

「あっ」

次郎を見ると、彼は、裸だった。彼が、由美の下着をとり去ってしまったのだ。

「由美！」

次郎は、低く呼ぶと、上からおおいかぶさって来た。唇と唇が合う。

彼は、キスをしたままで、由美のネグリジェを乳房の上まで、たくしあげた。

「きれいだ」

唇をはなして、次郎が由美の軀を眺め、あっという間に強引に押し入って来た。

由美は、枕を抱えてあえいだ。バスに乗っているときのように、肩ががくんがくんと揺れる。

はじめは、次郎のなすがままに揺れていた由美の軀が、あるとき突然、彼をしっかりと捕えはじめた。今度は、次郎が呻く番だった。

由美の軀の一点が、次郎をしっかりと捕え、思うさまふりまわしはじめた。

麻酔のかかったときのように、意識がぼんやりした中で、由美は、自分が別のけものになったことを感じていた。

次郎が、とうとう耐え切れなくなって、腰をふるわせ、由美の上に崩れた。

そのままの恰好で、由美は、そのあとも、しばらく、リズムを繰り返した。

切り離された機関車が、客車をふりすてて走っている感じだった。

やっと、由美は、うごきをとめ、大きく息を吐いた。

余震のように、ときどき、軀が、びくんびくんと動く。

「すごいね、君」

死んだようになっていた次郎が、寝がえりを打って、由美の傍に寝そべった。

5

ルームサービスで運び込まれた朝食を少しだけとったあと、二人は、二時間ほど、裸で抱きあって眠った。

眼がさめたのは、九時だった。

由美は、次郎がまだ眠っているのを見て、ほほ笑んだ。

けだるい快さが、軀全体を包んでいた。昆布を水につけたように、かさかさしていた軀のすみずみまで水分がゆき渡った感じだった。

まぶたまで、水分でふくらんでいるような気がする。

由美は、そっとベッドをすべり出て、手洗いに行った。

下半身まで、栄養クリームをつけたように、ぬめっとしている。

熱いシャワーを浴び、歯をみがいて戻ってくると、次郎が起き上がって、ドアの下から投げ入れられた新聞を見ていた。

彼は、由美を見ると、にっこりした。柔らかな笑顔だった。

彼も、入れかわりに、バスルームに行き、由美は、丹念に化粧をして、髪を整えた。

「昼の一時から、あの旅館にチェックインできるから、それまで、京都の街を散歩しようか？　どこがいい？」

「どこでもいいわ」

二人は、ホテルをチェックアウトし、河原町通りを歩いた。

まだ、ほとんどの店は、開店前だったが、由美には、何を見ても新鮮に見えた。

三条河原町から、寺町に入る道を歩き、やがて、二人は、変わった喫茶店を見つけた。

格子の入ったいかにも京都らしい喫茶店である。

二人は、中ほどまで来て、足を止めた。
由美は、京都の地図とガイドブックを広げた。
「あら、ここから錦市場って近いんですね。行ってみたいわ」
「早くも所帯じみたね」
次郎が笑った。しかし、それは満足そうな笑いだった。
「違うわ。見て歩くのが楽しいからだわ。前からあこがれてたの」
そこから、錦市場のある錦小路は歩いてすぐだった。
錦小路は、四条通りの北を、並行して東西に通じる小路である。とくに、寺町通りと、烏丸通りの間は、清冽な地下水が湧出するのを利用して、江戸時代から魚市場が発達したのだが、今は、魚市場でなく、あらゆる日用品や食料品が並んでいて、京都の名物の一つになっている。
二人は、きょろきょろしながら、両側の店を見て

「京都って、大体、もの静かで、人たちだって、大きな声では喋らないような気がするけど、ここは、活気があるなあ」
「料亭で使う高価な珍しいものや、季節はずれの野菜などでも、ここへ来ればあるという話だわ。料亭で頼めば、冬にだって、松茸が入るというし……」
すべての品物が新鮮で安かった。
「東京まで買って帰れないのが残念だわ。ほら、もう、早掘りのたけのこもあるし、おひたしにする菜の花も売ってるわ」
由美は次郎と新婚生活をするときのことを考え、はしゃいでいた。
ずっと歩いて、烏丸近くまで来ると、二人は、地下鉄で、京都駅まで行った。
地下街には、ポルタという商店街と、食べものの店がある。
「ポルタで食事をして、そのあと旅館に入れば、丁

度いいね」

地下街は、修学旅行の生徒や観光客、そして、地元の若者たちで賑わっていた。

ウィンドウに飾られている洋服なども、若者むきのものが多かった。

二人は、京料理の店へ入って、松花堂弁当を注文した。

「さあ、いよいよ、あの旅館へ行くんだね。密室の謎が解けるだろうか？」

次郎が、吸物に手をつけながらいった。

「それより、あの旅館の人、私が行ったら、嫌な顔をするんじゃないかしら？　前に、私たち調べられたりしたし……」

由美は、それが、心配だった。

「大丈夫だよ。むこうも商売なんだから」

「それに、前には、南田さんと行って、今度、次郎と一緒だったら、毎回、男が変わってふしだらな女だと思われないかしら？」

由美は、女なので、色々、思い悩んだ。

「そうだと思ったので、二人で、別々に部屋をとったよ。僕は、秋彦と君が泊まった部屋をとり、君には、うちの銀行の女行員にたのんで、井上さんが泊まった部屋をとっておいたから」

「まあ、そこまで」

由美は、次郎の心づかいがうれしかったが、別々に泊まるのは、ちょっと淋しかった。その気配がわかったらしく、次郎は、にっこりして、

「大丈夫だよ。夜はそっちで泊まるし、昼間も、そっと部屋同士行き来したらいいんだから。密室を調べるうえでも、両方の部屋をとった方がいいと思ったんだ」

と、いった。

6

食事のあと、由美は、次郎と別々に、旅館に入っ

た

受付けの女性は、由美を覚えていたらしく、はっとしたような顔をしたが、事務的に、前に井上の泊まった部屋に案内した。

殺人事件が起こった部屋なので、閉鎖しているか、中の模様を変えているかと思ったが、もとのままだった。

畳だけが新しいのは、あのあと変えたのかも知れない。

女中が運んで来たお茶を飲みながら、座っていると、やはり、ちょっと怖かった。

〈この部屋で、井上さんは殺されたんだわ〉

彼が死んだのは、由美に、ダイヤの指輪が、ニセモノであることを知らせようとしたからである。

それを考えると、由美は、井上に申しわけないと思った。

〈井上さん、絶対、密室の謎を解いて、無念をはらしますわ〉

由美は、心の中で誓った

由美は、次郎の部屋と接している壁をコンコンと叩いてみた。しばらくして、コンコンと、反応があった。

〈次郎が答えてくれてるんだわ〉

由美は、ほっとした。いざとなれば、この壁を叩けば、次郎がとんで来てくれることがわかったからである。

座敷には、縁側がついていて、庭との間には、サッシのガラス戸が閉まっている。雨戸はなくて、二重のカーテンだった。

旅館の中は、しーんと静まりかえっている。

〈一人だと退屈なものだわ。次郎と一緒だと、あっという間に時間がたってしまうのに〉

そう思っていると、ノックの音がした。

ぎくっとして、ドアのそばまで行って、

「はい。どなた？」

と、きくと、次郎の声がした。

急いであけると、次郎がするりと入って来た。
「一人だとつまらないね」
次郎も同じようなことをいった。
「これが、井上さんの泊まった部屋なんだね」
由美は、事件のときに見ているけど、彼は、はじめてなので、珍しそうに、部屋の中を見まわしている。
「庭からは、このサッシのガラス戸をあけないと出入り出来ないんだね」
彼は、ガラス戸を動かしてみたり、カギを調べたりしている。
「それから、入口しか、出入口はないわ」
由美がいうと、次郎は、部屋の入口に行った。
和風の格子戸が二枚はまっていて、まん中で、さし込み錠がしまるようになっている。
中に入ると、玄関のタタキがあって、二畳ほどの玄関の間があり、座敷との境にはふすまがしまっている。
「ふすまにも、内側から、掛金がかけられるようになっているね。事件のあったときには、この掛金もかかっていたのかな？」
「それは、わからないけど、多分、かかっていたのじゃないかしら？」
由美は、事件のとき、夢中だったので、よくおぼえてなかったが、警察が調べて密室だったというのだから、かかっていたのだろう。
「犯人が入ることは、簡単だと思うんだ。話があると口実を設けて、井上さんにあけさせて、中へ入ればいいわけだから」
次郎は、考えながらいった。
「しかし、井上さんを殺して出るとき、どこから出たんだろう？　どこから出ても、外から、戸締りは出来ない」
「抜け穴はないのかしら？　もともとは、あっちの部屋と一つだったのを、仕切って小さくしたとかで……」

由美は、床の間の掛軸の裏や、扉の裏を見たが、抜け穴は見つからなかった。

「抜け穴があったら、事件のときに、旅館の人が警察にいうんじゃないかな」

次郎は、笑いながらいった。まるで、時代劇のような抜け穴なんて、ないと思っている表情だった。

「絶対いわないと思うわ。だって、そんなことがわかったら、旅館の信用ががた落ちだもの。人の部屋から出入りが出来るなんて」

由美は、むきになっていった。

「そうだね。じゃあ、どんな方法かな」

次郎が、あたりを見まわしたとき、電話のベルが鳴った。

「食事の時間をきいてきたのかな？」

次郎が気軽に電話に出たが、相手は、しばらく黙ったあと、ガチャリと電話を切った。

「また、無言の電話？」

由美がおびえた。

その時、また、ベルが鳴った

第十二章　迷路

1

「またか」

次郎がいい、今度は、由美が、電話口に出た。しかし、それは、旅館からの連絡だった。

「何だったの？」

「お風呂に入って下さいって」

「そうだ。ここの旅館には、自慢の岩風呂があるんだったね」

次郎が、パンフレットの写真を出していった。

前に来たときは、とうとう、その岩風呂に入れなかったのを由美も思い出した。

部屋にも小さなバスルームがあるのだが、二人で入っていて、ルーム係に見られても恥ずかしいので、由美は、岩風呂に入ることにした。

二人は、それぞれ、丹前に着かえ、手拭いを手にして部屋を出た。

廊下で一緒になって、階段を下へおりて行った。

古都京都の旅館らしく、廊下は、くねくねと、折れ曲がって、長く続いている。古い建物に、必要に応じて建て増していくので、こうなるのだろう。

思わぬところから、女中が現われたりする。

岩風呂は、新しく作られたもので、男女に分かれている。

「あとで、お部屋で会いましょう」

と、由美はいい、女と書かれたドアをあけて中に入った。

脱衣室には二人分の丹前が脱いであった。

裸になって、ガラス戸を開けると、ふわっと暖かいお湯の香りが、彼女を包む。

大きな自然石を使って、岩のように見せ、お湯は、滝のように、上から、あふれ落ちてくる。

女子大生のような若い女性が二人、先に入っていた。

由美も、湯舟に軀を沈めた。

前面が、大きな畳りガラスになっていて、そのむこうは、中庭にでもなっているのか、松の枝が、黒いシルエットのように、見えていた。

由美は、眼を閉じて、次郎のことや、井上のことを考えた。

若い二人の話し声が、ぼんやりと聞こえてくる。明日、どこを見てまわろうかという話をしている。

彼女たちは、すぐ、あがって行った。

岩風呂に、一人だけになると、隣の男風呂に合図をしてみたくなったが、むこうに、他の客がいると、はしたなく思われると思って、我慢した。

少し長く入りすぎて、湯からあがると、軀がほてっていた。

脱衣室で、丹前を着ながら見ると、中庭に出るドアが、眼についた。

〈開けたら、必ず閉めて下さい〉

と、貼り紙がしてある。

由美は、好奇心から、ドアをあけてみた。

思った通り、中庭への出口で、庭下駄がおいてあった。

それを突っかけて、庭へ出てみた。軀があついので、冷たい空気が心地良い。

狭い庭だが、小さな池もあって、緋鯉が、からだをひねるようにして、泳いでいる。

男風呂からも、この中庭に出られるようになっているだろうと思い、由美は、しばらく屈んで、池の鯉を眺めていたが、次郎は出て来なかった。

少し寒くなって来たので、戻ろうとすると、白い

猫が、由美の傍をすり抜けて行った。

「あらっ」

由美は、声をあげた。その猫が、どこから出て来たのだろうと思ったからである。

まさか、由美と同じように、岩風呂の脱衣室から出て来たとは思えなかった。第一、このドアは、出るとき、閉めて来たはずである。

由美は、急に興味を感じて、その猫のあとをつけてみる気になった。

猫は、このあたりが、自分の縄張りとでも思っているのか、ゆっくりと、歩いて行く。

中庭は、男風呂の方にも、伸びていて、曇りガラスの向こうからは、湯の流れる音や、笑い声が聞こえてくる。

どうやら、男風呂の方は、五、六人の団体客が入っているようだった。

中庭の終わったところに、折戸があって、白い猫は、その折戸の下を、くぐって、消えてしまった。

2

由美は、折戸をあけてみた。

低いモーターの唸る音がきこえた。それが、最初は、何なのかわからなかったが、どうやら、階下のお湯を、階上の各客室に汲み上げて送っているのだと見当がついた。

眼の前に、物置きのような建物があって、モーターの音は、そこから聞こえてくる。

ドアが、少しあいているのは、猫が、その隙間から、入り込んだのだろう。

近づいて、ドアをあけてみると、思った通り、モーターが据えつけてあって、唸りをあげ、回転していた。

だが、あの白い猫は、見えなかった。

〈どこへ、消えてしまったのかしら?〉

妙に気になって、由美は、うす暗いエンジン室を

見まわした。

汲み上げたお湯を、各室に送る太いチューブが、奥に向かって伸びているのが見えた。

由美も、その鉛管に沿って、奥へ進んでみた。

白いテープの巻かれた鉛管から、ときどき、ぽたぽたと、水滴が落ちていたりする。

天井には、ところどころに、裸電球がついていた。

これは、旅館の楽屋なのだと思った。

場所は、どこなのか、見当がつかない。

天井の低い、トンネルのような通路である。もともとは、お湯を通すための通路だったのだろう。

火事のときの非常口だったのか、それとも、旅館にする前、ここに住んでいた人が、趣味でこしらえた秘密の通路だったのかもしれない。あとになってから、それへ、お湯を送る鉛管を通したのだろう。

人間一人が、やっと通れる狭さである。むっと暑いのは、お湯が通っているからに違いない。

由美は、子供にかえって、探険して遊んでいるような気分になっていた。

突き当たると、今度は、階段になっていた。

さっきの猫は、階段の下にうずくまっていた。あたたかいので、ここを住処にしているのだろう。

由美が近づくと、猫は、はじかれたように、とび上がって、狭い階段を駈けのぼっていった。

お湯を送る管も、階段に沿って上へ伸びている。

階段のところどころに、小さな、あかり取りの窓がついているのだが、それでも、うす暗かった。

白猫は、由美を誘うように、どんどん階段をのぼっていく。

板張りの階段は、由美がのぼると、足元で、どんどんと音をたてた。かなり、古いものらしかった。

もし、今、火事になったら、逃げられないだろう。

あのモーターのあったところまで逃げるには、時間がかかるし、狭い階段と通路では、たちまち、煙に巻かれてしまうにちがいない。

それに、こんなところで死んだら、なかなか発見

されないだろう。

由美は、ふと、おそろしくなって、足がふるえて来た。

しかし、その一方で、これが、密室の謎を解くカギではないかとも思った。戦災で焼けて、新しく建った東京の旅館や、ホテルには、こんな秘密の通路はないだろうが、古いものが、そのまま残っている京都では、こんな隠された通路がある。

〈井上さんを殺した犯人は、この通路を使ったのかも知れない〉

そう考えると、勇気が湧いてきた。

由美は、覚悟をきめて、階段を、さらにあがって行った。

狭い踊り場があって、そこで、送湯管は、分岐している。

上の客室に、お湯を送るためだろう。

この旅館は、表と裏と、平行した別の道路に面して、裏の方は、一階分、下がっている。つまり、表通りでは一階なのが、裏の通りから見ると二階なのである。

由美たちの部屋は、表通りに面していた。

狭い階段をのぼり切ったところに、ドアがあったが、むこうからカギがかかっているとみえてあかない。ドアに、耳を押しつけてみると、かすかに、人の話し声や、物音がする。

外に出るには、もとへ戻るより仕方がないと思ったが、気がつくと、猫がいなくなっている。

階段をあがって来るとき、猫が、あと戻りしていたから、どこからか外へ出てしまったのだろう。

由美は、踊り場に立って、まわりを見まわした。

ドアは、ここもカギがかかっていてあけることが出来ない。ほかは、板張りの壁である。それを、由美は、手でさわってみた。

忍者屋敷だと、板張りの壁の一部が、くるりと回転して、外へ出られるのだが、ここは、そんな感じではなかった。

たが、まんべんなくおされて、押していると板の一部が、反対側に、簡単に曲がってしまった。

何とか、躯がくぐれるくらいの空間が出来た。

ただ、暗くて、むこう側に、何があるのかわからない。

眼をこらしていると、二つの光る眼が、こちらを見つめているのに気がついた。あの白猫が、暗がりの中で、うずくまって、こちらを見つめているのである。

次の瞬間、猫は、跳躍して、由美の横をすり抜けて行った。

3

眼が慣れてくると、少しずつ、物が見えてきた。

ふとんが積んであるのが見えた。その上に枕がのっている。

〈押入れだわ！〉

と思った。

いつの間にか、風呂場のある裏の一階下から表通りの上の階に出てしまっているのだ。

由美は、息をころして、じっと耳をすませた。

一体、ここは、どこの部屋なのだろう。

人がいないといいけど、もし、客室に人がいたら、押入れから出たら、それこそ、大さわぎになるだろう。

由美は、頭の中で、自分たちの部屋のある階の配置を考えてみた。

廊下があって、由美の部屋は、確か、一番突きあたりから二番目だった。突きあたりが、次郎の部屋になっている。

モーター室を通り抜けて、秘密の通路を、端まで歩いて行き、そこから、階段をあがって来たのである。

すると、この押入れは、由美の部屋ではないのか？

自信はない。あかり取りの小さな窓はない。うす暗い通路を歩き、階段をあがって来たので、はっきり、位置がわからないのである。

しかし、もし、彼女の部屋なら、井上が、密室で殺された謎が解けるのだ。

由美は、覚悟をきめ、抜けかかった釘をとり、四つん這いになって、押入れに入って行き、ふすまをあけた。

眼の前が、急にあかるくなって、由美は、眼をばちばちさせた。

眼が慣れると、とっさに、部屋のまん中に置かれたテーブルを見た。

自分の部屋なら、テーブルの上に、化粧道具を入れたヴィトンのセカンドバッグが置いてあるはずだったからである。

〈あった！〉

と思ったとたん、由美は、急に、ほっとして、テーブルの前に、座り込んでしまった。

急にベルが鳴った。

はっとして、床の間の電話に眼をやったが、鳴ったのは、入口のドアのチャイムだった。

「誰？」

ときくと、

「僕」

と、次郎の声がした。

ほっとして、由美は、入口のドアをあけた。次郎は、部屋に入ってくると、変な顔をした。

「どうしたの？　そんな恰好をして」

「何が？」

「下駄なんか、持ってるからさ」

「あっ」

由美は、いつの間にか、庭下駄を、手にぶらさげていたのだ。階段をあがるとき、音がしてはまずいと思って、はいていた庭下駄を脱いで持っていたのを、すっかり忘れてしまっていたのである。

「ああ、この下駄？」

「それ、どこの？」
「それが、密室の謎を解いてくれたの」
由美は、秘密の通路と、階段のことを、次郎に話した。
「へえ……」
と、次郎は、びっくりしてきいていたが、それでも、まだ、半信半疑の表情だった。
無理もなかった。
「一緒に、この庭下駄を、返しに行ってくれない？」
「いいよ。僕も、秘密の通路を見たいからね」
次郎も、勢いよくいった。
二人は、押入れにもぐりこんだ。
こちらからみると、羽目板である。
それがめくれあがっている。
由美が、先に、その羽目板をおし開いて反対側に抜け出た。
狭い階段を、今度は、二人でおりていった。
由美は、次郎のたくましい軀に、しがみつくようにしていた。
「これで、事件は、解決したね」
次郎が、由美をささえている手に、力を入れた。

4

秋彦と婚約旅行に来たとき、井上が殺された密室には、地下に抜け穴があったことがわかった。
「でも、井上さんを殺したのが、秋彦だって、警察が認めてくれるかしら？　誰でも、地下道を通れば、密室殺人は出来るわ。私が疑われるかも知れない。どうしよう？」
由美は、次郎の顔を見た。
「そうだね。まず、彼でないと出来ないということを証明しないとね。この前のとき、彼は岩風呂へ行ったの？」
「私も、彼も、岩風呂へは行かなかったわ。それな

のに、どうして、この地下道を知ったのかしら?」
「多分、前に来たことがあるんだろうね」
次郎は、宿の女中にチップを渡し、前に、秋彦が来たことがないかどうか写真を見せて調べて貰った。
その結果、秋彦は、学生時代に、三人連れで、この宿の今、由美が泊まっている部屋に泊まったことがわかった。
彼等は、一週間も滞在したという。
「あとの二人は、私をレイプした江木と加川だわ。そのとき、この抜け穴を見つけたのね」
由美が、唇を噛んだ。
「警察へ行って話をしよう! わかってくれなくてもいいじゃないか」
次郎がいい、二人は、京都府警本部へ行った。
前に、事件を担当した狩矢警部がいて、話をきいてくれた。
「なるほど。地下道があったんですか。こちらは、密室殺人なら、カギにトリックがあるのだと思って随分調べたんですが、わからなかったのです」
彼は、由美のいうことを信じてくれたようだった。
「今日はもう夕方なので、明朝、地下道の指紋などを調べてみましょう。それから、昔、南田秋彦さんが一緒に行ったという友人は、どこにいますか?」
由美は、一人は殺され、もう一人の江木は、東京にいるといった。
「江木さんにきいて下されば、そのときのことはわかると思います」
狩矢は、うなずいた。明日、旅館に来る前に、色々、調べておくことがあるのだろう。
旅館に戻る道で、次郎が、ふと立ち止まった。
「今晩、あの部屋で眠らないで、僕の部屋へおいでよ。あの部屋は、不安だよ」
「ええ。でも、旅館の人が変に思わない?」
由美は、顔をあからめながらいった。
「大丈夫だよ。変に思われたっていいじゃないか」
二人は、別々に旅館に戻り、いったんは、自分の

部屋に入った。

夕食が出る。京都らしい色どりのきれいな野菜のたき合わせや、刺身、酢の物が膳に並んでいた。

一人で食事をするのは、やっぱりつまらなかった。

食事が終わると、女中が、ふとんを敷きに来た。

「さっき、お客さんのことをきいている女の人がいましたよ。お友だちですか？」

女中が、何気なくいった。

「えっ、どんな人？」

女中がいった顔かたちや背の高さは、奈奈子に似ていた。

「その人、どこに泊まってるんですか？」

「岩風呂の近くの旧館の方に泊まってはるみたいでした。お会いになりたいどすか？」

「いいえ、結構です」

ふとんが敷けて女中が、出て行ったあと、由美は、不安な気持ちになった。

〈奈奈子は、何のために、私を尾けて来ているのだろうか？〉

5

由美は、落ち着かなくなって、次郎の部屋へ行った。話をきくと、次郎は、

「二人が、一緒に泊まっている写真でも撮ろうと思っているんじゃないかな。結婚するんだから、別に構わないけど、秋彦と君が婚約する前から、こうして、僕とつき合っていたといわれるのもシャクだから、今夜は、別々に眠ろう。僕が、むこうの部屋に行って眠るよ。君は、ここにいる方がいい」

と、いった。

次郎と離ればなれになるのは残念だったが、由美は、その言葉に従った。

テレビを見たり、週刊誌を読んだりして、由美が、眠りについたのは、十時すぎだった。

どのくらい眠っただろうか。夢うつつの中で、パ

トカーのサイレンをきき、目が覚めると、廊下がさわがしくなっていた。ネグリジェのまま、戸をあけると、刑事たちが、隣の部屋に出入りしていた。

「どうしたんですか？」

由美が、刑事の一人をつかまえてきくと、

「隣の部屋に泊まっていた方が、刺されて、重傷です」

と、いう。

「次郎！」

由美は、思わず、刑事たちをかきわけて、部屋にとび込んで行った。

そして、思わず、棒立ちになった。

部屋の中には、血がとび散っていて、次郎が、意識を失って倒れていた。

そのそばにいた狩矢が、由美を見た。

「あっ、警部さん」

「あ、あなたでしたか」

狩矢は、次郎が10番[illegible]て、女に刺された、女は、地下道を通って逃げたといったあと、電話が切れたのだと説明した。

「助かるんでしょうか？」

由美は、次郎にしがみつくようにして、顔をのぞき込んだ。

「次郎っ、次郎さん！」

次郎は、うっすらと眼をあけ、

「奈奈子……だ。早く……つかまえて……」

と、切れぎれにいった。

由美は、奈奈子らしい女が、この旅館に泊まっていて、女中に、こちらの様子をきいていたと話した。

「多分、私を殺そうとしたんですわ。彼が、部屋をかわってくれたんです」

それをきくと、狩矢は、部下の刑事に、旅館の中を調べ、奈奈子を逃がさないようにしろと命令した。

次郎は、救急車で運ばれて行った。

由美も、付き添いたかったが、狩矢が、捜査のため残って欲しいといった。

そして、由美と一緒に押入れから、地下道にもぐりはじめた。

懐中電灯の光に照らされた地下道の中は、血がしたたっていた。

「返り血だな、それと、本人も怪我をしているらしい」

鑑識が、あとから入って来て、血痕と、指紋を調べた。

「警部、血のついた指紋が、いくつも採取できました」

「よし。それが、犯人のだ。あとで照合する」

二人は、地下道を、どんどん下って行った。

血痕は、わずかながら旧館まで続いて、途中で消えた。

由美が、さっきの女中に、奈奈子らしい女性の泊まっている部屋をきいた。

彼女は、別名で泊まっていたが、ノックをしても出ない。狩矢の命令で、女中が、カギをあけた。

それに、そっけない奈奈子だった。

「あっ」

といってふりむいた彼女は、血だらけの腕をおさえてうずくまっていた。

狩矢が、救急隊員を呼んで、とりあえず手当てをし、警察に連行した。

由美は、すぐに、次郎の運ばれた病院に駈けつけた。

彼は、丁度、手術室から病室に運ばれたところで、麻酔のせいか、昏々と眠っていた。

「次郎さん、次郎さーん」

由美は、彼の枕もとで、涙を流した。

〈彼のおみくじが凶だったのは、このことだったのだわ〉

回診に来た医者の話では、彼は、胸や腕、脚、肩と七カ所も切られていたという。

「助かるんでしょうか？」

由美は、医者の顔を見つめた。

「出血が多かったので心配しましたが、多分、大丈夫だと思いますよ。幸い胸の傷は浅く、腕や脚が、深く刺されていますが、今、血管をつなぎましたからね。朝には、喋れるようになると思います」
「有難うございます」
由美は、何度も頭をさげた。
やがて、府警本部から、橋口という警部補がやって来た。
「眠っているところを襲われたので、かわすひまがなかったんですね。でも、犯人は、眠っているのが、あなたでなく、男の人だったので、驚いたすきに、彼が、起き上がって、刃物をとりあげたんですね。彼女は、とられまいとして争って、手に、相当、傷を負っています」
「彼女は、私を殺したいほど恨んでいたんですか？」
由美は、橋口をみた。
「逆恨みしていたんでしょうね。それに、まだ、充分調べは進んでいませんが、彼女は、本当は、南田秋彦を愛していたんじゃありませんか？　地下道からは、彼の指紋も出ましたよ」
「本当ですか？」
由美は、顔を輝かせた。

6

江木の証言で、南田秋彦は、過去にあの旅館に泊まり、地下道を発見したことがわかった。それを逆手にとって、彼は、地下道の指紋は、その頃ついたものだといい張った。
しかし、旅館では、事件の直前に地下道を塗りかえていて、まだ、かわき切っていない間に、彼が指紋をつけたことがわかった。
奈奈子も、最初は、彼のことは、何もいわなかったが、秋彦が、今回の事件は、奈奈子が勝手にやったことで、自分とは一切関係ないといい、前の件上

を知ってからは、すべてを話すようになった。

地下道があることは、事件よりずっと前に彼にきいていたという。

事件後、そのことを彼に問いただしたとき、彼は、黙って金を渡し、このことをいうなと口どめしたという話だった。

もう一人の男も、井上殺しのことをきいたために、殺されたのだろうといった。

奈奈子はダイヤの指輪についても、秋彦が、ニセモノとすりかえて売ったことを証言した。

そのことから、井上殺しの動機がわかり、彼は、警察にきびしく調べられることになった。

坊っちゃん育ちの彼は、最初は虚勢を張っていたが、プロの捜査官の調べには、とうとう抗し切れず、すべてを自白した。

彼は、由美の推察通り、遊ぶ金につまって、由美と婚約し、母親に買わせたダイヤの婚約指輪をニセ

その指輪は、丁度婚約するタレントに売り、借金の返済と、奈奈子への手切金に使った。

学生時代の仲間に、京都の宿で、彼女を襲わせ、それを理由に婚約を解消し、指輪をとりあげて捨て、親には、こちらが破談にしたのだから、指輪だけは渡したというつもりだった。

ところが、旅館に泊まっているとき、隣の部屋の井上からのメモを、手違いで女中から渡された。

それには、ダイヤが最初からニセモノであったことが書かれていた。

こんなことが公になると大変だとあわてた彼は、由美が眠ったあと、井上の部屋に話に行った。

最初は、金で話をつけようと思ったが、井上は、金なぞいらないといい、由美にすべてを話して別れるようにいった。

彼が、由美を愛していることを感じた秋彦は、彼の口から、自分の両親や、世間にこのことが知れる

と困ると思って、彼を殺した。

そして、学生時代に知っていた地下道から逃げて、何食わぬ顔で、由美の部屋に帰った。

翌日、由美を襲うはずになっていた加川は、一日早く、京都に来ていて、井上を殺したのは、秋彦だと感じ、彼をおどかした。加川は、会社での立場をよくするために、秋彦の弱味をにぎっておきたいだけだったが、秋彦はそれが我慢できなかった。秋彦は、彼も殺した。

そのあと、奈奈子にも、

「あの旅館には、地下道があるって、前にきいたわ、それを使ってあなたが殺したんじゃない？」

と、いわれたが、そんなことはないと、金を渡して話をつけた。

彼女は、利口な女だし、秋彦を愛していたので、口外するはずはないと思っていたという。

由美は、毎日、次郎の病院に通った。

若いだけに、彼も、日ましによくなっていった。

「本当にごめんなさい。私のかわりに、あなたが、こんな大怪我をして」

由美があやまると、彼は、首をふった。

「あれで、一気に事件のことが明るみに出たのだからよかったよ。それに、もし、部屋をかわってなくて、君が殺されたら、僕が疑われるところだったよ。君と僕とは知り合いだし、あの地下道にも、指紋が残っていたのだから、それを思うと、ぞっとするなあ」

「でも、びっくりしたでしょう？　彼女に襲われたときには」

由美が、彼の顔を見つめながらいった。

「ちょうど眠り込んだときだったからね。僕はふとんをかぶって寝ていたから、むこうも気づかなかったんだろうね。最初の一撃で、目を覚ましたんだけど、そのときは、刺されたことに気がつかず、君が入って来たんだと、ぼんやり思っていたんだ。香水の匂いがして、女だということはわかったんだけど。

次の瞬間、はっとして、軀を起こしたら、むこうも、びっくりしたらしい。メチャメチャに刺してくるんだ。あとは夢中だったなあ」

「でもよかったわ、助かって」

「勤め先でも、びっくりしてたみたいだ。京都へ三日間だけ行くと休暇をとったんだからね」

「クビにならないかしら？」

由美は、心配そうにいった。

「大丈夫だよ。普段よく働いているから」

そういうと、彼は、怪我をしてない方の手で、由美を引き寄せ、キスをした。

熱いキスだった。

第十三章　新婚旅行

1

由美は、京都駅に近いホテルに泊まって、次郎の病院に通った。

「日本旅館には、どこにも地下道があるような気がしてノイローゼになってしまったの」

と、由美は、次郎に報告した。

南田物産の社長の息子が、二人も人を殺し、婚約者の指輪とニセモノとすりかえて売り払っていたというニュースは、連日、大々的に報じられた。

由美には、今までとは一転して、世間から同情が集まった。

ある日、秋彦の両親が、由美をホテルまで訪ねて来た。

ロビーから電話がかかって来たとき、由美は驚くと同時に、二人には会いたくないと思った。

南田家から婚約破棄をいわれたときの悲しさとショックを思い出したくなかったし、今は、秋彦を犯人として告発している身である。

それで断ったのだが、二人は、ずっとロビーで待っていたらしい。

由美が、一時間後に、次郎のところに行こうと思ってロビーにおりたとき、声をかけられた。

仕方なく、ロビーの隅の喫茶コーナーに座った。

「由美さん、本当にごめんなさい。秋彦が、あんなことをしていたとは知らずに、あなたを責めたりして」

「一人息子なので、小さいときから甘やかして育てて、欲しいものは、なんでも与えました。それが悪かったのだと思っています。

でも、ここ数年は、女や遊びにばかり、お金をつぎ込むようになって来たので、心配した主人が、お金を余分に渡さないようにしたのです。それが裏目に出て……」

華子は、夫が金さえ渡していたらというように、南田の顔を見つめた。

南田は、うつむいているだけだった。

華子は続けた。

「私は、秋彦が、あなたを連れて来て、結婚したいといったとき、本当にほっとしたんですよ。とうとう、結婚して落ち着いてくれるんだと思って。ですから、秋彦から、あなたに男がいるとか、渡した指輪がニセモノになっていたなどということをきいたときには、本当にがっかりして、ショックを受けました。それで、あなたにも、ひどいことをいったかもしれませんが、どうか許して下さいね。もちろん、色々な事情がわかった以上は、あのときいったお金の返済はいりませんし、それだけでなく、指輪の分ぐらいのお金は、改めてさしあげたいと思っています。どうか、秋彦の裁判のときには、よろしくお願いします」

華子は、一生懸命にいった。

〈彼女は、私に同情したのではなく、お金で、息子の裁判に有利な証言をさせようとしているんだわ〉

由美は顔をあげて、じっと華子を見た。

「お金なんかいいんです。結婚を楽しみに、一つ一つ準備をしていた私の母は、突然の破談でショックを受け、病気になって死亡しました。私は、大学時代から望んでいた銀行に就職できたのに、そこをやめなくてはならなくなりました。その口惜しさ、辛さは、きっと、おわかりにならないと思います」

由美は、話しているうちに、涙がとまらなくなっ

てきた。
「本当にすみませんでした。遅ればせながら、あなたのお苦しみがわかったからこそ、こうして、お詫びに来たのです」
はじめて、南田がいった。
「不肖の息子で、あなたには、本当に申しわけなかったと思っています。許して下さい。あなたと結婚してくれていれば、どんなにかよかったのに。孫の顔を見ることも出来たのにと、残念でたまりません」
南田は、沈痛な面持ちでいった。
「もういいんです。私はなんとか立ちなおることが出来ると思いますが、殺された井上さんのお母さんは、お気の毒ですわ。私も一度お会いしましたけど、ショックで、道を歩くのも不自由なくらい、落ち込んでいらっしゃいます。私も悪いのですけど」
「出来れば、その井上さんのお母さまにも、会わせて下さい。お宅がこわいのです」
二人は、かわるがわる頭をさげ、小手切の入っているらしい封筒をおしつけたが、由美は受けとらず、立ち上がった。
「では、出かけますので、これで……」

2

由美は、病院に行くと、南田夫妻のことを話した。
「親も大変だね。彼は、なんといっても、二人も殺してるから、死刑を求刑されるだろうね。だから、それだけはくいとめたいと、親が駈けまわっているんだろうね」
次郎は、しみじみといった。
「でも、私の母や、井上さんのお母さんは、もっと可哀そうよ」
由美は、遠くを見るような目をした。
「今度、東京に帰ったら、井上さんのお母さんを訪ねてあげるといいね」

一でも、もうお故郷へ帰ったかもしれないわ。東京には、忌明けまでいるということだったから」

「奈奈子さんは、どうしているのかしら？」

「警察で調べられているんだと思うけど、傷害でなく、殺人未遂になるんだろうね」

由美は、東京の勤め先に電話を入れ、退職したいと申し入れた。勤めたばかりなのに、こうしてしばらく京都にいることになったからだった。

しかし、相手は、事件のことを知っていて、東京へ帰ったら、また、勤めるようにといってくれた。

「うれしかったわ。それにひきかえ、あの銀行の支店長はひどいわ。奈奈子さんの裁判では、あの支店長のことも出るのかしら？」

「事件に直接関係ないから、出ないかもしれないね。今ごろ、ひやひやしてるんじゃないかな」

由美は、次郎が、こうして話が出来るくらい治って来たのがうれしかった。

南田家に、お金を返済しなくてよくなったので、しばらくは、京都にいる余裕が出来てうれしかった。しかし、次郎は、

「あと、四、五日で、東京に戻ろうと思うんだ。寝台自動車で帰って、東京の病院に入るよ。勤め先のこともあるしね」

と、いった。

言葉通り、五日目に、彼は、東京へ戻った。寝台自動車には、由美が付き添った。

「よかったわ。これで安心ね」

由美は、次郎が無事、病院のベッドに横たわると、ほっとしていった。

久しぶりに、その夜は、自宅に帰り、由美も、ぐっすり眠った。

朝、電話がかかって来たので出ると、それは、あの支店長だった。

「このたびは、色々大変だったね。ニュースで見て心配していたよ」

支店長は、猫なで声でいった。

「奈奈子さんてひどいわ。自分が悪いのに人を殺そうとして」
　由美は、冷たくいった。
「そのことなんだけど、奈奈子とは、もう何の関係もないんだよ。彼女は、銀行をやめた人だしね」
　支店長は、あわてていった。
「でも、支店長との関係は続いているんでしょう？」
　由美は、意地悪くいった。
「いいや、違う。彼女とはきれいに手を切っている。そんなことより、君にいい話があるんだ」
「何でしょうか？」
　由美は、つき放すようにいった。
　自分のことを黙ってくれているようにと、お金を出そうとするのだろうと思ったからだ。
　ところが、支店長の話は違った。
「君を、銀行に復帰させたいと思ってね。色々、動行をやめたということになっている。だから、結婚をやめたので、復帰したいといえば、問題はないんだ。南田社長とも相談したが、是非、復帰させてあげて欲しいということだった。結婚は、こちらが紹介したので責任もあるからね。それで、やっと、帰って貰えることになったよ」
「えっ、本当ですか？」
　さすがに、由美は、はずんだ声を出した。
「本当だよ。是非うちの銀行に帰って来なさい。実は、私は今度の異動で、他の店へかわることになると思うので、君が嫌な思いをすることはない。いいね？」
「わかりました。明日、返事します」
「それで、もし、帰ってくることになったら、例のものを返して欲しいんだ。そして、忘れて欲しい」
「はい、わかりました」
　電話を切ってからも由美は、うれしくて、胸がどきどきした。

〈あの銀行にもう一度勤めることが出来れば、嬉ことは、忘れることが出来る〉

由美は、その日、病院に行くと、すぐに、この話をした。

「それはよかったね。でも、僕との結婚はどうなるの？」

「もちろん、結婚して欲しいわ。そして、子供が出来るまで働きたいの」

由美が、はにかみながらいった。

「それならOKだ。自分の意志でやめるのなら納得できるけど、その前みたいなのじゃ後味が悪いよね」

次郎が賛成してくれたので、由美は、早速、銀行に電話して、もう一度、勤めることがきまった。

3

その日の夕方、南田社長から、由美に、小切手がおくられて来た。千五百万円だった。

京都では失礼しました。このお金は、あなたの青春を台なしにしたお詫びです。どうか受けとって下さい。そして、今度は、いい結婚をして下さい。井上さんのお母さまに、何か買ってさしあげて下されば、大変うれしく思います。

由美はじっと、小切手を見つめた。

由美は、井上の母親に何かしてあげたかったけれど、今は、お金がなかった。

〈これは貰っておこう。そして、この中から、五百万円を、井上さんのお母さんにあげよう〉

翌日、由美は小切手を現金にかえると、それを持って、井上の家をたずねた。もういないかもしれないと思ったのに、彼女は、家にいた。

「まあ、由美さん。よく来て下さって」

母親は、顔を輝かせた。

「お母さまのおかげで、指輪がすりかえられたこともわかって、本当に感謝しています。ニュースで見て下さったと思いますが、井上さんを殺した犯人を捕まえることが出来ました」

由美が報告すると、母親は、何度もうなずいた。

「有難う。由美さん、ありがと。これで、あの子も、うかばれると思います」

彼女は、仏壇に線香をあげて、

「由美さんが、来て下さったよ」

と、生きている人に話すようにいった。

彼女は、故郷に帰っても、一人では淋しいので、こうして、井上の住んでいた部屋で、細々と生活しているのだといった。

由美は、五百万円を彼女に渡した。

「どうか、いつまでも、東京にいて下さい。私も、ときどき、訪ねさせていただきますわ」

母親は、びっくりして、何度も固辞した。

由美は、南田家からお詫びとして出たお金だから、とっておく方がいいとすすめた。

母親は、南田家から出たときくと、よけい、こだわった。

「息子を殺した相手から、こんなものを貰うわけにはいきません」

うなずきながら、由美は、それでも、このお金で、お母さまがずっと東京にいらしたら、息子さんも喜ばれると思うと説得した。

しまいに、彼女も、やっとその気になった。

「では、頂いておきます。本当は、これ以上、東京にいたくても、お金がなくなってきていたのです。田舎で、わずかの畑でも耕して、生活していこうと思っていました。ここにいたら、あなたにも、ときどき会えますから、それを楽しみに」

彼女は、何度も頭をさげた。

残りのお金の中から、由美は、母親のお墓をたてた。

(これで、すべての後始末が終わったわ。新しく出

なおそう〉

由美は、銀行に出勤した。

今度は、みんなが、暖かくむかえてくれた。

次郎がいなければ、銀行に復帰できても、空しい気持ちがするだろうが、彼がいることで、由美は、心がみたされ元気になった。

銀行が終わると、次郎を見舞いに行くのが日課になっていた。

その次郎も、ほとんど治って、とうとう、退院の日が来た。

銀行は、丁度休みの土曜日だった。

由美は、甲斐がいしく次郎を世話し、彼の家まで、連れ帰った。

「ああ、家はいいなあ」

次郎は、うれしそうに、部屋を見まわした。由美が、部屋を掃除し、花をかざっておいたのだ。

由美は、お寿司を買って来て、二人で、退院を祝った。

「本当に、もう大丈夫なの？」

「ああ。大丈夫だ。病気じゃなくて、怪我だから、治ったら、もう、なんともないよ」

次郎は、お茶を飲み終わると、由美の肩に手をのばして抱き寄せ、キスをした。

そして、背中へのばした手で、由美のファスナーをはずし、ブラジャーのホックをあっという間にとってしまった。

するりと服がぬげて、上半身があらわになった。

「由美」

次郎は、その胸に顔をうずめた。

「次郎」

由美が、眼をつぶってのけぞった。

次郎は、由美を畳に横たえ、おおいかぶさった。

「由美。愛してるよ」

「私も」

二人は、久しぶりの抱擁に我を忘れて、のめり込んだ。

4

由美は、秋に次郎と結婚することがきまった。

一時は、悲歎のどん底にいた由美だが、事件が解決し、銀行にも復職できて、次郎という初恋の人と結婚できることになったのだ。

由美は、毎日が楽しくて仕方がなかった。

思えば、京都は、色々な意味で、思い出深い土地だった。

大学卒業のとき、次郎に失恋して京都に行って、嵯峨野でレイプされ、強烈な印象のある土地である。

そして、次には、秋彦と婚約旅行でたずねた場所でもある。しかし、そのときは、井上が殺され、レイプの相手に呼び出されるというショッキングな思い出がある。

しかし、そのとき、帰りの新幹線ホームで、次郎と会い、愛が再燃した。

三度目に行ったのは、次郎とである。

このときは、楽しかったし、密室の謎を解くことも出来たけれど、次郎が殺されかけるというハプニングが起こった。

「どうも、京都というのは、私にとって鬼門なんじゃないかしら?」

ある日、由美が次郎にいうと、彼は、一笑にふした。

「そんなことはないよ。色々な事件が起こったからこそ、君とこうして結ばれることになったんだから。そうだ! 新婚旅行には、京都で一泊してから、大阪空港からグァムに行こう。京都で、君との楽しい思い出を作って、今までのことをふっ切るんだ」

彼は力強くいった。

「そうね。でも、心配だわ。また、何か起こるんじゃないかしら?」

「大丈夫だよ。今度こそクリアしないと、永久に、君にとって京都は鬼門になってしまうよ」

「そうね、次郎と一緒だから頑張れそうね」

由美は、次郎の言葉に従った。

「今回は、前に行けなかった大原三千院の方に行ってみようか？」

「ええ」

ということで、新婚旅行は、京都で一泊してグァム三泊というスケジュールになった。

いよいよ、結婚式の当日になった。

東京のホテルで、式を挙げ、由美は、まっ白いウエディングドレスから、着物にお色直しし、最後は、ピンクのドレスにお色直しした。

「きれいだよ、とっても」

次郎がささやいた。

披露宴には、井上の母親も来てくれた。

彼女は、宴の間、ときどき、ハンカチを眼にあてていた。

これが息子の結婚式だったらと思っているのだろう。

夕方、新幹線に乗り、京都へ着いた。

「今日の京都は、今までに来た京都とは違う街みたいだわ」

由美は、銀行の同僚から渡されたブーケを手に持って、次郎の顔を恥ずかしそうに見た。

「今日の君も、いつもの由美と違うみたいだよ」

次郎が、甘いことをいった。

なにげなく、あの日本旅館を見ると、そこは、建物がこわされて、新しいビルが建つことになっていた。

二人は、京都ホテルにチェックインした。

今回はお金が充分あるので、スイートルームを奮発した。

「すてきな部屋ね、うれしいわ」

由美は、部屋を見まわした。部屋が三つもあって、最初の部屋は、ソファやテーブル、テレビなどがある広い部屋である。

次の部屋は、畳の部屋で、床に花も生けてある。

赤いカバーのかかった鏡台もおいてあって、なんとなく、新婚家庭という感じだった。

「次はどんな部屋かしら？」

好奇心にわくわくしながらあけると、そこには、ベッドが二つ並んでいた。豪華なベッドカバーがかけてある。

由美は、顔をあからめて、あわてて扉を閉めた。それ以外に、バスや洗面所、トイレなども、豪華なつくりだった。

「今まで、スイートルームに泊まるなんて、もったいないと思っていたけど、いいもんだねえ。何か、急にえらくなったような気がするよ」

次郎も、上機嫌だった。

「食事はどうする？　どこかへ食べに行く？」

「いいえ。ここでルームサービスで食べたいわ。二人っきりになれるし、こんな素敵な部屋なんですもの」

「では、そうしよう」

5

食事は、洋風のコースをとった。

スープ、オードブルにはじまって、デザートまで、若い二人には、はじめて食べる御馳走ばかりだった。

「おいしかったわ。結婚しても、たまには、こういうお食事をしたいわ」

由美は、甘えるようにいった。

食後は、テレビを見たり、将来の生活設計を話したりしたが、やがて、次郎が、テレビのスイッチを切った。

「一緒にお風呂に入ろうか？」

「はい」

バスタブには、テレビを見ているうちに、お湯を入れてあったので、いつでも入れるようになっていた。

次郎が、服を脱ぎ、まず入って行った。

由美は、長い髪をゴムで上に束ね、ちょっと顔をなおしてから、浴室のドアをあけた。

新婚旅行の第一夜だと思うと、すべてが新鮮に思える。

それは、次郎も同じようだった。

由美は、タオルで躯をかくしながら、お湯をかけ、そっと、湯船に躯をすべらせた。

お湯が、ザザッとこぼれる。

次郎が、手をのばして肩を抱きしめ、キスをした。

「よかったね、結婚できて」

「ええ。本当に有難う」

次郎が先に出て、石けんをつけて洗いはじめた。

「背中流しましょうか？」

「有難う」

次郎の背中を流しながら、由美は、幸せだと思った。

途中で、突然、次郎が、うしろむきになり、由美の躯を抱いた。

「洗ってあげるよ」

次郎は、由美の躯に石けんをつけ、泡だらけにした。そして二人の躯を密着させた。

「好きだよ」

「私も」

「困ったな。こんなになっちゃった」

次郎が、由美の手を自分の下半身に持って行った。

それは、驚くほどたくましく成長していた。

「どうしよう？」

と、相談するようにいっている途中で、耐え切れなくなったように、次郎が、のしかかって来た。

それは、あっけないほど、あっさりと、由美の中におさまり、激しく動きはじめた。

背中のタイルが痛いのを感じながら、由美は、のけぞっていった。

すぐに、動きがとまり、次郎は、おおいかぶさったまま、大きく息を吐いた。

「ごめんね、がまんが出来なくて」

やっと、立ち上がると、次郎は、由美の軀にお湯をかけ、きれいに洗い流してくれた。

風呂から上がると、二人は、裸のまま、ベッドに入り、じっと抱き合ったままでいた。

「いい家庭を作ろうね」

次郎が、しんみりといった。

一時間ほど眠ったあと、次郎は、再び挑戦し、今度は、たっぷりと由美を楽しませてくれた。

由美の意識の中で、井上や、秋彦は、すでに遠い人になっていた。

しばらく喋ってから、次郎の腕の中で、由美は、ゆっくりと眠った。

朝方、次郎は、また、彼女を抱いた。

タフだった。

そのあとは、さすがに、二人とも、ぐっすり眠り、ルームサービスチャイムで、あわててとび起きたときには、八時になっていた。

「大変だわ、あなた受けとって」

そういうと、由美は、浴衣をつかんで裸のまま、浴室にかけこんだ。

次郎は、浴衣を着て、ドアをあけに行ったようだった。

やがて、次郎が、浴室に向かっていった。

「もういいよ」

由美は、それでも、そっと、出て来た。もうボーイはいなかった。

「恥ずかしいわ。ボーイさん、気がついたんじゃないかしら？」

「下着を見て、にやっとしていたよ」

「え？　下着、あ、こんなとこに」

由美は、急いで、ベッドの下に落ちていたスリップを拾いあげた。

「まあ、この部屋に泊まるのは、大体、新婚さんだから、ボーイさんも慣れていると思うよ」

彼も、にやにやしていった。急に、彼も夫という感じになって来た。

6

食事をすませたあと、二人は、チェックアウトして大原に出かけた。長い拝観停止が解決して、門前町も活気をとり戻していた。

二人は、写真をとったり、土産ものを買ったりして、楽しい京都を満喫することが出来た。

「京都に来てよかったわ」

「結婚記念日には、また、来たいね」

茶店で、食事をしてから、二人は、大阪国際空港へ向かった。

グァム行きの飛行機に搭乗したとき、次郎が、にっこりしていった。

「京都では、何も起こらなかったね」

「よかったわ」

由美は、新聞をとって来た。

ホテルでは、読むひまがなかったのだ。

「あ」

新聞を開いて読みはじめた由美は、思わず声をあげた。そこには、南田秋彦に、死刑が求刑されたという記事が載っていた。

由美の声で、新聞をのぞき込んだ次郎は、黙って新聞をとりあげて、横においた。

「もう僕たちには関係ないことだよ」

「そうね」

とはいったものの、一瞬、彼の両親の顔が目に浮かんだ。

飛行機は、すぐに飛び上がり、快適な飛行を続けた。

三時間あまりで、飛行機は、グァムの空港に到着した。

次郎は、入国カードの記入など、すべてしてくれたので、由美は、たのもしく思った。

市内のホテルへ入るまでのタクシーの窓からは、椰子の木やブーゲンビリアの花々が見え、南国へ来

たことを実感させる。
運転手が、グリーンの鳥を指して、チャモロ語で、トウトットという鳥だと教えてくれた。
由美には、見るものすべてが新鮮で楽しかった。
ホテルへ着いて、ディナータイムを予約し、二人は、レストランに入った。
「ここでは、ステーキとロブスターがいいと、きいたけど」
次郎が注文したあと、由美は、あたりを見まわした。ここには、各国人がいる。
気温が高いので、由美は、夏服に着がえていた。
レストランのむこうに、プールがあって、色とりどりの水着で泳いでいるのが見えた。
「日本じゃ、もう寒くて泳げないけど、ここでは、泳げるのね」
「じゃあ、明日泳ごう。由美の水着姿を見たいなあ」
次郎はもうすっかり、夫が板についていた。
ステーキと特大のロブスターを食べたあと、由美たちはショッピングに出かけた。
「明日は、レンタカーを借りるといいね。外車が安く借りられるから」
次郎がいった。繁華街には、世界各国のあらゆるものが売られていた。二人はまず、アロハとムームーを買った。
「パパイヤも買いたいわ。それからレモンとナイフも。夜、お部屋で食べましょう」
ホテルに帰って来ると、二人は、明日の予定を色々考えた。
「ドッグレースにも行きたいし、ポルノ映画もあるよ。ノーカットで」
「まァ、エッチね。私は、ピストルの射撃に行ってみたい」
「怖いなあ」
「サイパンに行って恋人岬も見たいわ」
楽しく喋っているうちに時間がたって、二人は、

新しいベットで、激しい夜を過ごした。

三日間は、夢のように過ぎた。

海で泳いでまっ黒になった二人は、元気に、東京に帰って来た。

「さあ、これから、新しい生活がはじまるんだね」

空港を出たところで次郎がいった。

「あなたのおかげで、幸せをとり戻すことが出来たわ。有難う」

由美は、心からいった。

「早くベビーが出来るといいね。それから何年かたったら、家も建てたいね」

「地下室はいやよ」

「アハハ」

タクシーに乗り込んだとき、カーラジオが、南田秋彦の母親が、自殺したことを報じていた。

「母親って辛い仕事ね。うちの母も、井上さんのお母さんも、みんな……」

由美が、次郎を見た。

「でも、私、母親になりたいわ」

次郎が、しっかりと由美の手を握った。

初出誌＝「週刊ポスト」昭和60年10月18日号から61年4月18日号に連載

京都婚約旅行殺人事件

昭和61年7月10日　初版　第1刷発行

著　者　山村美紗

©Misa Yamamura 1986

発行者　相賀徹夫

発行所　株式会社　小学館

〒101　東京都千代田区一ツ橋2-3-1
電話：編集　03-230-5518
業務　03-230-5333
販売　03-230-5739
振替・東京8-200番

印刷所　中央精版印刷株式会社
町田印刷株式会社

Printed in Japan　造本にはじゅうぶん注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。本書の一部または全部を無断で複写複製（コピー）することは法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害になります。あらかじめ小社あて許諾を求めてください。

ISBN4-09-394131-9 C0093